

特18

874

弘法大師行狀記
全

016889-000-2

特18-874

弘法大師行狀記

一音/著

M27.3

ABE-0107



特18
874

明治廿七歲甲午春縮刊

弘法大師行狀記

京都 貝葉堂藏版



夫我それわが 大師だいしは法徳ほつとくも天下てんか億兆おくてうの人皆ひとみな一ひと所ところあればさらあらめりゆぐりゆめあり
らゆそれ行狀ぎやうじやうを記しるせるもの世よに數多あまた有ありとりのゆめゆめ書畫しよがわあらびききゆぐり
るわ唯東寺たいてう寶藏ほうざうの畫卷がわん物のまじりゆめゆめ作者さくしやわ何人なんびととりのゆめゆめを傳つたへ守思まも
ふよ中古ちゆうこは縮紳たうしん乃な作つくあらんゆめゆめ書しよわ 親王公卿しんかうくぎやうのとまじりゆめゆめ書給しよたま印いんて畫が
わ土佐光顯とさみつあきの一筆ひとひつありまじりゆめゆめ貞和ちやうわ中の物ものゆめゆめ凡六百年おんろくひゃくねんは近ちかきゆめゆめ
今いまに全まづきと奇きあるとりゆめゆめ故ゆめよ其圖そのづを縮寫しゆくしやうとゆめゆめその文ぶんを問あひだひゆめゆめ
とゆめゆめ梓あづさに鏤ちりばめ深信しんじんの徒とよ示しめゆめゆめ南山なんざん無壽むじう金剛こんかう也

聖人入懷靈胎有因遍照垂跡德
齊洪鈞
忽昇兜率得侍慈尊雲管祐罰萬
代長存

吾藏籍中有 弘法大師行狀繪詞者十二卷十輪院住持一音嘗請欲縮寫上木流布人間蓋
將述一代行化之德答萬人仰慕之意也近在江戶遍募緇素癸己冬刻遂成需余題一言余謝
曰千年遠忌已遍廟堂墻宇傾頽未修殆不能蔽風日何以能張法筵乎夫興造經營亦報恩也
豈獨供法誦呪而已哉於是奮然發願將以期年之間一新之夙夜焦心住世間三昧不得綴文
寫字是余之所以辭也一音懇請不已乃使田玄々聚 高祖眞蹟中之字錄余舊作二頌以塞
其責云

癸己仲冬

左大寺學頭沙門海寶沐手謹志

右所藏の本乃まゝ筆者目録とあるものなりけりさて此目録は
後光明院のものとわり 大師を御崇仰ふのむねを記しし行狀記を
聖覽あり 廉感あさからせむのまを裝飾とせん加へられ内外の箱
をは新に造らられ尚を青蓮院の意に筆者尊應准後の由緒を記ししを
お目しせされ目録とあらふに寫し給ひんと 仰せを同く御寄納あ
せられたりけり歴世 帝王に御崇信とことさらけ繼述し給ふ事りの
まうといふ朱子の經藝好ませ給ふ御志とてわたりけりわ本寺よりか
の 帝に宸翰を造らせし観音菩薩の搏換を宮人よりよせられし
事ふああれは儒釋双美を記ししものなりよ領受し給ひし由推せたる由
かたまたまもつとく御心のうらやまありし密教歸仰のかけあは
御あといふのうらやまをあらねりあはちあみく仁王の付屬のち
るあはちあみくをりし書はまはるあは

一 音 識

附言

一此書の詞書もつはら原本に従ひあへてわたくしにこれと改め奉
 一原本には眞名字と假名をつくるとおしといへども今童蒙にたよりせんが爲にこれを加ふ
 一書は原本のまゝ、古意を失はせ縮なしてこれを圖するのみ
 一原本は固より巻軸なれば書は一段との詞書の末にありといへども今便に隨て是を圖せ
 一卷の始に附する所の標題は原本にこれなし中古東寺觀智院賢賀僧正見るもの、便ならん
 とを思ひてこれを加ふいま、た彼僧正の遺意にまかせて書の段毎にこれをくはふるなり

天保四年癸巳十一月上澣

東寺沙門一音謹識

弘法大師行狀記標題

第一	誕生靈瑞	童稚奇異	四王侍衛	俗典鑽仰
第二	出家學法	開持修行	室戸伏龍	金剛定額
第三	登壇受戒	虛空書寫	釋迦湧現	久米感經
第四	老嫗授鉢	大使替書	長安奏聞	存問勅使
第五	度海入唐	修圓護法	長安奏聞	存問勅使
第六	青龍受法	修圓護法	長安奏聞	存問勅使
第七	珍賀懺謝	修圓護法	長安奏聞	存問勅使
第八	珍賀懺謝	修圓護法	長安奏聞	存問勅使
第九	珍賀懺謝	修圓護法	長安奏聞	存問勅使
第十	珍賀懺謝	修圓護法	長安奏聞	存問勅使

行狀記標題

東寺勅給	八幡鎮座	稻荷來影	神泉祈雨
心經請讀	明神衛護	高野結界	堂塔草創
濁水手水	高雄練行	傳教灌頂	圓堂鎮壇
東大寺蜂	高野結界	傳教灌頂	圓堂鎮壇
第六	傳教灌頂	傳教灌頂	圓堂鎮壇
三鈷投所	灑水生樹	灑水生樹	灑水生樹
大內書額	清涼宗論	清涼宗論	清涼宗論
第五	歸朝奏表	歸朝奏表	歸朝奏表
梵僧授經	宮中壁字	宮中壁字	宮中壁字
石碑建立	流水點字	流水點字	流水點字
多生誓約	宮中壁字	宮中壁字	宮中壁字

講堂起立	舍利灌浴	室生修練	南山入定
正月修法	門人遺誠	具影圖書	南山入定
第十一	官位追贈	大師諡號	博陸參詣
東寺灌頂	官位追贈	大師諡號	博陸參詣
第十二	仙院臨幸	仙院臨幸	仙院臨幸
第九	通計五十九箇條	通計五十九箇條	通計五十九箇條
第九	通計五十九箇條	通計五十九箇條	通計五十九箇條
第九	通計五十九箇條	通計五十九箇條	通計五十九箇條
第九	通計五十九箇條	通計五十九箇條	通計五十九箇條

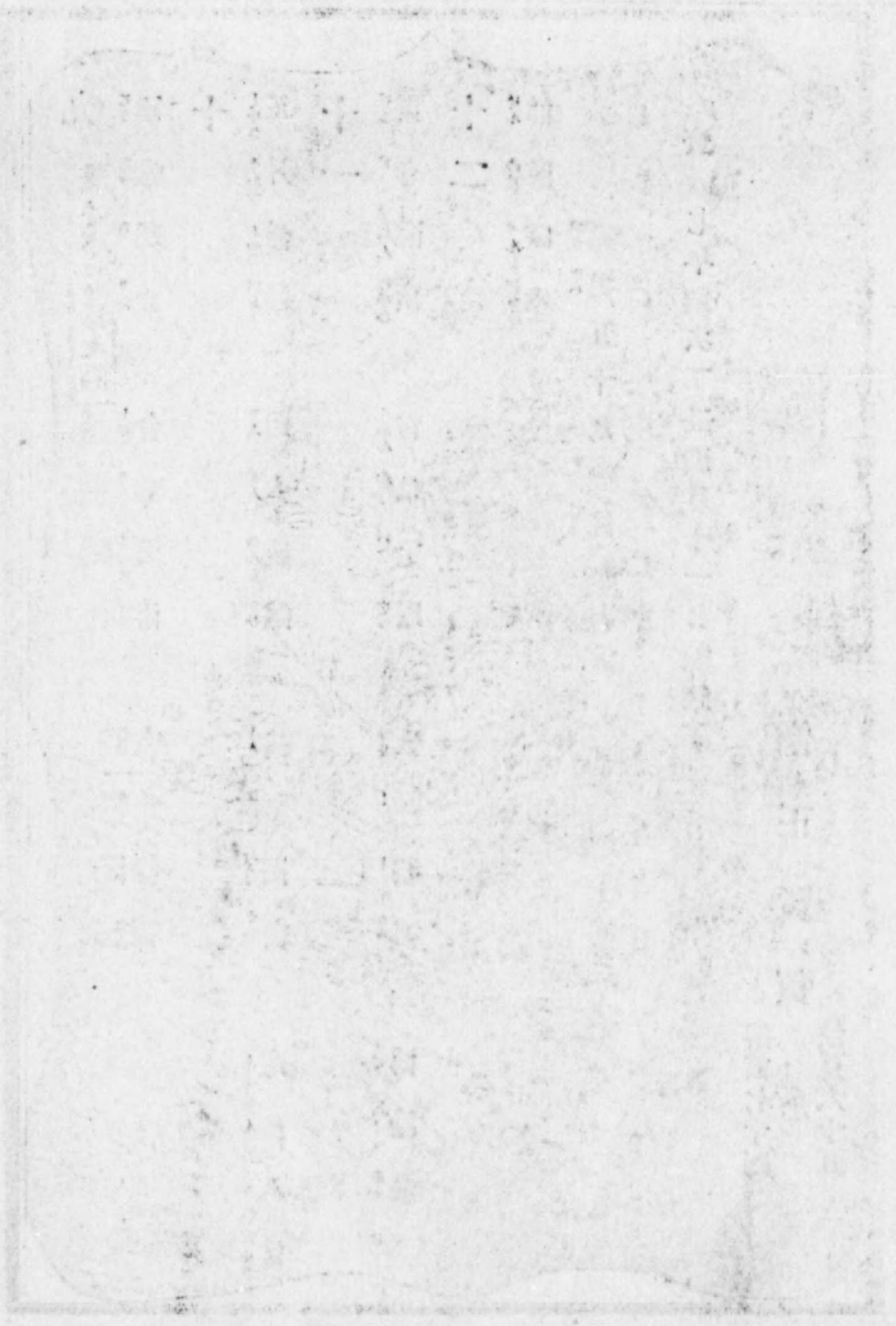
寶曆七年歲次丁丑臘月十一日馳筆了

僧正賢賀

谷齒七十四
法夏六十五



柴手水檜椿之圖









玉堂寺僧珎賀之像
宇賀魂大明神之像



弘法大師行狀記卷之一



夫天地開はじまりて人民の道そなはり佛法相つたはりて因果のこどわりわらはれまより應
 化乃如來跡を秋津洲にたれ法身の大士光を日域の塵に和らげ給り或は宗廟社稷の神祇とし
 子孫を續て萬姓を安くし或は有知高德乃法流とあつて貝葉を傳へて四生をたそけ給ふ外
 には惠澤をばとこし内には道眼をひらく皇家のもどひこれによりてかたく法水乃流是が爲
 にくかししかわれども儒教道教の操行を制度をる虚幻にして眞實にあらせ小乘大乘の心
 性を研覈する因分にして果海をへだつ遮那表徳の實義を談えて法佛内證の極理を乃ぶる事
 はまかしながら秘密眞言の宗あり是則人の膏腴法の肝腑也
 こゝに大聖まします弘法大師と名付奉るひそかみ本地を秘して跡を邊域にたれ給へり降誕
 乃靈瑞量維の尊祥奇特甚多く希異極り無し受業の後進具の間ひろく内外の典籍をうかひ
 ひてよく眞俗の奥旨をさばむ 本朝に津をどふに人なき事を歎き異域に留學して海をわた
 る 勅をかうふらむことをねがふつひにすなはち大日如來第七代の付法京師青龍寺惠果和

尙に逢奉りて兩部の曼荼をつたへ諸尊の瑜伽をあらひ經論と荷負し道具を齎持して帝城東寺の靈樞にをさめられ 皇圖鎮護の秘寶とぞ惠慈笈を負上宮經を講せしよりこのかた佛法我朝に傳り聖人此境に出といへども秘教を宣揚して迷徒を汲引する事今正お新たなり遺流ながくつたはりて朝野うるほひを得ざるはなし終に全身を南洞にとめて遙に鷄園月を待兩眼を上天にめぐらしてひそかに遺跡の塵をかむが見給ふ其一々の行狀まことに權化乃跡多しといへども此たぐひ有難かるべしあまねく傳記にのせて諸家のもてあそび物たりといへども機縁なき人は周覽まばくものうく屏愚去りがたき輩は魯性まどひやそし故に後素のあささわぎによせて前修のふかき徳を顯そこひねがはくは披覽の賢士嘲哂をいたさき握翫の庸生疑殆を殘そ事あくして入定留身の高志をかむがみ誓願捨命の報酬をいたそべし

抑本朝真言の高祖贈大僧正 勅諭弘法大師は讚岐の國多度郡屏風浦の人なり嚴親は佐伯直の氏みなもと天胤より出て流れ還方に及べり 景行天皇の御子稻舂入彦命のまご阿良都別命の男豊島と云し人 孝徳天皇の御時はじめて

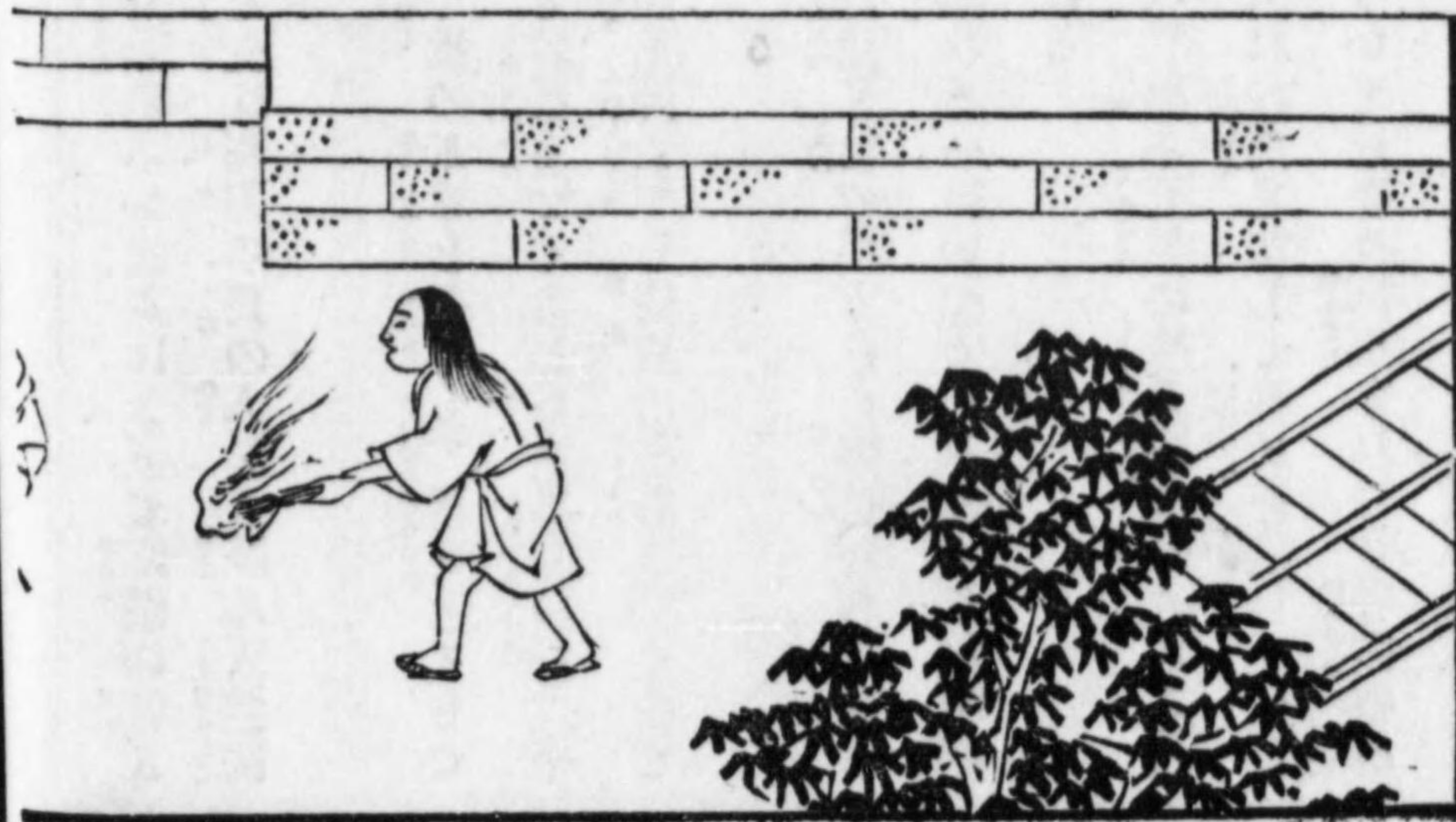
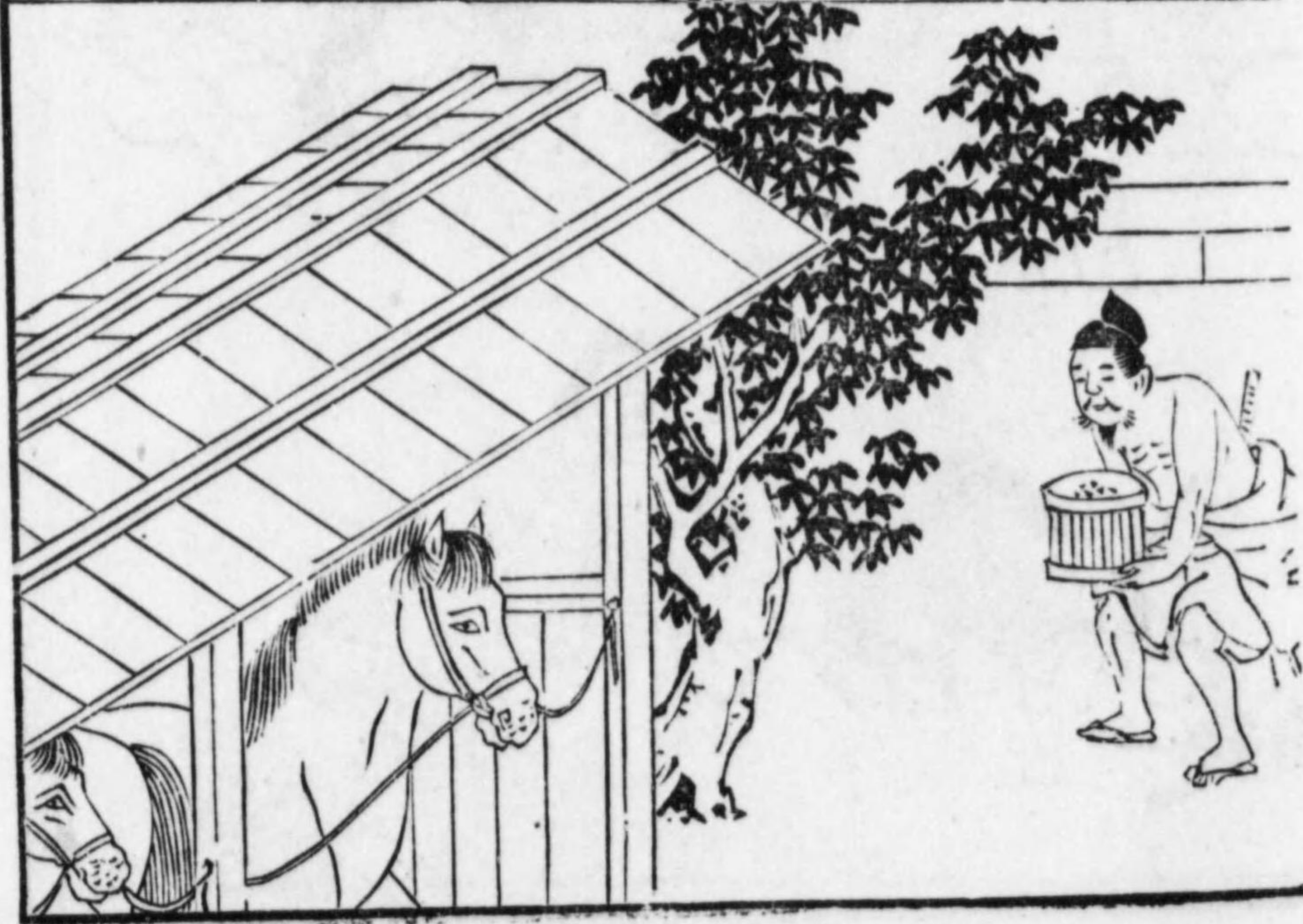
佐伯姓を賜れり其祖日本武尊に 隨て東夷とまづめし功勳世あはふによりて讚岐の國よ地を班ち賜さ此所に家居して胤葉相續で子孫縣令たり尊堂は阿刀の氏の人なり夢お天竺國より聖人飛來りて懷み入と見て妊胎あり

光仁天皇の御宇寶龜五年にあたりて十二の建辰をみち十指の爪掌を合て 辛酉日をもちて誕生の瑞を示せり懷妊月あまりて佳期歳にみちしかども着帶身とくるしめせ出產事おごやかなり彼聖徳太子の班鳩に跡をたれ廣智三藏の神龍に生を降給し奇異の佳祥もかくやと覺侍り

大師御年五六歳の間夢に常に入葉の蓮花の上お坐して諸佛と物がたりとぞ御覽せられけりしかあれども父母にもこれを語たまはせ況他人をや爺嬢ひとへにいつくしみ奉りてたなどゝの玉をもてあそぶがごとし御名をば多布度物と申ける

十二歳の御時父母相語給ふやう我子は昔の佛弟子なるべし夢お天竺の聖人來りてふところあ入と見て妊胎せりしかあればこの子をもちて佛家に入れ沙門となして釋氏を續しむべしと幼少は御耳に是と聞給ふて深くよろこぶ御こゝろありいとけさき御歳あれども芥鷄のお

大師の母公
 瑞夢に依て
 懐妊し
 図





四天王
 童子を
 侍衛する
 と見て
 勅使礼拝
 ある図



そび竹馬のたはふれなくして常に泥土をもちて佛像を作り草木をもちて童堂をたて、内に
そを奉りて禮拜せると事とし給ひけり

昔は公より御使を國々へ下されて民庶のくるしみをどはせ給ひけり其故は君は臣ともち
て躰とそ民は食を持て命とす戮つきぬれば國おどろへ民窮しぬれば禮そなはりがたし疲馬
れ鞭をおそきざるが如し王化にもしふがはせ利潤をさきとして非法を行き民のあやまつ所
は吏の咎なり吏の不善は國主に歸せ君良吏と擇ばせして貪婪の輩をもちぬれば暴虐を恣
にして百姓をわづらはしむ民の憂天に昇て災變をなせ災變おこれば國土亂るこれ上のつ、
しまざるよりおこり下のおされるよりなる國土もしみだれなば君何を以てかやそからむこ
れ故に民の愁をも問ひ吏のあやまりをもたゞさむが爲お御使とつかはされけりされば
勅使を讚岐の國へ下されたりけるに大師幼して諸の童子に交はりて遊び給ひけるを見奉り
て馬よりおり禮拜して曰公は凡人ああらせ其故は四天王白傘をとりて前後に相したがへり
定知ぬこれ前生の聖人なりといふことをと其後隣里の人驚きあやしみ御名を神童とぞ申け
る今童稚の瑞をかむがみるお遙に神化の兆を顯せり經中に深位の薩埵利生の相を説として

常に衆生の依止となりて輪王の徳を備へ頂上に白蓋を現せと見えたり是則四无碍智高く
あらはれ四无量心あまねく覆がまからしむるゆへなり至聖の感せる所推て知ぬべきものを
や

大師天性明敏にして上智の雅量をそなへ給ふ顔回が十を知し古の跡士衛が多をうれへし
昔のためしもかくやとぞおぼえたるこゝに外戚の叔父阿刀の足大夫 伊豫親 双親お相語て
曰佛弟子となさむよりはしかじ大學に入て經史とまをび身を立名とわけしめむにはと此お
しへにまうせて 則舅氏につきて俗典を學び鑽仰をばげまし給ふ遂に延暦七年御年十五又
して家郷を辭して京洛お入十八の御年槐市にまじはり賣舎お遊び給ひ直 謂味酒淨成にし
たがひて毛詩左傳尙書をよみ岡田の博士お逢てかさねて左氏春秋をまなべり
凡螢雪のつとめおこたりなく細錐のはかりと心を盡し給しかば學業はやく成て文質相備る
千歳の日月心の中に明らかに一期の錦繡筆のはしにわざやかあり
御入洛の後石淵の贈僧正勸操を師としつかへて大虚空藏ならびに能滿虚空藏等の法をうけ
心府に染て念持し給けり此法はむうし大安寺道慈律師大唐にわたり諸宗をまなびしとき善

大師御歳おんとし

十五よりて

京洛より上り

のし図



无畏三藏むゐさうざうお逢奉りて其幽旨そのしうしをつたへ 本朝ほんてうお歸來りて後同寺のちどうじ乃善儀大徳ぜんぎだいとくにさづく議公ぎこう又勤
 操さう和尙わしやうおさづく和尙くわしやう此法の勝利このほふしやうりを得給て英傑えいけつのほまれ世よお溢れしかば大師だいしかの面授めんじゆをかう
 ふりて深く服膺ふくやうし給へりしかあれば儒林にゆりんに遊て廣く經史けいしをまなび給ひしかども常つねは佛敎ぶつぎやう
 をこのみてもはら避世ひせいの御心おんこころざし深かりきひそかに思ひ給はく我わがちらふ所ところ乃乃上古なうなうこの俗典ぞくてんに
 は眼前がんぜんにして一期いちごの後の利弼りひつをし此風このふうをやめてしかじまとの福田ふくとんを仰あやむにはと 則すなはち近士ちんしに
 ならせ給て御名おんみを无空むくうとすつさ給ひける
 延曆十六年えんりやく臘月ろうげつの初日はつめひ三敎指歸さんかうしきを撰せんして俗敎ぞくぎやうの益なき事ことをのべ給ふ其詞そのことば云朝市てうしの榮花えいせわは
 念々ねんねんに是をいとし巖敷いんすの烟霞えんげは日夕にっせきにこれをねがふ輕肥流水けいひりうすいを見てはそなはち電幻てんげんのなげ
 き忽たちまちにおこり支離しりり懸鶉けんじゆとみては 則すなはち因果いんぐわのあはれ日ことひことにふかし目にふれて我わがをそ、む誰たれ
 か風ふうをつちがむ爰こゝに一多いつたの親戚しんせき有り我わがをしるる五常ごじやうの索さくを持てし我わがをとほるに忠孝ちゆうかうにそ
 むくといふを以てそ余あまおもはく物の心ものこころ一いつにあらせ飛沈ひせん性せいとなりこの故ゆゑお聖者せいしやの人ひとをかるに
 敎網きやうもうに三種さんしゆありいはゆる釋李孔しやくりこうなり淺深せんせんへだて有りといへども並ならびに皆聖說せいせつなり若もしひとつの
 羅らあ入いなば何ぞ忠孝ちゆうかうにそむかむとか、せたまへり此書このしよ一部いぶ三卷さんくわん信宿しんしゆくの間まお製草せいそうせられた

りもとは雙臂さうてい指歸しきと題だいし給ひけるを後に三敎指歸さんかうしきと改あらためらる其書そのしよ世々つたへ傳りて今いまに緇索しやくさくのもて
 あそびものたり

弘法大師行狀記卷之一終

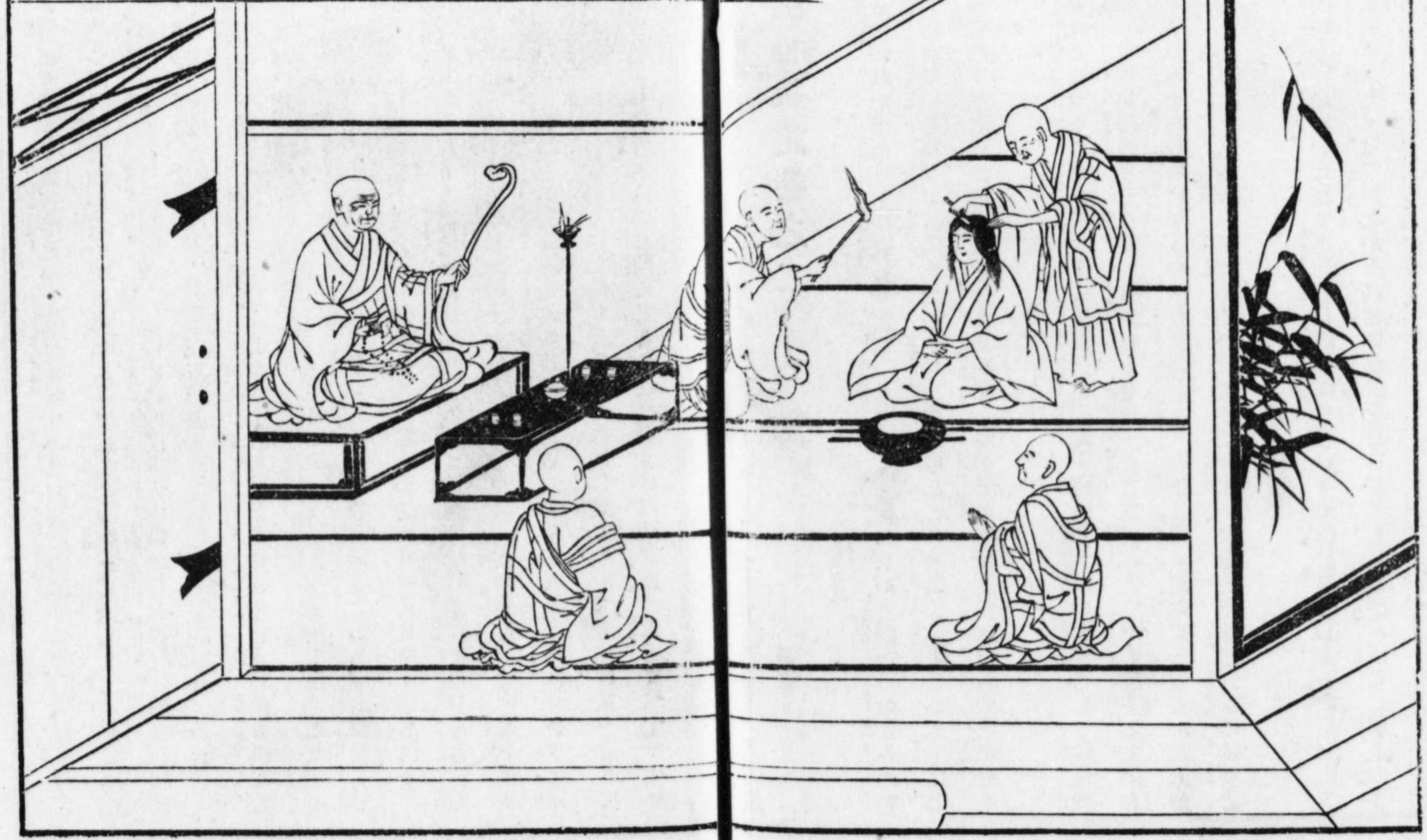
弘法大師行狀記卷之二

大師遂に鬘門をのがれいで山林を涉覽して修練歲月をぬくり給ひしが石淵の贈僧正その苦
行をわはれみ大師を招引し給ひて延暦十二年御歳二十と申しとま和泉國槇尾といふ寺にし
て髻髪と剃て沙彌の十戒七十二の威儀を授奉る御諱を教海と號し給ふ後には如空と稱せら
る

同十四年四月九日東大寺の戒壇院にして唐僧泰信律師を囓て傳戒の和尚として勝傳豊
安等の十師と卒して羯磨教授とし比丘の具足戒を受給ふ此とき御名を空海と改らるまかあ
りしよりこのかゝ戒珠を胸の間にか、やかし徳瓶を掌の中よ携ふ油鉢まもりてかたふか
ま浮囊惜てもらそ事なし大師御筆の牒書あいつたはりて今にいたるまで登壇受戒の模範と
仰けり

大師弱冠のそのかみ鬘塵といとひて飜を落し緇林にまじりて色を壊せしより此かたと
しなへに人事をなげうちて世の煩をわそれ常に幽閑をそみかとして寂黙を心とし給ふ山よ

和泉の国
槇尾寺
剃髮
一々図



り山に入峯より峰にうつりて練行年をおくり薫修日とかさね 曉 苦巖のさがしきを過れば
 雲 經行の跡をうづみ夜羅洞のかそかなるにねふれば風坐禪の窓をとぶらふ煙霞をなめて
 飢をわそれ鳥獸馴て友とそ或は阿波の大瀧の嶽にのぼり虚空藏の法を修行し給ひしに寶
 劍壇上に飛來て菩薩の靈應を顯はし 件の劍彼山の不動の
 或は土佐の室戸崎にどいまりて求聞持の法を觀念せしに明星口の中お散じ入て佛力の奇異
 を現せり則かの明星を海中にひかひて吐出し給ひしに其光水にしづみて今に至るまで闇夜
 に臨み餘輝をは粲然たり 凡 嚴冬深雪の寒夜は藤の衣をきて精進の道をわらはま盛夏苦熱
 の暑き日は穀漿を絶て懺悔の法を凝ましまそこと朝暮におこたらせ歳月や、つもれり
 室戸の崎は南海前に見えわたりて高嶽かたはらにそばだてり遠くは補陀落をのぞみ遙に鐵
 圍山を限りとせり松を拂ふ嶺は嵐は旅人の夢をやぶり苦をつたふ谷の水は隠士の耳を洗ふ
 村烟渺々として水雲茫茫たり吳楚東南折乾坤日夜浮をといふ句もかゝる佳境にてやと思出
 らればべり大師此砌を歴覽し給ひしに修練相應の地形也と思食てやがて此所にといまりて
 艸庵など結びて行ひ給ひしに折にふれて物ことよわはれなりければ我國の風とて三十一字を

かくついで給ひけるとかや

法性のむろと、死けどわがそめば有るのみみかせよせぬ日ぞあき

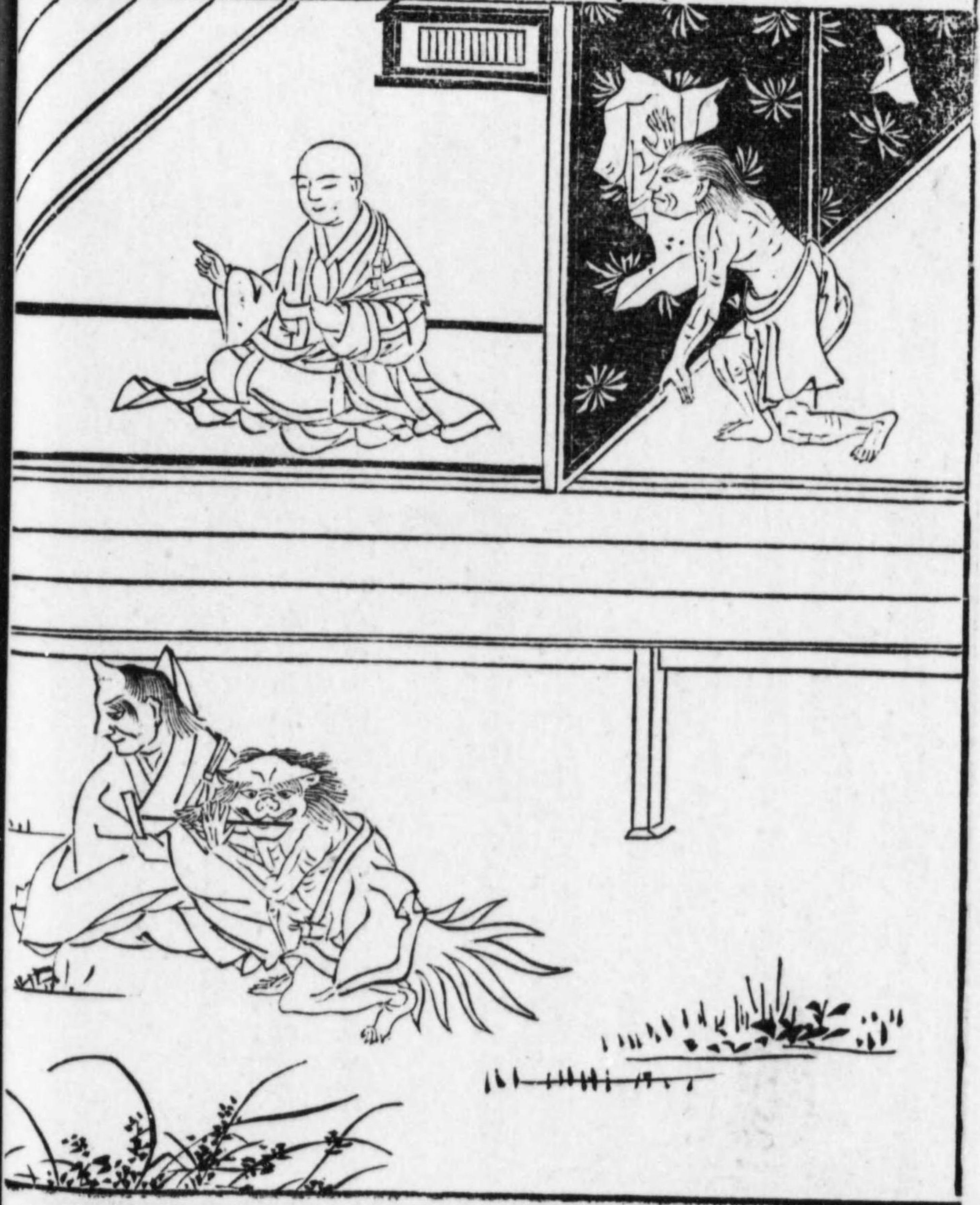
亦夜陰にのぞむごとく海中より毒龍出現し異類の形顯れ來て行法と妨むとぞ大師彼等
 を退んが爲にひそか又呪語を唱へ唾を吐出し給ふに四方あか、やき散じて衆星光を射が
 如くなりしかば毒龍異類 悉くに退散せりその唾のふる、所永く海濱の砂石にといまりて
 夜光の珠のごとくして昏衢と照とぞあむ

室戸の崎のかたはらに卅有余町をさりて勝地有り大師雲臥の便につきて艸履のかまひをな
 し常に此砌にぞみ給しとき宿願を果さむが爲に一の伽藍を立られ額を金剛定寺と名付給へ
 りこの所に魔縁競ひ發て種々お障難をなしけり大師 則 結界し給ひて惡魔とさまぐ御問
 答有り我爰にあらむかざりは汝この砌に望むべからせと仰られて大なる楠木の洞に御かた
 しろを作り給ひまかば其後永く魔類競ふ事なかりさかの楠は猶さかへ枝まげく葉茂して未
 の世までつたはりける其惡魔は同國波多の郡足摺の崎お追込られしと申傳へたり昔釋尊
 月氏の毒龍を降し給ひ眞影を窟内にうつして隱顯の奇異を示し今大師土州の惡魔をまりぞ

け
の
因



え
が
ど
ろ
と
も
金剛定寺
と
創
立
て
住
み
し
時
惡
魔
と
答
話
し
盡
く
同
国
足
摺
崎
へ
追
退



けて影像を樹下に殘して古今の勝利をほどこし給ふなむぞたい佛陀の奇特をあやしむ尤
 又祖師の威徳をたつとむべきものをや
 播磨國行路のはとりに隘廬あり大師修行の次に旅宿し給ひけるお老嫗壹人出來て鐵鉢に飯
 を盛て大師を供養し奉り則由緒をのべて申さく妾もとはこれ行其菩薩の御弟子の僧未だ出
 家せざりし時の妻女なり彼僧の遺言に我入滅の後某の月日菩薩來て汝が室に宿し給ふべし
 といへり指をおりて日をかぞふるに今日そでに期にあたり身いやしといへども忽ち菩薩
 に逢奉るこれ幸の甚しきなり隋喜の心を表して此鉢を奉るなりと申さ大師此いほりを出
 させ給とき老嫗が爲み天地合の三字を柱あうき付給ひければ其字ふりく染てこれをけづる
 になは存せり時氣瘧病にかかされるもの水にそぎて是を吞に病かなら走消除しけりとか
 伊豆國桂谷の修禪寺は大師經行の勝地果隣修練の靈跡ありこのところ魔障のをほかりけれ
 ば大師虚空に向ひて大般若の魔事品をか、せ給ひけるお經の文字忽に顯現して六書八牀の
 點畫みだれざりき其後は魔縁ながく絶て佛法稍ひろまれり大師此所にましまし果隣大徳と

相共につくり給へる尊像今の世に傳はりて靈驗あらたに侍どなむ
 大師誕生の地讚岐の國屏風が浦は岩木の姿もたいから走丹青の綵をあらはして屏風を立た
 るに似たる故に屏風の浦となづけたり大師こゝにしておこなはせたまひしに孤峯の上片雲
 の中に釋迦如來安祥として形を現し給ひき大師歡喜の余にみづからその有様をうつしとい
 められて彼所におかせ給へり其後より此山を我拜師山とも號し又は湧出の嶽ともなづけた
 り凡佛徳をあらはし神感に應せしめ天魔を降し人民をたすけ給ふこと吳江の松よりもまげ
 く楚嶺の竹よりも多し縷陳にいとまなく毛舉盡しがたし
 大師進具の後あま糸く諸宗の名徳を尋て廣法海の要津をとふ中にも岩淵の贈僧正勤操は大
 安寺善儀大徳の入室として久しく三論の奥蹟を極めはまれ一朝に群英に秀たり大師童稚の
 はじめより席を避て旨をうけ丈を函て端を問給ふと寸陰おこたりなく寢食やそき事なし專
 龍樹提婆の遺教を精練しかねて毗曇成實の法相を研覈し給へりまかあれども空論有宗の幽
 旨三諦十玄の妙義なほこき厩樓幻化の行宮にして鵝王眞實の寶所にあらざるにや
 佛前ふして誓願とおこしてのたまこく我佛法あまたがひて常に要法をもとむるに三乘五乘



十二部經心神しんじん疑うたがひありていまだ決けつする事ことあたはせたいねがはくは三世十方さんぜじゅうほうの諸佛しよぶつ我われも不ふ二にをしめし給たまへと一心いっしんに祈請きんじゆうし給たまふに夢ゆめの中に人ひとありて告つげていはく爰こゝに經きやうましまそ大毗盧だいひろ遮那經しやなきやうとなづく是こゝ則すなはち汝なんぢがもどむる所ところなり大和やまとの國くに高市郡たかしのくに久米くみ比道場ひだうぢやうの東塔とうたふの下もとに有ありど即すなはち歡喜くわんぎの思おもひをなし彼所かのところに尋行じんぎやう件けん比經ひきやうをもどめえて一部いちぶ緘せきをどき給たまふに疑うたがひこほる所有しよあり然しかるに本朝ほんてうにしてとひ決けつすべき人ひとなし是こゝによりて始はて渡海わたうみ求法もとほつの御志おんこゝろざしをばげまし給たまさ

此經このきやうこの所ところにおさまれる由來ゆらいを尋たづねればひかし中天竺ちてんぢゆくの三藏さんざう善无畏ぜんむゐひそかみ密機みつぎの熟生じやくしやうをこゝろみほい秘教ひけうの行藏ぎやうざうを知らむが爲ために一葉いちやふの舟ふねを浮うかべ万里わんりの浪なみをわたりはるかに大唐たいてうを辭まして親まのあたり本朝ほんてうよ來給きたりたまひし時高市郡ときたかしのくに王舍わうしやのほどりに庵いほりして一字いちじの寶龜ほうきんと起立きりたせり今いまは東塔とうたふ院いんこれなりしかるに土俗どぞくたい空有くうしゆ乳蘇にゆその法味ほつみを好よし州民しゆみんいまだ秘密ひみつ甘露かんろの妙藥めうやくを肯うけざりしによりて三藏さんざうひなしく巨唐きよてうにうつり給たまふ三粒さんりつの佛舍利ぶつしやりを寶塔ほうたふの底そこにおさめ七軸しちじやくの大日經だいにかにちきやうを刹柱せつちゆうの下もとにこめられ記文きぶんと殘のこしていはく馱視たてはこれ釋尊しやくそんの遺身經王いしんきやうわうはまた遮那しやなの全躰ぜんたいなりしかあれども小國片域せうこくへんいさだいき大機だいぎいまだ熟ませざるによりて此法このほつを此地このちもといめまさら人をまぢ時ときと期ごする所ところなり來葉らいはふに必かならず弘法こうほつ利生りしやうの菩薩ぼさつ來りて世よにひろむべしと記きし給たまひて震旦國しんだんこくに

歸かへり給たまひけるとなむ彼寺かのてらの洗起せんぎに見えたり

弘法大師行狀記卷之二終

弘法大師行狀記卷之三

大師のれたまはく性薰我をそ、先て還源を思ども徑路いまだしら老岐にのぞみて幾か泣く
せいけん 精感ありて此秘門を得たり文にのぞみて心くらし赤縣にたづぬることをねがふ人の願に天
だいたう したがひて大唐お入とを得たりといへり

つひに 桓武天皇の御宇延暦廿三年五月十二日大師御年三十一にして留學の 勅命を奉
くわんぶてんわう りて入唐の宿志をどげ給ふ大使正三位藤原實能卿と、も又肥前國松浦の郡より第一の舟に
しんげつ のりともつちを解て進發せり巨舶を浮て東ふかへりみれば一點の島嶼のぞみの中にさな片
せん 帆を飛して西におもひげば萬頃の烟波眼の前に極まる桑梓さかひへだ、りぬ後會を秋の月
せんぞ り契り行李あどとほし前途を曉の雲にまかせたりこ、に飄風俄に起て驟雨くもにはげしく
こうはたおまお 洪波忽に激て客船まさあくつがへさんどせしかば或は故郷に向ひて鷗鷺の盟空ありな
こと む事を歎き或は巨海にしづみて魚鼈の腹にふれん事を悲む大師も冥護によらざば素願のど
こと げがたき事を思召ふよりて一百八十七所の天神地祇も祈念し給ひて金剛般若の眞文をうつ



遣唐使しんたうし又また隨しゆいひ
入唐にゅうたうの御時おんとき神かみ
祇しよいのりて
悪風あくふうと鎮しづめるふ

図

し諷諭開講ありて神ごとに法施しよてまつるべき旨ねむるに誓約有しかば鐘谷の感空し
からせして水月の應忽にあらはる風やみ浪静まりて八月上旬の末におよびて福州長溪縣
にいさりたまへり先例入朝の船楊蘇州よつきて漂蕩の愁なし海路の間三千里と經たり此度
はからざるに風波の障有りて七百里を増し嶺南道にいたる艱難甚多し擧て盡すべからせ
大師歸朝の後弘仁四年孟冬の頃大使藤中納言賀能卿と相共に船中の立願を果しとげられけ
るとなむ

雲の濤煙の波漫々として大洋際なしといへども日をおくり月を迎て行々として福州の岸に
つぎぬこの頃當州の刺史柳晃痲疾有て任職を辭するによりて新に觀察使を下さるこゝ、お大
使賀能自ら書をつくりて州の司にあふ州の長開きみて則地ふなげうつ兩三度に及といへ
どもあへて返報におよばせ其故は此船楊蘇へはつかせして福州に到りぬるをわやしみ又遣
唐使といふしるしなむども見えざりけるにや偏に風にた、よひたるかどうたがひ思ひて船
を封じ人をおろし濱づらのうるへる砂の上をそゑて更にあはれみなだむる事なし此時大使
大師に申さくこの愁へしのびがたしなぬかるべき謀を失ふ大徳は文筆の主なり願は書

を願し給へどこゝ、又大師書を作りて大使に替りて州の長に與ふ州の長此書を開き見て咲を
ふくみ船をゆるしてさまぐにいたはりとぶらふ事限りなかり況

十月日大師かさねて都に入む事をのぞむよしの書を作りて州の觀察使にあたふ則長安に
奏せしに卅九ケ日をへて州府の力使四人を給りて且資糧を送れり州長よしみとあしてねん
ころに問たてまつる又借屋十三烟を作りて大使並に大師とす系奉るとなむ

其後五十八ケ日經て存問の勅使とつかはさる其儀式やむことなくめでたし是と見る主客涙
とながしき又仰客の使をさして七珍の鞍をわいて大使並に大師を迎らる次々の使どもに皆
かされる鞍を給ふ入京の粧とき盡すべからせ一時の壯觀千載の美談なりとて見るも乃堵の
ことく集る人市のごとし十二月下旬に長安城に入て宣陽坊の官宅に宿し給ひけり

唐貞元廿一年 本朝廷曆廿四年乙酉二月十一日大使賀能は鞍をめぐらして歸朝し大師并
桶逆勢は 勅によりて留學を西明寺永忠和尚の故院に住し給き爰に城中を巡り諸寺又遊
で名徳と訪ふ師依をもとめ給ふに長安青龍寺東塔院の惠果和尚の御事を傳き、て西明寺の
僧志明談勝等の五六人と相共に和尚の御もとへまうで給へり彼和尚は 則大興善寺の不空

大師遣唐
使と共
長安城
入らせ
久因



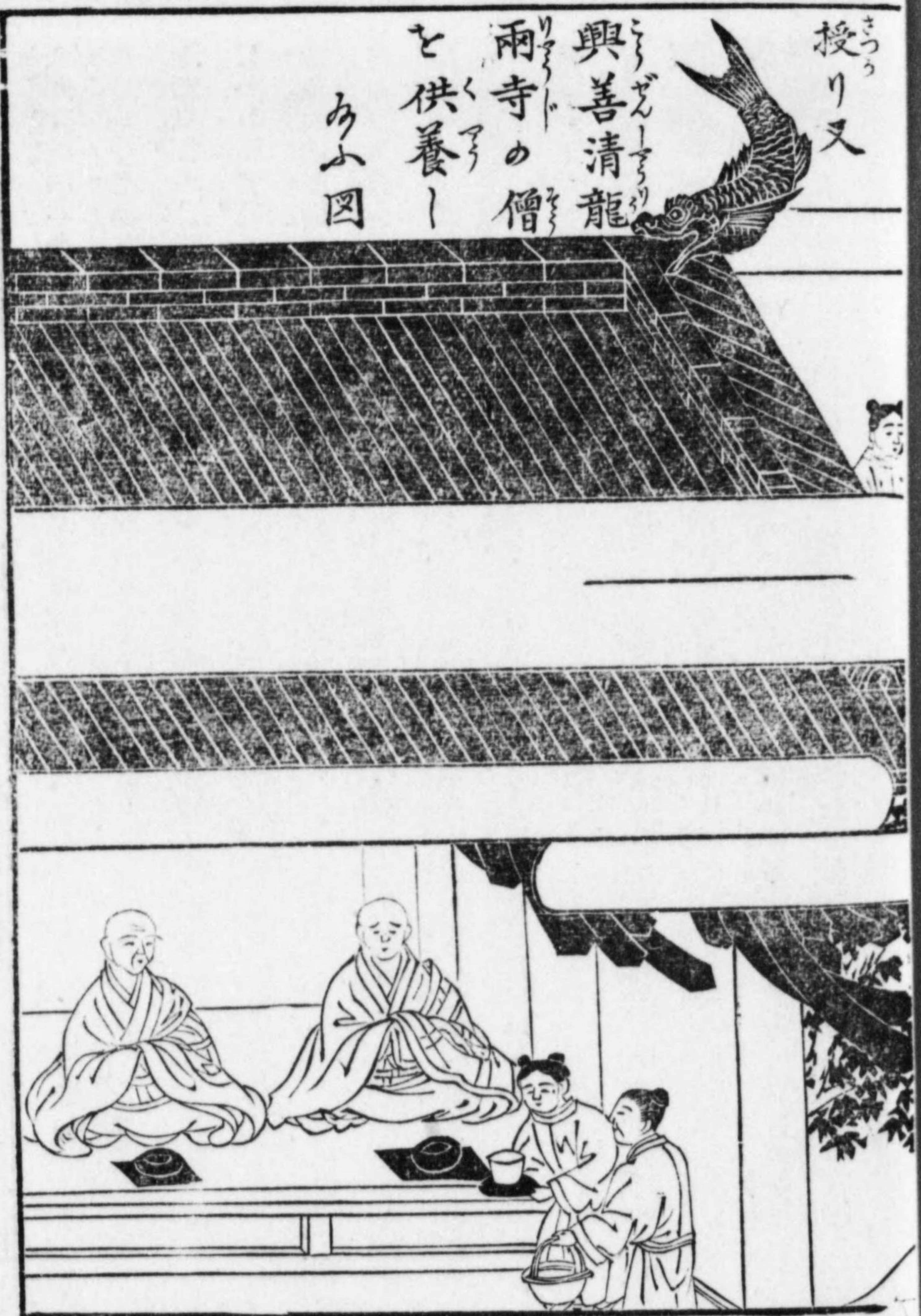
三藏付法の上足眞言大祖大毘盧遮那如來七代の嫡嗣なり徳は當時の尊たり道は 則帝の師
 なり三朝 代宗 宗順宗 これと尊て灌頂をうけ四衆これを仰で教を學そ忽に大師のまゐらせ給
 ひたるを御覽して咲を含み悦をなしてのたまはく吾前より汝ら來らむ事をしりて相待事ひ
 さし今日 適あひみる事を得たり大さによし大さによし報命盡なむと法を付するに人な
 し必そみやかみ香花をろなへ灌頂の法をうくべしと大師 則西明の本居に還りて供具をい
 どなみ調へ東塔の精舎に來り秘密の壇に入給ふ六月上旬に大悲胎藏の曼荼羅にのぞみて五
 部の智水に沐し三密の法印をさづかり梵字の儀軌をまゐり諸尊の瑜伽をつたふ七月上旬お
 更に金剛界の曼荼羅を臨て重ねて五智の瓶水に浴し給ふ彼妙雲開塔のあひだ金薩灌頂の
 どき衆聖嘉會の秘扇を扣て諸佛受職の密壇に入給ひし軌則もかくやと覺えて渴仰のおもひ
 ふかく精誠感あらはれしに及で投花瑞を吐き曼荼くらゐを點せる事兩部臨壇の佳規その兆
 たがふ事をかりしかば和尚大にあやしみ給ひて感歎太ふか、りき遍照金剛の法號も此時
 まさよさづかり得給へり又八月上旬にいたりて傳法阿闍梨位の灌頂をかうふまゝり此日五百
 の僧齋をまうけてあまねく四衆を供養し給ひしに青龍興善兩寺の僧衆等齋筵に臨て尽く

隨喜と 青龍寺の傳に云 日本國の僧空海奉奉レ勅、將ニ摩訶及國一信一物五百余貫文一
 奉ニ上和尚一尼將修ニ飾道場供養一求レ授ニ胎藏金剛界并諸尊瑜伽教法一云云
 眞言印契相續えて傳へうけ梵字梵讀間にもちて學習し給へり又灌頂の壇にのぞみ給ひし時
 梵文素月にあらはれ光相清朗にして御口の中に入とささるうくのごとくの靈感端多しての
 べがたし
 凡付法の傳來をかむがふるに廣智三藏はじめは金智の法化を受て瑜伽の冲邈をさぐるとい
 へどもふた、び南海をわたり遙に西天に遊ていまださかざるを尋ね更に解せざるをならふ
 まのあさり龍智の室に入てかかねて總持の美を盡せり其精を研ぎ給へる奥旨は 併 惠果
 和尚の相承にとゞまれり彼孔宣三千の門徒德行只四人にあり此廣智數萬の法弟印可えらび
 て入箇なり然るに金閣の含光崇福の惠朗等五部と琢磨して四衆の依怙たりといへども其稟
 承を尋れば專金剛の一界にあり兩部の幽蹟を探りて三藏の法輪と繼は是青龍の和尚一人也
 和尚の門人又數千なりといへども傳燈備に六員にあり其中お訓陵の辨弘新羅は惠日は胎藏
 の師位を受け劔南の惟上 通す 河北の義圓は金剛の一界をさづかる兩部を兼たる人は義明
 供奉弘法大師是なり

青龍寺
 惠果阿闍梨
 許梨
 詣り兩部
 此大法を



授り又
 興善清龍
 兩寺の僧
 と供養し
 あり図



大師拜謁はいじつのそのかみ和尚相語あひかたりて法ほふを付せむとそるに人なし待まつと久ひさし來きたると何ぞおそき今吾道いまわがち東とうしおむどのたまへり最後嗣法さいごしほふの嫡資ちやくしおそらくは高祖大師かうそその人あるをや
 大師みづから自古いこの法匠ほつしやうは派はに泳ぎ葉おふに攀たが今傳いまつたる所ところは根ねをぬき源みなもとを盡つくせりと進官しんくわんの文もんに載のられさり
 しかあれば鷲王蓮壇じゆわんぜんだんを開ひら龍りゆう猛鐵塔まうてつたふに入いりしよりこのかた密教みつけう東漸とうぜんして流派りうは數万すまんなりといへ
 ども祖嫡そちやく相續あひつぎて八葉はふの法統ほふとうたるは豈あに吾大師わがだいしあわれまや
 ひそかに渡海たふかい求法きうほふの由緒ゆいしよを思おもふに善無畏ぜんむゐ本朝ほんてうに來きたりし時貝葉ときはいはふを乃なこして恢弘くわいこうとゆづり惠果けいこ
 震旦しんだんにいませる日法資ほふぼふを體つゝむで請益しやうやくを待給まちたまふ聖者しやうしやの感通かんつう凡慮計ばんりよけいがたしといへども尤もつとも是南天しなんてん
 の法水ほふすい遠とほく流ながて陽谷やうこくの群萌ぐんぼうを潤うるし月氏げつしの教風けうふう遙はるかに傳つたりて日域にちよくの迷霧めいむとか、ぐべき基兆きせうあるべし
 されば宋朝そうてうの志盤しばん法師ほふし記きして云い不空ふくうの弟子でし惠果けいこといふ人あり元和げんくわ中ちゆう日本しやもんの沙門しあもん空海くわい中ちゆう
 國くにに入いりて惠果けいこにしたがひて法ほふと學まなび國くにに歸かへりてさかりに其道そのみちを行なせ唐たうの末亂まつからん離りして經疏きやうしよ消しょう
 毀くわいせり今いまその法ほふ日本にっぽんに行なせと書かたり異域いよくとて大師だいしの受學じやうがくをたふとみて秘宗ひしゆうの流行りやうを
 本朝ほんてうよさす 和國わこくに生なを受密じゆみつ教けう志しをはこばむ人誰ひとたれか青龍しやうりゆう寫瓶しやうびんの源流げんりゆうを酌しやく大師だいし慈悲じひの惠けい

澤たくに浴よくせざらむや

弘法大師行狀記卷之三終

弘法大師行狀記卷之四

惠果和尚の御あひ弟子又内供奉十禪師順曉阿闍梨と申おはしき其弟子に玉堂寺の僧珍賀といふ人ありけり其人大師の受法をさまたげむとおもひて和尚に申様 日本にほんの座主ざすたといひ聖人なりとも門徒もんてにあらま宜よろく諸教しよきやうを學まなせしむべし何ぞ密教みつぎやうをさづけ給たまはんやといさめ申事まこと兩三般りやうさんぱんに及およべり珍賀ちんが其夜夢そのよめに神人しんじん來きたてさまぐに降伏かうふくし給ふと見る朝あしたにおきていそぎ大師の御許ごもとに参まりて五躰たいを地に投なげ三拜さんぱいして申ていはく我われおろかにして御受法ごうけほふとさまたげさしかるに今夜夢こんやゆめの中に冥みやうのせめをかうふりさいまよりは永ながく心をひるがへして聖人しやうにんに歸かへり奉たてまつるべしはやく其そのとがをゆるし給へと謝しやし申けるとなむ

本朝ほんてう南京山階寺なんきやうやましかいじに修闍僧都しゆあつそうづといふ人あり事ことにおきて大師の名望めいぼうをそねみたてまつりき大師渡海たひかいのあひだ潜ひそかに護法ごほふをつかはして傳法でんほふをうかがひさうしむ胎藏界たいざうかいの大法だいほふを受給うけしとき護法ごほふを聞きて修圓しゆえんにかたる大師これをしりて金剛界こんがうかいの法ほふをさづかり給たまとさそ盜法とうほふの者ものありとて結界けつがいありしかば火焰郭くわはんくわくをめぐりて護法ごほふちかづく事ことをえざりけり



えんがく
 珍賀神人よ
 せめをう
 呵責を受
 ると夢みて
 大師よ
 懺謝
 の図



惠果和尚大師けいこわくわしやう告つげたてまつりて云いは具言秘藏經疏くわんごんひそんぎやうしゆに隱密おんみつを圖書ずをからざればつたふる事ことわたはせはやく丹青たんせいに命めいじて絹素けんそにうつさしむべしとこれによりて供奉ぐんぷん李真等りしんとうれ十餘人じゆじゆにんを喚まて胎藏金剛界たいざうこんぎやうがいの大曼荼羅だいまんたら及およ傳法阿闍梨だんぱあせりの影像等えいざうとう一十鋪いちじゆを綵畫さいがし給たまへり又また經生きやうじやう二十餘人じゆじゆにんをわつめて一百餘部ひやくじゆぶの經論等きやうろんとうを書寫しやうしやし兼あて供奉ぐんぷん鑄の博士揚忠信超吳等はうしやうしんてうごを召めして鈴杵輪楸れいしりんけうの道具だうぐ一十五事じゆごを新造しんざうし給たまふ其鍊冶けんぎやする所ところの法はふによりて種々しゆしゆの寶物はうぶつを合成がうせいとならびにみな如來にがひの智印法門ちいんぽうもんの表像へうざうなり受持頂戴うぢぢやうたいするも福利ふくり極ごくりなし外ほかには魔軍まぐんを退しりぞけ内うちには煩惱ぼんごうをけそ誠まことふ是國こゝくにを鎮しづむる靈物れいぶつ人を利あする寶器はうきあるをや

惠果和尚入滅けいこわくわしやうにうめつの期きちかづき給たまひければ本尊ほんそん道具等だうぐとう悉ことごとく大師だいしに付屬ふぞくし奉たてまつらせ給たまに其中うちに佛舍利八十粒しやうり就中しゆちゆう金色きんしき舍利一粒しやうり白しろ練ねの大曼荼羅だいまんたら五寶ごぼうの三昧耶金剛さんまいげこんぎやうならびに毘紐ひぢゆ陀毘子たひしの袈裟等けさとうは殊こと又また祖師そし相傳さうでんのたからにて取あてかるからせ是こゝに則すなはち傳法だんぱうの印信いんしん萬生まんせいの依怙いこなりしかあるを和尚わしやう唐土たうどにも留置りゆうぢせ給たまはせ大師だいしに授與じゆゑし給たまへるありがたくやむとなき事ことなり則すなはち告つげてのたまはく我われ髻てうしん乾かんの時ときはじめて廣智くわうち三藏さんざうにみへたてまつるも三藏さんざうたちまちにあはれみ撫なる事こと子このごとくそ内にうちまいり寺てらに歸かへたまふに影かげのごとくしてはなれ奉たてまつらせ竊ひそかに告つげ給たまはく汝密藏にがみつざうの器きにあり

と是こゝにによりて兩部りやうぶの大法だいぽう秘密ひみつの印契いんけいとくくまをびえたり自余みづかの弟子でし若たゞし道若だうじやくと俗ぞく或あるは一部いぶの大法だいぽうをうけ或あるは一尊いそんの秘契ひけいを得えてつぶさにかねならふ事ことなし岳瀆かくとくの恩おんを報はうじ奉たてまつらむと思おもふに昊天かうてんも極ごくなし今いま此土こゝにの化緣けが縁盡じんなむとぞ久ひさくといまるべからせ兩部りやうぶの大曼荼羅だいまんたら一百餘部ひやくじゆぶの金剛乘こんぎやうま教けう及およ三藏轉付さんざうてんぷの物もの并ならびに供養くわうやうの具等ぐとう本郷ほんきやうに歸かへりて海内かいだいに流轉りうてんせよ我われ汝にがが來きたらむ事ことをかみみて命いのちのたえざらんとを恐おそれさ今はそを法はふのありとしあるとさづけ經像きやうざう功こうおはりぬ早く郷國きやうこくに返かへりて國家こゝくにまたてまつり天下てんかに流布りうふして蒼生そうせいの福ふくをませまかれば四海しがいやそく萬人ばんにんたのしまひ是こゝに則すなはち佛恩ぶつおんを報はうじ師しの德とくを謝しやするなるべし國くにの爲ために忠ちゆうあり家いへに於おて孝かうなりゆめくゆるくする事ことなかれとねむころに教誡けうがいし給たまさ

後三條院ごさんじやうのん東宮とうきやうあつしし、時とき小野せのの僧都そうづ成尊せいそん令旨れいしをうけたまはりて具言くわんごんの要事じやうじをしるし申まをされし時密教ときみつけうを傳つたふる家々いへいへ不同ふたうありといへども東寺とうじの一宗いつしゆ大師だいしの法流はふりゆうに付つて諸家しよけに勝すぐれる事こと十種じゆしゆありいはゆる灌頂くわんぢやう殊勝しゆじやう受學うじやく殊勝しゆじやう梵文ぼんぶん殊勝しゆじやう相承さうじやう殊勝しゆじやう誓願せいがん殊勝しゆじやう寶珠ほうじゆ殊勝しゆじやう道具だうぐ殊勝しゆじやう入定にうぢやう殊勝しゆじやう法則はふしよく殊勝しゆじやう外護がいご殊勝しゆじやうこれなり其中そのうち道具だうぐ殊勝しゆじやうの意いを述のべて如來にがひ付囑ふじやくの袈裟けさは永とこく天竺てんぢやくの鷄足山けいそくざんにといまり達磨だつま法信はふしんの袈裟けさは今震旦こんしんだんの曹溪寺そうけいじにあり唯真たいしん真言ごんいん一家いけの印信いんしん道具だうぐのみ源みなもと

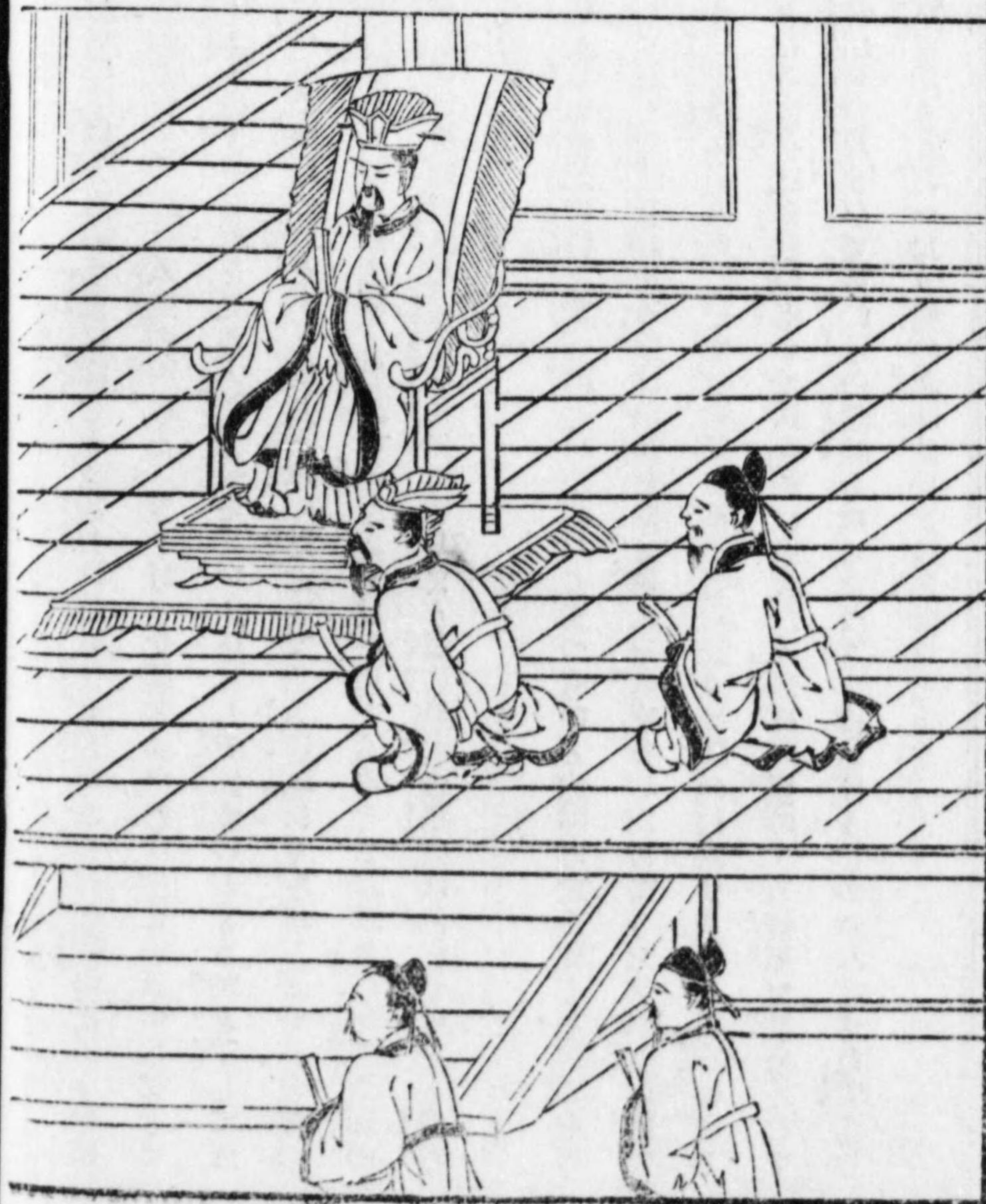
月氏より出て大唐を過ぎ 日本に傳て今も東寺にあり真言の嚴重知ぬべき者歟とか、れた
 り誠におもひみれば大師青龍の嗣付を得給し專鳥卵を利濟せん事をちかへり是によりて西
 天累祖の靈物をつたへきたりて東寺鎮護の道場にとりめ置給ふ法縁此國も厚き事をもてし
 りぬべしまかれば扶桑も生をうけむ人誰か匪石のおもひを凝さいらんや
 惠果和尚入滅の時門人に告ての給はく兩部の大法は如來の秘藏成佛の徑路なり普く法界に
 流傳えて有情を度脱せむとをねがふ今 日本に沙門空海ありて兩部の壇儀印契真言漢梵た
 がは悉く蘊奥をうけたる事瓶をうつそがごとし是凡徒あらず三地の聖者なり内に大乘薩埵
 の心を具し外に小國沙門の相を示せり日あれば月かくれ油盡ぬればともし火きゆ物のつね
 の理なり菩薩もといまらま如來も滅し給われまた真歸せん事をねがふとそなはち唐の永
 貞元年十二月望日躬と蘭湯にそ、ぎ手に密印をむそび告るも微疾を以てし示に終命をも
 てそ昔釋尊の化をやめし赤梅檀の春の烟空しくいたみ今和尚の寂に入る青龍寺の夜の月
 獨りのこる彼は五十二類血の涙をながして依據の主をうしなふ事をなげき是は一人萬民肝
 膽を割て護持のちからたへぬるととやなしむ翌年元和 正月十六日城東龍原に葬したてまつ

るに四衆の合會地にみちて萬人の悲感天を動せり
 大師ごに戀慕の心になえまして石碑の文をかき十二韻の銘をしるされて和尚の德行を
 らはし廟塔に下に立させ給ひける和尚と大師と多生の中あ契約してかはるく密教をひ
 ろめ給へる事をのせられき權者の師資とあらせたまふと見聞の緇素あやしみ貴ままといふ
 となしまるとに類絶たるためしなるべし
 和尚入滅の夜大師追戀の心をいたし悲歎の思にたへま道場に入給ひつ、紅涙と三衣の袂に
 つ、み丹誠を寸心の底みこらして持念し給ふに和尚まのあたり宛然として前に立てのたま
 はくしらすや我と汝と宿契のふかき事を多生の中に相共にちかひて密藏を弘演そ世々互に
 師資となるとたゞ一兩度のみにあらずこの故も汝をそ、めて遠くより來て我法をならはし
 む受法て、に終りぬ吾願をでに足れり汝は西土にして我足をいたく我は東生して汝が室
 に入るべしひさしく留る事なかれ我ささみありてさらむとの給ひき大師ふた、び温顔を見
 たてまつりかさねて芳談をうけ給て夢うつ、もわきがたふ悲喜の御涙袖にあまりき生々師
 資のあさからぬ事をよろこびて書おかせ給へる碑文にも來 非ニ我力一歸 非ニ我志一

招^ま我^わ以^い鉤^{こう}引^ひ我^わ以^い索^{さく}泛^{はん}舶^{ぱく}之^の朝^{てい}數^{すう}示^し異^い相^{さう}歸^き帆^{はん}之^の夕^{たふ}屢^る說^{せつ}宿^{しゆく}緣^{げん}進^{しん}
 退^{たい}非^ひ我^わ能^{のう}去^き留^{りう}隨^{ずい}我^わ師^し孔^{こう}宣^{せん}雖^い泥^{でい}怪^{かい}異^い之^の說^{せつ}而^に妙^{めう}憶^い說^{せつ}金^{こん}鼓^こ之^の夢^む所以^{ゆゑ}攀^{ぱん}一^{いつ}隅^ご示^し
 同^{どう}門^{もん}一^{いつ}者^{しや}也^{なり}載^{さい}ら^れた^りた^とき^かか^き菩^ぼ薩^{さつ}大^{だい}士^しの^の方^{ほう}便^{べん}い^づれ^も形^{かたち}を^をあ^らは^して^て三^{さん}界^{かい}五^ご趣^{すい}の^の間^{あひだ}
 に^あ遊^{あそ}び^つ、正^{しやう}法^{ぽう}を^をひ^ろめ^め衆^{しゆ}生^{やう}を^を度^だし^給ふ^希有^うな^る事^{こと}に^にや^つら^くお^もひ^みれ^ば香^{かう}象^{さう}は^は香^{かう}象^{さう}
 を^を友^{とも}と^し輪^{りん}王^{わう}は^は輪^{りん}王^{わう}を^を父^{ちち}と^し師^しと^し云^い資^しと^し云^い皆^{みな}成^{じやう}覺^{かく}の^の如^に來^ら得^{とく}道^{だう}の^の薩^{さつ}埵^たを^をり^昔迦^か葉^{えつ}佛^{ぶつ}の^の時^{とき}ふ^た
 り^の菩^ぼ薩^{さつ}あ^りき^兄を^をば^日珠^{しゆ}と^し云^い弟^{てい}を^をば^月鏡^{げう}と^いふ^たが^ひに^願と^おこ^し契^{せき}を^をひ^そび^て世^よ々^に
 知^ち識^{しき}と^成て^生々^に正^{しやう}法^{ぽう}を^をひ^ろめ^めひ^とち^かふ^彼の^の日^{にっ}珠^{しゆ}月^{げつ}鏡^{きやう}は^は釋^{しやく}迦^か滅^{めつ}度^だの^の、^ち馬^ま鳴^{なう}龍^{りゆう}樹^{じゆ}と^あ
 ら^はれ^外道^{だう}の^の邪^{じゃ}林^{りん}を^を摧^{さい}て^如來^にの^の法^{ぽう}輪^{りん}を^を轉^{てん}せ^り彼^をも^ちて^是を^を思^{おも}ひ^龍猛^{まう}龍^{りゆう}智^ち西^{さい}天^{てん}に^に行^{ぎやう}化^けし^金
 智^ち廣^{くわう}智^ち中^{ちゆう}州^{しゆう}に^に來^ら遊^{りゆう}し^惠果^{くわ}弘^{くわう}法^{ぽう}東^{とう}隅^ごの^の傳^{でん}燈^{とう}を^をち^かふ^三國^{こく}に^に師^し資^しと^して^たが^ひみ^主伴^{ばん}と^成給^{じやう}事^{こと}
 皆^{みな}是^{なり}宿^{しゆく}願^{げん}の^のいた^とと^ころ^契約^{やく}の^のし^から^しひ^るゆ^へな^るべ^し蛇^{へび}に^にあ^らざ^れば^蛇の^のあ^しを^をし
 ら^せ古^こ德^{とく}の^の行^{ぎやう}跡^{しき}誠^{じやう}に^に下^げ愚^ぐの^のは^はか^る所^{ところ}に^にあ^らざ^るを^をや
 大^{だい}唐^{たう}の^の宮^{きゆう}中^{ちゆう}に^に三^{さん}間^{かん}の^の壁^{へき}あ^り晋^{しん}の^の右^う將^{しやう}軍^{ぐん}王^{わう}義^ぎ之^の筆^{ひつ}跡^{しき}を^をと^いめ^たり^{ける}年^{ねん}久^{きう}な^りて^破壞^{わい}した^り
 け^れば^二間^{かん}を^を修^{しゆ}理^りせ^られ^き筆^{ひつ}を^をく^だせ^人な^かり^{ける}を^を唐^{たう}帝^{てい}日^{にっ}本^{ぽん}の^の和^わ尙^{しやう}に^に書^かし^め給^ふべ^き

よし勅^{ちやく}ありければ大^{だい}師^し左^さ右^うの^の手^て足^{そく}に^に筆^{ひつ}を^をと^り御^{おん}口^{くち}に^に筆^{ひつ}を^を合^あて^五所^{しよ}あ^五行^{ぎやう}を^を同^{どう}時^じに^にか[、]せ^給
 ふ^今一^{いつ}間^{かん}に^には^は墨^{すく}を^をと^りて^壁に^に入^い壁^{へき}の^の面^{めん}に^にそ[、]ぎ^かけ^させ^給ふ^に自^じ然^{ぜん}に^に樹^{じゆ}と^いふ^字あ^なり^て
 間^{あひだ}に^にみ^てり^主上^{しやう}も^も臣^{しん}下^げも^もこ^れを^を見^みる^人驚^{おどろ}歎^{たん}せ^せと^いふ^事な^し帝^{てい}敵^{てき}感^{かん}の^のあ^まり^勅を^を下^{くだ}して^五
 筆^{ひつ}和^わ尙^{しやう}と^なづ^けら^る臨^{りん}池^ちの^の功^{こう}を^をあ^らは^し入^い木^{ぼく}の^の跡^{しき}を^をま^なぶ^人唐^{たう}朝^{てう}に^にも^おほ^しと^いへ^ども^大
 師^しひ^とり^垂露^{すい}の^の點^{てん}を^をと^いめ^給ふ^事我^わ朝^{てう}の^の德^{とく}を^をあ^らは^せに^にあ^らせ^やさ^らば^眞濟^{せい}僧^{そう}正^{しやう}大^{だい}師^しの^の
 筆^{ひつ}跡^{しき}を^をひ^め給^ふ詞^しに^に啄^{たく}雞^{けい}奔^{ほん}獸^{じゆう}の^の畫^が獨^{どく}九^{きゆう}州^{しゆう}に^にと^いま^り涌^{ゆう}雲^{うん}廻^{くわい}水^{すい}の^の點^{てん}盛^{せい}に^に八^{はつ}紘^{きゆう}を^を變^{へん}と^侍も
 と^わり^ある^もの^をや
 又^{また}帝^{てい}の^のたま^はく^和尙^{しやう}此^こ國^{こく}に^に留^{りう}たま^へ師^しと^たの^のみ^たて^まつ^らむ^と大^{だい}師^し申^{まを}たま^はく^身を^をわ^せれ
 命^{いのち}を^をか^ろく^して^遠く^蒼溟^{せい}を^をわ^たる^事は^佛法^{ぽう}を^を傳^{でん}て^邊國^{こく}を^を利^りせ^むが^ため^なり^たと^ひ帝^{てい}の^の師^した
 る^事を^をう^とも^我本^{ほん}懷^{くわい}に^にあ^らせ^とぞ^申さ^せ給^ひける^帝勅^{ちやく}あ^りて^師の^のれ^たま^ふと^ころ^誠に^に理^りあ
 當^{あた}れ^り我^わと^いひ^るに^に及^{およ}ば^せ朕^わが^年を^をで^にか^かは^せきた^り願^{ねん}は^は一^{いつ}期^きの^の、^ち佛^{ぶつ}惠^ゑと^期せ^んと^て
 信^{しん}仰^{ぎやう}を^を表^{ひょう}し^來緣^{げん}を^を契^{せき}たま^ひて^菩提^{だい}子^しの^の念^{ねん}珠^{しゆ}を^をた^てま^つら^せ給^ひけ^りし^かの^のみ^なら^せ賞^{しやう}賜^みし
 給^{たま}へ^るもの^の算^{さん}々^くな^りと^見へ^{たり}彼^かの^の念^{ねん}珠^{しゆ}は^はい^まに^に東^{とう}寺^じに^にと^いま^りたり

唐帝の勅よ
應ト宮中の
壁に文字と
書みふ図



大師城中を巡遊し給ふあひだ流水のはどりあのみ給ふに蓬の髪みだれて肩のまはりにか
 り藤の衣やふれてひざだにもかくれざる童子一人出来てとひたてまつりて云く和尚は是
 日本にほんの五筆上人歟大師答てのたまはくしかなり童申さくしかあれば其流水に字を書給はん
 やと大師則かれが詞ことばあしたかひて清水を讀むる詩を書給ふに文點みだれせして流下けり童
 子これを見て屢しばしば感嘆の氣色あり童又我もかきてむ和尚見たまふべしとてそなはち水のう
 へに龍といふ字をかきけり文字うかびあらはれて流る、事なし但右乃小點とうたせ大師是
 と見ていりに此點をばおとし給へるぞと問給ふにわそれにけりとて次で件の點を付るとき
 此字響をおこし光をいならちて眞龍となりて空あひのぼりにき爰に彼童我はこれ文珠なりと云
 てうさけを様にうせにけり藤衣は瓊瑤にてぞ有ける是大師の手書をこゝろみひとて大聖文
 珠きたりたまひけるあるべしおほよそ在唐の間かくのごとくの不思議一にあらせ或は犬を
 飛し鬼をつかひ或は鳥をといめ菓とおとせる術つぶさし記するにいとまわらせ
 大師在唐の時中夏邊州乃間にあそびてあまねく顯密の名徳にまみへて三藏の奥區を尋廣く
 釋儒の叡匠に訪て五明の幽致ときはめ給ふ中にも長安醴泉寺にましまし、時々のあたり般

若牟尼室利井に牟に南天の婆羅門等に相闕して義淵の淺深を伺ひ法味の甜苦を談じ給ふ彼牟尼
 三藏は中印度那爛陀寺一萬餘僧の綱統たり般若三藏は龍智菩薩乃所よして瑜伽比大教を學
 び受らる此菩薩今猶南天に見在し給て秘密の法輪を轉じ給ふ面貌三十許の如くして其年九
 百餘歳におよべる旨これを語申されき眞言の甘露を嘗ましめて不老の驗益をなたまへる
 事ありがたきためしなるべし

又三藏大師さんざうお告奉りて吾生緣は屬寶國なり少年より道に入五天を経て法をもとむ常に傳
 燈を誓て此間に來り遊べりまかあるよ東海に縁なくして志願遂ざることゝ恨む今譯すると
 ころの新花嚴六波羅密經等及貝葉の梵籙三口和尚本國おもちさりて供養宣揚し給べしねが
 はくは縁を彼國に結て元々を拔濟せんとしたまへり東隅の片域いやしといへども西土の高
 徳化をしたふさだめて知ぬ吾邦は是大乘相應の佳境ありといふことを
 又越州の節度使中丞大都督は一時の大才なりこれをそめて蒙を披き生を濟べきものい
 ばくぞねがはくは遠方に流傳せしめよと請じ給ひしに經論傳記および詩賦碑銘卜醫等の内
 外の教法ひろくもとの得たまへり凡日車といましがたく發期たちまちにせまる事をなげき

文珠菩薩
童子と現
大師の書法
を試す図



尊容の圖畫典籍の繕寫ちからをつくし人と雇て衣鉢をなげ食糧を忘給しかば十年の功是を四運にかね三密の印これと一志につらぬくとの念まへり

弘法大師行狀記卷之四終

弘法大師行狀記卷之五

大師學法事終て寫經功なりしうば大方乃法海を決て東垂の亢旱と潤さんとおぼしめして本國の使高階真人と、もに歸朝せん事を上奏し給ふ橘通勢同 歸朝唐帝憲宗これをきこしめし天恩めぐみおほひて地望たちまちみ達し給ひしによりて元和元年本朝大 同元年八月の日船を浮べ纜を解し時祈請ありてのたまはく吾習ところの秘密の教法もし流布相應の地あらば今投ところの三鉢早いたりてその所を點せしとて 本朝にむかひ給て遙に紫雲の聳ぬるを見て金柁と投給ひしかば 則 飛ゆる雲の中にいりぬ京畿の士庶名殘を惜みたてまつり道俗の諸衆數をしらせあつたり此事を見てまつりて驚あやしまずといふことなし此杵も是龍猛菩薩龍智阿闍梨に授給ふ所なり金剛智南天にいませし時龍智の付属をうけましくしよりこのかた東土よつたはりて不空惠果師々相續で大師にさづけ給さまうきは傳法の信物として列祖これをおもくせり今千里萬里の烟波に臨て遙に西朝繁葉乃印璽を投たまふ曾て凡俗の思議をよびがたし聖人感通のいたれる事をしめそにあらせや其後渡海のわひだ風波の難お



大同元年
 飯朝の時唐
 士より三
 拵と擲て木
 邦に密法
 相忘の地
 をト
 ぬ
 四



こりて漂没のあやぶみありし時大師ふかく誓給て我諸天の威光をまし國家の福利をたすけ
 ひがために一の禪院と立て法によりて修行せん善神護念してはやく本郷に達せしめ給へど
 祈念し賜しに猛風たちどころにやみて逆浪こどぐくしづまりしかば着岸といこなりなり
 りき今の高野山金剛峰寺はかの素願をはたされんために建給所の仁祠あり飛行の三鈷父此
 所に留れりすとよこれ奇異の勝事あるをや
 平城天皇の御宇大同元年十月又大師歸朝し給 則 請來の法文道具等一卷乃書に甄録して大
 宰の大監高階の真人遠成につけて表をたてまつりて奏聞せり進官せる所の經論二百一十六
 部四百六十一卷こ乃外兩部曼荼羅の尊像傳法阿闍梨の眞影師々付属の道具等其數稍多し皆
 これ國を護る城郭世を救ふ舟楫なりつふさには表乃文にみへたり
 おほよそ釋尊滅度一千六百六十餘歳又及て 唐玄宗皇帝開元年中に無畏金智の兩三藏長安
 ふ來て翻經をつかさどる密教此時中夏に盛なり其後九十餘廻の星霜をへて大師李唐に入て
 傳燈寫瓶の願を果し桑梓み來りて虚往實歸の旨をあらはせり彼道照道慈は異域に津と問ふ
 專七宗五藏の顯綱にかゝり惠慈慧灌の 本朝に道を弘むる只二諦八不の權關にといまる

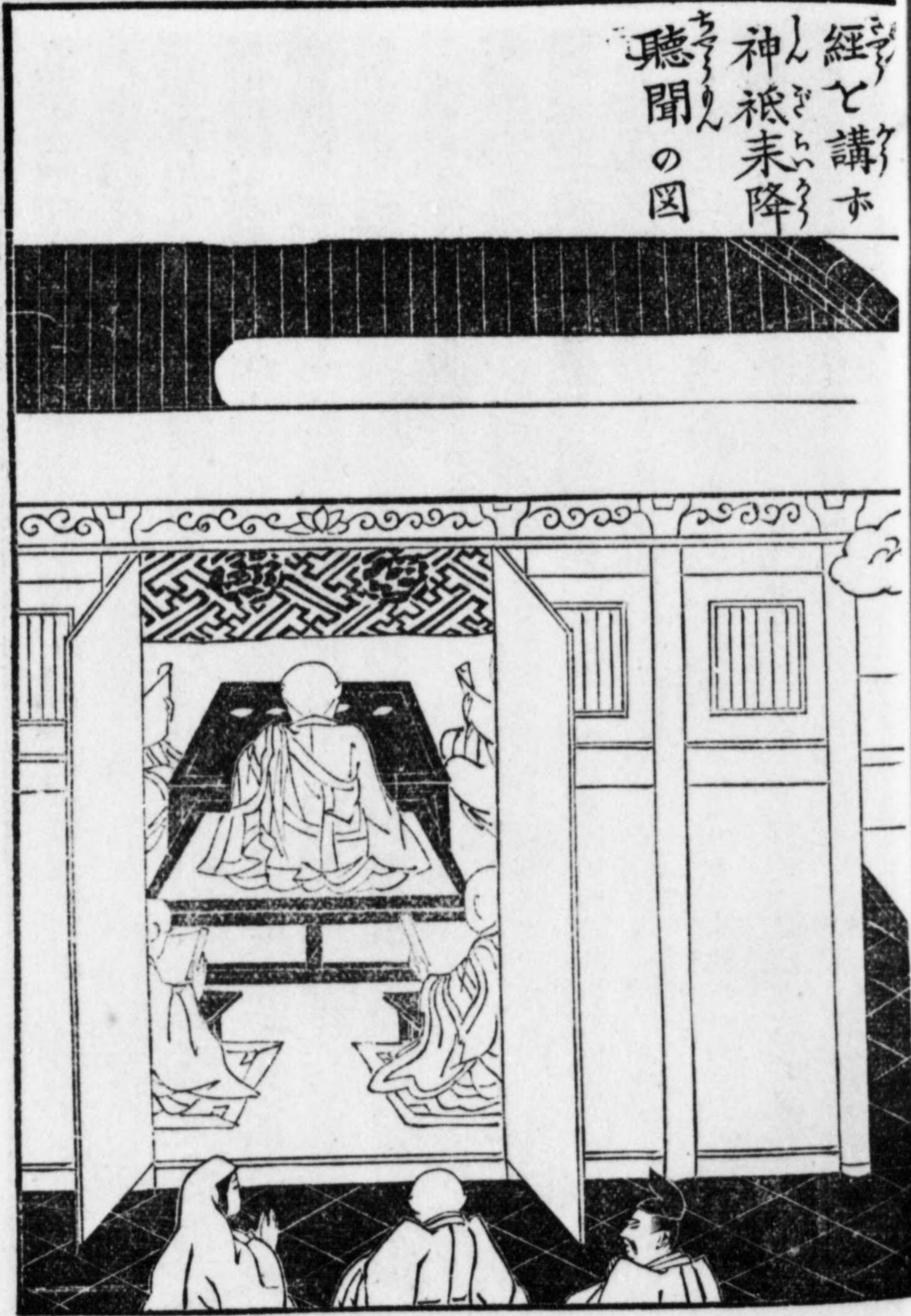
爰に大師はじめて三密の惠炬をかゝげ五智の法水とくみ給しに及て鳥卵のうち併 青龍の
 流よりるはへりまかあれば大師の法身如來第八の嫡嗣として 本朝眞言初一の高祖たり
 同二年四月ふ府牒を下され西府逗留の程は觀世音寺に住し給ひて其年 勅に應て平安にい
 らせたまひにけり

大師御入唐の時鎮西にして海上衛護のために宇佐の八幡宮を始め 奉て有勢の明神に祈請
 ありしに豊前國賀春大明神詔しての給はく聖人法をねもくし命をかるくして終に大唐のさ
 かひにおもむくこれまよしかるべしねがはくは吾聖人よ 隨て共入唐してうからせ護
 持をあそべしと有まかば大師ことに歡喜し給きかの 趣忘がたくして大師歸朝のとき賀春
 明神の寶前にして申給たるは遙に大洋の波濤とわたりて今萬里の郷國ふかへる靈神の衛護
 せるところ心肝に銘せいま此山をみるに岩石たかく疊で草木さらふおひせ我法力をもつて
 樹木をねはさんとの給れば明神感嘆し給とかぎりあし 則 香水と加持して巖岳にそゝぎ
 給しかば樹木さちまらよおひつらなりて千株万株の松のみどりば霜雪にもさかへてみへ一
 入再入の花の紅は煙霞映じてあざやかなり洗溪の梢にもかはらせ鄧林の枝もかくやと

大師祭の東
塔よ大日



經と講お
神祇未降
聽聞の図



ぞ覺ける神徳の帷馨 ことをわらはし佛智の孔 昭あることをよろこぶ其後たへせして今
もしげき山にて侍るとかや

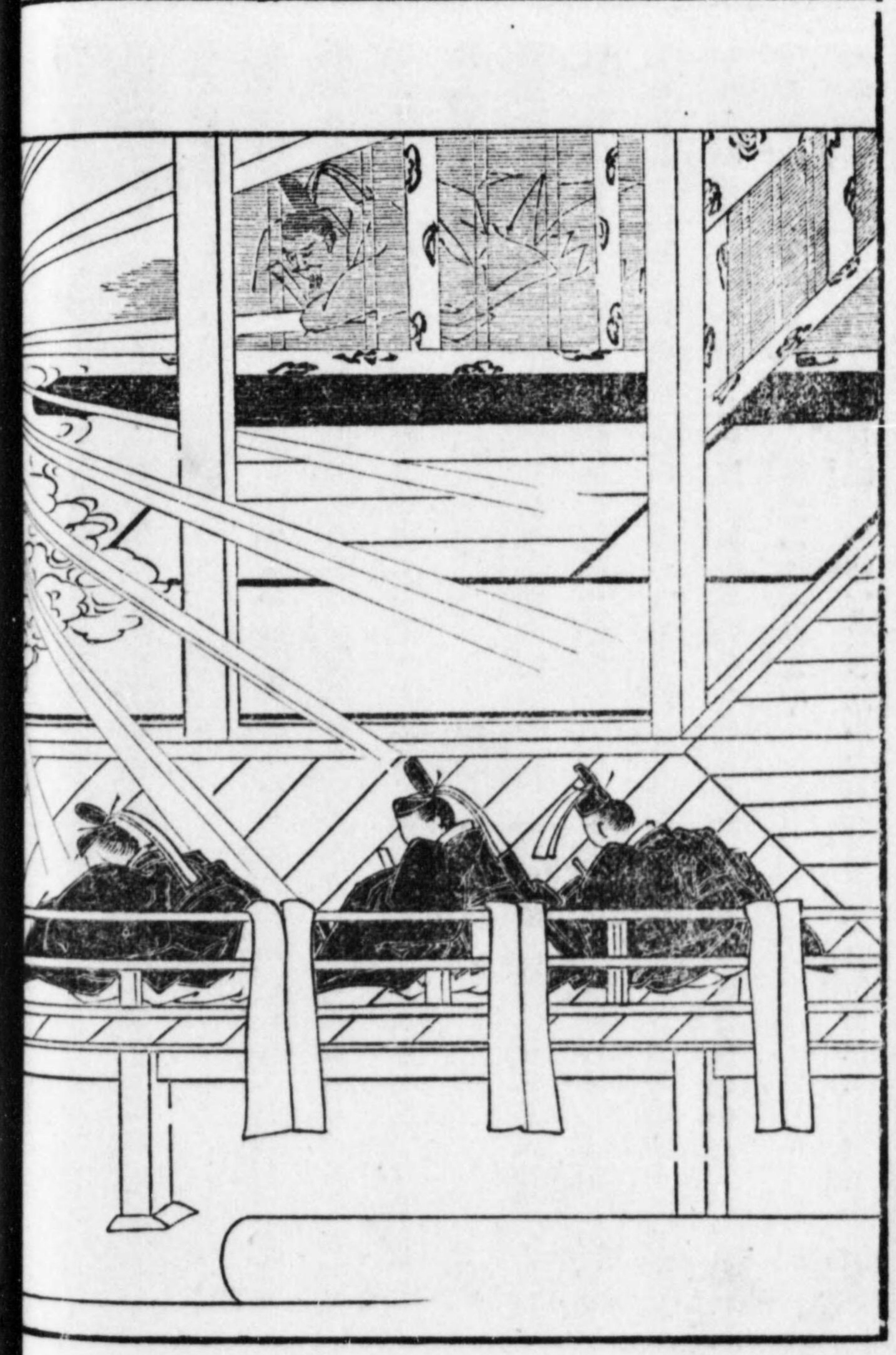
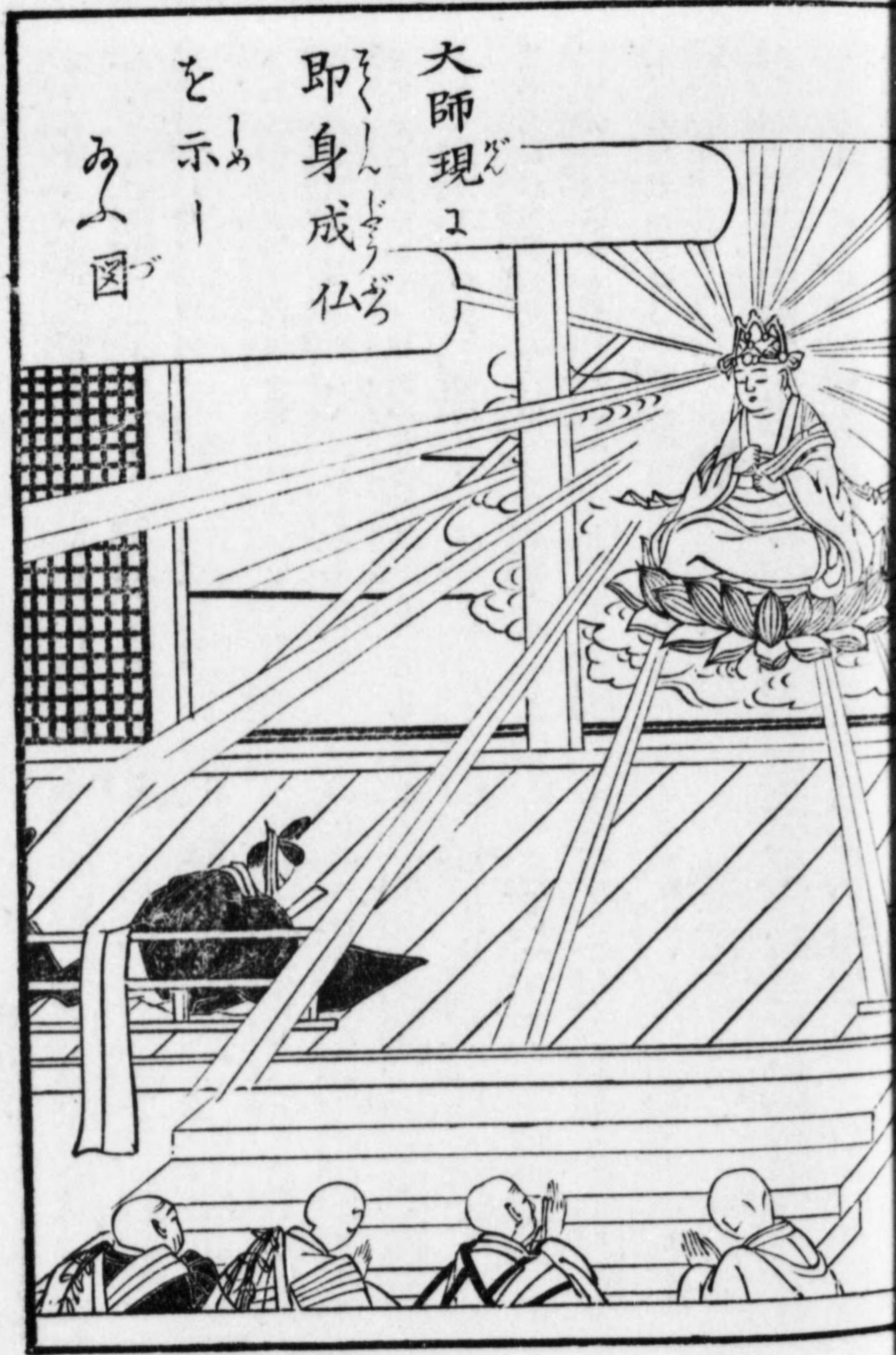
大同二年仲冬八日實慧眞濟等の龍象を卒して大和國久米の鷹塔において善無畏の疏を付て
大日經の文を講したまひし時一萬餘の有勢の神祇まのあたり容儀をわらはし請席に臨て聽
聞をいたし衛護をなし給へる事彼寺の記に見へたりこれ則大師此處にして無畏所納の經王
を得給て入唐留學の宿志を遂給ゆへにや廻朝の最初此砌に來臨して三藏の秘決を傳て七軸
の幽旨とのべ給へる事誠み故ある物をや

柏原天皇延暦年中長岡の故京をうつして平安の新宮を建らる其後嵯峨の 聖帝登極の始
弘仁元年に大内の周郡殿寮の諸門華構をてにど、のをとといへども名額いまだなかりしか
ば東西の門の額は 天皇みづから龍管を揮て宸筆を下さる北方は橘の太夫逸勢をしてか、
しめらる爰に 勅宣ありて大師の神筆唐家に美譽をふるへり 帝都南面の三門並に應天門
の額におゐては和尙としてか、しむべしと 天詔頻みくだりければ大師そなはち 勅に應
じて禿筆を染給ふ鸞鳳碧落にかりりて象とふくみ龍麟蒼海に遊て義をはらめり張芝羲之も

妙を奪はれ鍾絲蔡邕も恥をいだかひか又應天門の額うち付て後見たまひなれば應の字の上
の圓點かきおとされたる程に筆をなげあげて點をうたれけり萬人手をうちてれどろき感せ
せといふ事なし

凡大師の眞跡精靈ありて奇瑞しばくおほし天徳年中の事みや小野道風大内の額よかき續
事侍りき大師の筆勢を難じたてまつりて朱雀門を米雀門と云つべしとあざけり申しに其夜
夢み異人來て弘法大師の使なりと稱して其首をふみつけるに道風ひそかに仰見るに履草雲
に入てその人をみさりき

圓融院の御宇天元五年の冬比美福皇嘉兩門と修造せられし時門基是新にして額の字既に
暗し舊文をうしおはせして潤色を加へべき旨藤大納言行成卿 于時 繪言を蒙りしに前車のいま
しめを存し聖跡の靈ある事をおそれつ、東寺灌頂院にして祭奠をまふけ諷誦を修してふ
かく大師の眞鑿をかへりみ祖師の許否をのぞむと見えたりかやうに尊信をいたしける故に
子孫臨池の長とまて久しく 朝廷お仕へ侍みや
大師歸朝の後佛祖の恩を報じ國家の福とまさんがため秘藏の影門をひらさて性海の眞源



とわらはさむとし給しに道餘宗よりも高く法つねの習にことなる故にや此間の英匠 鉦を
 わらそひて伏膺をなさりしかば法水ながれどこほりて人機芽をはく事おそまある時
 宗密 宗の智象佛華法花の義龍 朝廷み鏡あつまりて旗鼓をわらそひわ各迦拵のあどを
 ひたがひに域龍の風を傳ふ辨才派をわかし論難双をどげり清辨護法の往事もかくやと思
 出られ衆賢世親の囊行こ、にしてみるべきかとおぼゆしかれども大師無碍辨の詞義懸河の
 流といこほりなく三秘密の加持明鏡影これあきらかなり一生の現證即座の成佛文理極成と
 るうへ南方よむかひて契印をむとび眞言を誦じて秘觀を凝し給し時肉身忽に遮那の眞容
 とわらはれ鳳闕立どころみ玻璃の妙界にか、やさしにおよびて一人首とたれ群臣 掌をわ
 はせ諸徳地におりて拜謝し百寮身をなげて禮敬そしばらくありて本躰に還復して生佛の無
 二なる事をわらはせり即身頓悟のうたがひこの日忽にどげ秘密曼荼の道彼時まさみわらは
 る

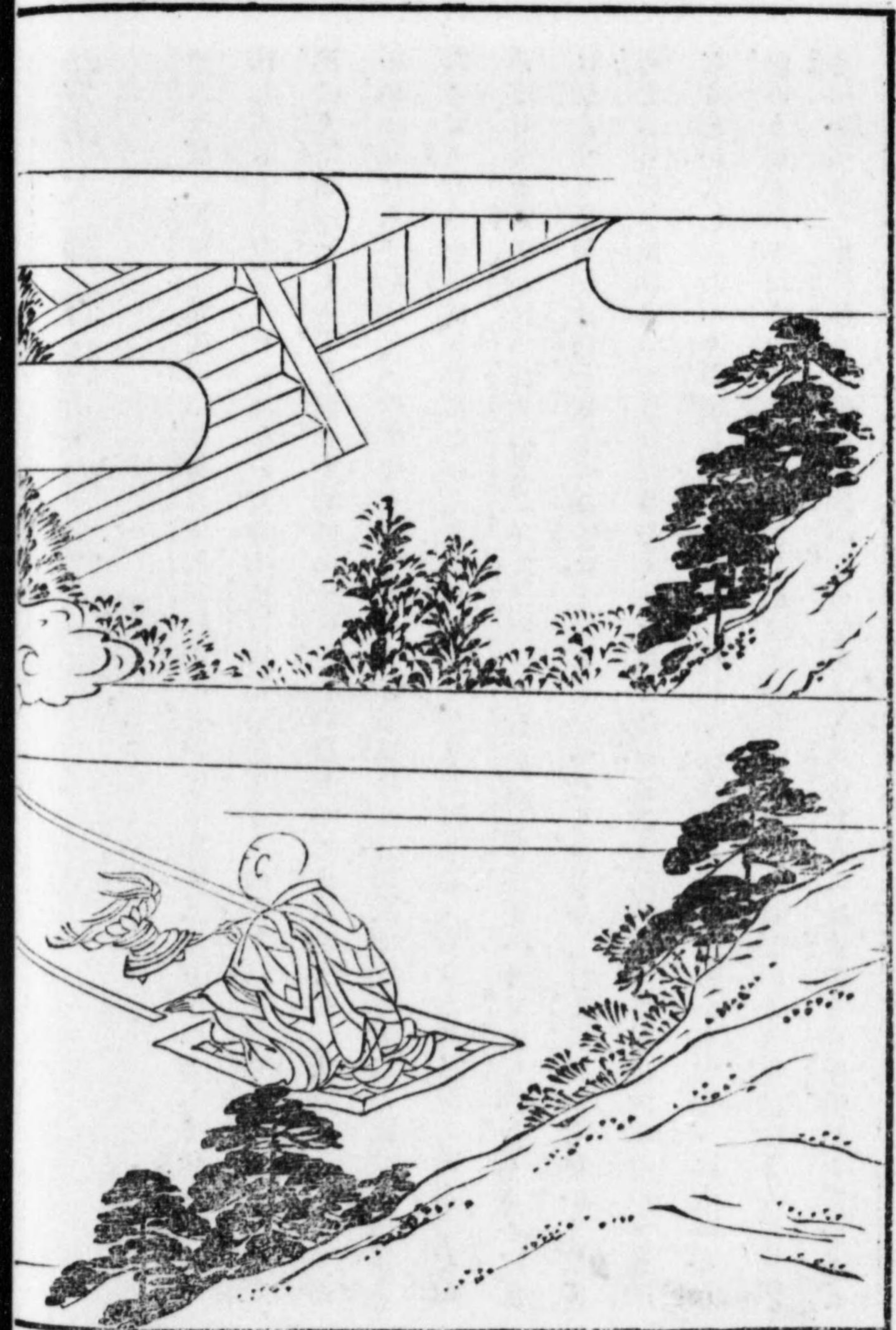
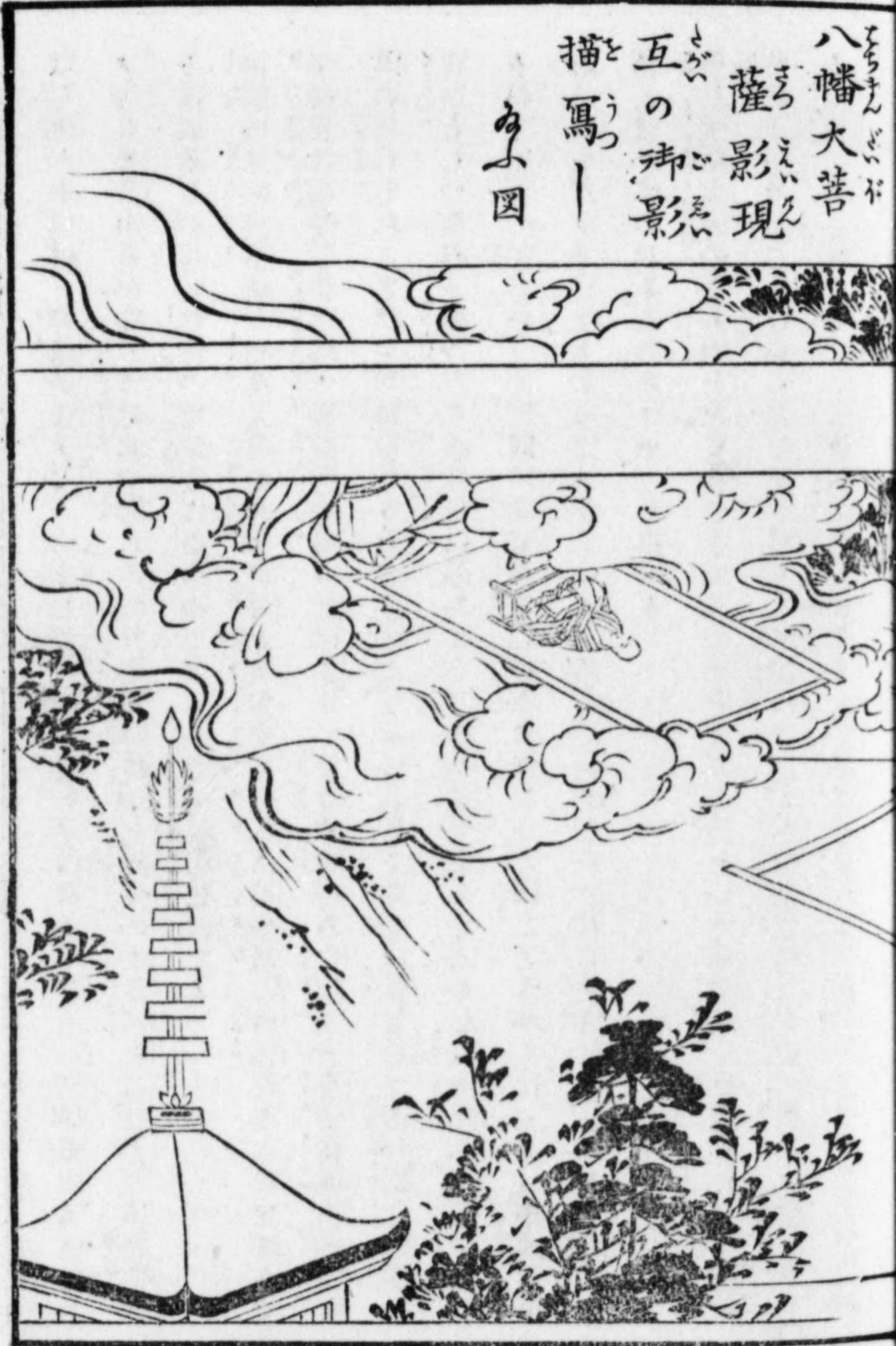
昔八歳の龍女無垢界の速證を得しかば智積身子疑難の心をやむ今三密の祖師清涼殿の現成
 とわらはし給ふ義解の高僧滯權の執をとらかそ彼は在世説法の剛なり何ぞあながちにおど
 ろかむ是の季末濁増の時也いかでかあやまざらんや遂に 則 諸宗歸伏して門葉にまじは
 り一朝欽仰して道流をうく 聖主 嗣して席をさり 皇后 敬て衣を送る御寵のはなはだし
 き事わけ盡とべからせ

弘法大師行狀記卷之五 終

弘法大師行狀記卷之六

東大寺は 聖武皇帝御願の精舎良弁僧正葺創の梵閣なり靈跡ふりて年ひさしく佛法さかり
にして日あらたなり良弁はじめて寺の別當に補せしよりこのかた良興良惠靈義等は等の釋
門の大梁相續して寺家を執務を嵯峨の聖代弘仁のはじめの年にをよびて大師をえらびてか
の職お補せらるそのころの事にや侍りけん大なる蜂の勢分四五寸ばかりなるにはかに出さ
たりて人をさそ事はなはだしみるものはやがてさをもけしさゝるゝものはたち所お身をほ
ろばせり古賢の詞に人能搏暴虎不能無失聲於蜂蟻といへり思出られ侍りさるほど
に法をまもる僧徒は命を輕して猶室にとまるといへども身をおしむ凡侶はあどをかくして
寺をさりにさ是によりて學業やうやくそたれて法命まさにたへかんとそまると寺の大魔縁
なりとかなしみあへり公家このことをさこしめして宸襟まばぐやそからせこゝに大師お
勅ありてかの寺にうつり柵しめ給ひしかばこの蜂あがく起る事なかりさこれによりて僧侶
寺にかへりて學林をなせり京畿の緇素とのく入唐和尙の威徳なりと感悦せまといふと

八幡大菩薩
 影現
 互の御影
 描寫
 一
 今因



なしまかあれば 敵信いよくふかくして 朝賞まそくさかりなり 大師この寺にまし
くしどきあるひと八方結護の神をわが光あるひは三七修法の僧を奏そさまぐの法事一
々にあるしがたし修練の舊跡今にわひのこれり西室南院等これなり
清瀧の峰神護寺は 稱徳天皇の御宇神護景雲年中和氣朝臣清麻呂 勅使をうけたまはりて
宇佐宮に詣せし時八幡大菩薩神勅ありしによりて建立する所の仁祠なり息子真繩の大夫大
師の徳行をたふどびて師檀ちぎりあつさによりてひさしく此寺に住し給て練行日をかさね
禪觀としつもれり颯々たる暮風房にみちて五住のねふりをおどろかし陶々たる清流岸をあ
ふひて四倒の垢をそぐ雲霞に臥て茵とし松柏に友なひて隣とせりおりにふる、感通道を
あらはそたよりになりしうげ地景とにこゝろよくおぼしめされて公家にめしありて出洛し
給ふはかはつねあこの所に柵宅し給へり
弘仁元年孟冬のころ表をたてまつりて月の一日より山門をいでせ秘法と修練して 皇朝の
福祚をいのるべきむねこれを申うけらる其詞にいはいく空海 幸に 先帝の遺雨に沐しとを
く海西にあそびてたまぐ瀧頂の道場に入て一百餘部の金剛乘の法門をさづかるとをえた

り其經はそなはち佛の心肝國乃靈寶なりもちさたるどころの經法の中に仁王經守護國界主
經佛母明王經等の念誦法門あり佛國王のためにとに此經をとき給ふ七難を摧滅し四時を
調和す國をまもり家をまもり巳とやそくし他をやそくするはこの道の秘妙なり空海師授を
得といへどもいまだ練行にあたはせ伏て望らくて國家の御ために諸の弟子をひらひて廣雄
の今の高雄山門におゐて來月一日より起首して法力の成就にいさるまで且はをしへ且は修し
て其中間におゐて住所をいす餘の妨をかうふらざらむ伏乞昊天歎誠の心を鑒察たまへ
といへり其後さまぐ御願をつとめおこさひて密教の道場となせりもとは神願寺となづけ
しをのちにあらためて神護國祚真言寺と號せらる弘仁三年におよびて實惠泉麟智泉をえら
びさだめて寺家の三綱を補任し天長元年にかさねて定額僧を奏しおかる真繩太夫此寺をも
てながく大師に附屬したてまつりて瀧頂 堂護摩堂納涼房阿闍梨坊等數字の成風その功早
く成れり

其後眞濟僧正大師の付屬をえ給ひて一重の寶塔を建立し五大虚空藏の靈像を安置しかさね
て御願を奏しお給へり又八幡大菩薩大師と俱に盟約ありしによりて景現し給ふ時或説御歸

大師
 高雄たかね
 おいて
 傳教でんきょう 大師
 の為ために
 灌頂くわんていを修しゆ
 一いっ冊さつ



中影雲 だがひおその眞影をうつしどいめ給へる神筆の影像いまに此寺の納涼房よどいまれ
 云々 大師のか、せ給へる神躰は 鳥羽の法皇勝 光明院の御庫におさめ給しを 去建久八年
 文覺上人これを申うけておちしく神護寺にわがめたてまつれりおほよそ眞言灑水の庭をも
 ちて尊神栖息の所とし給ふべき託宣の旨鄭重なりしかあれば大師練行の砌を守りあまさへ
 たがひに影像をうつしおかれける勝絶奇に事かこれにしかむや
 欽明天皇の御宇佛教はじめて我朝につたはり聖徳太子の御時法門さかりに海内にひろまり
 しより七宗の行果は人は是をまなぶといへども両部の灌頂は世にいまだしらざる所なり釋尊
 滅後八百年のうちに龍猛はじめて内證智を西天の境にひろめ給しがごとく聖教の傳來甘許
 代の、ち大師つゝお秘密宗と東域のあひだにつたへ給是をそはち極果にいたる妙道佛乘に
 いる秘傳あり五智を一心にひらき三密と凡身に得せしむ頓悟の徑路是より最なるとなし今
 機熟し時いたりて緇素化に伏し王臣徳に歸そ四代の 天子たうとびて稽首し兩朝 淳和の
 皇后らやまひて灌頂といはゆる弘仁二年の冬のころ 天皇勅ありて大師をして乙訓寺の別
 當お補せられて高雄をさりて此どころに移住し給ふ

同三年十月のころ傳教大師頭陀のつゝおでともちてこの寺に來宿して面をちかづけ膝をまじ
 へて大法儀軌をうけむすめに灌頂乃大道をひらかん事を談じ給ふこゝに大師のたまはく吾
 生年四十期命つきぬべし念佛のために高雄の禪居にかへり住せんかのどころへきたり給ふ
 べきむね許諾ありき大師をなはち乙訓寺の別當を辭して高雄の舊居に復せしにおよびて傳
 教大師かの山にいりて其心ざしをどげ給ふ十一月十五日ともちて金剛界の灌頂を修せらる
 播磨大掾和氣眞綱大學大九和氣仲世美濃種人おなじく密壇に望みて智水に浴せり同十二月
 十四日又傳教大師のために胎藏の灌頂をひらかる此時賢榮、泰範、長榮、圓澄、光仁、光定
 等の大僧二十二入そのほか沙彌三十七人近士四十一人童子四十五人物じて緇素一百四十五
 人誓水お沐し惠澤にうるはへり兩部都會の 灌頂此時まさはじめられり同四年三月六日又
 高雄おあひて泰範圓澄 長榮 光定 康教等がためお金剛界の灌頂を修そ同七年子秋の頃又
 同寺にしてもろくの名徳を卒して勸操大僧都のために三昧耶戒を許して兩部の 灌頂を
 授給ふ彼僧都は高祖剃髮の和上として釋門秀逸の耆宿たり年齒かたぶらて六旬おあまれり
 大師行年いまだ知命おみちたまはざれどもかへりて尊師の禮をいたし秘宗の脈をつぎ給ふ

興福寺
南円堂
建立の時
春日
大明神
神詠の
図



ありがたきためしなるべし同十三年 平城の太上皇 仙躰をめぐらして嗟嘆を施し佛戒を
 うけて灌頂を授かりましませ大師啓白の文にいはく幸に諸佛の應化金輪の運啓の期にあひ
 て大同元年をもちて曼荼羅并み經等をたてまつりまかありしよりこのかた愚忠感なくし
 て忽に一十七年をへたり天は人のおもひにしたがひ聖は人の心をかきみて因縁感應せるゆ
 へに今日 麗顔に對したてまつりてひとたびはよろこびひとたびはをそれ心神おき所なし
 といへり

同十四年 嵯峨天皇十善の 玉躰を屈して五智の瓶水に浴し萬乘の寶位を遁て三密の法門
 を修しましませ其よりこのかた 聖帝 皇后相續して師依とし群臣百寮競臨して稽顙せり
 昔大 職冠鎌足子奉公の勞によりて藤原の姓を給はり内大臣に拜任しながく攝祿の臣たり
 嫡男左大臣不比等興福寺を建立して氏寺とせり其後年序漸移り藤氏おどろへそたれて殆
 他氏にうつらんとそ爰閑院左丞相 冬嗣公大師と師檀のちぎりあさからざるによりて藤氏
 の繁榮をいのらんために弘仁四年興福寺の中に勝處を擇點して八角の圓堂とたて不空羅索
 の像をそへたてまつりて修行持念し給へり今の南圓堂これあり大師すかはち鎮壇を行給し

時壇をつさける人夫の中あ異相の老翁ありて詠じていはく補多落のみかみの岸に堂たゝて
 いま予さかへむ北のふぢなみされ春日大明神かたちをやつし來給て家門の繁榮をべき事
 をつぎまめししかりそれよりこのかた藤氏の執柄世をかさねていまはいたるまでたゆると
 かし閑院の丞相歸佛の 志いよくふかく信法の思まそくねんころなりしによりて陶化
 坊の内に甲勝の地景をえらひて大厦の構といたし一の費舎を建られそをはち券契を投てな
 がく大師またてまつれり彼給孤長者の沙金をまきし誠にひとしく勝軍太子の林泉を捨した
 めしにおなし大師この精室を點じて綜藝種智院となづけ内外受業の規式をさだめおかれひ
 ろく英匠を招て三教の管策をひらきあまねく童稚をそくひて五明乃鑽堅をばけまさしむし
 ければ才子こきよりいで藝士こ、にしてなれり冬嗣公の息忠仁公一大師範の官に任せし日
 高官嚴孝お追贈せられ万機の政理をみがきて大化遐邇に滂流せり 國母 帝王其餘裔より
 いで給へり凡伊尹姫旦補佐の任踵をつぎ三槐 九棘願要の職肩をならぶこれひとへに大師
 の法驗にこたへて明神の感應したまふがしからしむるところなり
 和泉國槇尾寺は大師出家の砌なりつねにこの所にといまり宿しましめて修練し給ひける

にこれ地もどより水もしくして住侶こそをうれへければ大師ひそかに平地にひかひて神
 呪を誦じ密印をひそびて加持をさし給ふに清泉湧溢して其流汪洋たり細素さはひのぞみて
 驚歎せせといふ事なしこの水とのひ人や、精神爽利なるがごとし因て是と智慧水となづけ
 たりかの悉駄太子射藝を學ましくし時釋種と、もに力をゆらそひ給しに絃矢金鼓をうが
 ちつらぬきて地に徹して清流を涌し水た、へて浴池と成しうば土俗相傳て箭泉となづく病
 せるもの飲沐するに効驗あり大師加持の靈水その徳彼にたくらべつべきをや
 又檜葉をもちて御手をそりたよめられ便宜にしたがひて椿のうへに投かけ給し時御誓約あ
 りて吾宿願もしはたしとぐべくばこの木の葉かの木の葉あつくべしとの給ふに檜の葉そ
 なはち椿のうへあひつきて根柢あひつたはりて枝葉いまに盛なり世の人は是を柴手水とあ
 づけたり昔印度の龍泉にのぞみし阿羅漢口をそ、ぎし時かむどころの楊枝とそてしかばそ
 の木あかく根をひすびて鬱茂の林とあり土人は是をわがめて奇觀の佳境とせりいま大師盟誓
 の感にこたへて異葉枝につらなり兩木たねを和するわにあやしませらむやおはよそ止住し
 給へる地をどふらふに奇特端多く勝絶たぐひまれなりつふさにあげつくそべからん釋尊西

天に出世して五竺に勝地をしめ文珠震旦に遊化して五臺は靈輦をのこそこれみな生をそく
 ひ物を利するはかりとなり大師東海は誕生し給て聖跡下土は彌淪せりもし遺流をくみ餘風
 をわふがん人は尤練行の習跡をたづねてそべうらく在世の拜觀はなぞらへたてまつら
 んものをや

弘法大師行狀記卷之六

弘法大師行狀記卷之七

大師歸朝のとき海路風波のおそれいませしによりて天神地祇の感を仰がれさまぐ立願ありて誓約うたふか、りきしかあれども日月ながるゝごとくして星霜もうつりやすければ四運年をかさね一紀期を過せり弘仁七年季夏のある彼の素願を遂給はむために相應の勝地をあらびて修禪の梵宇をたて諸の弟子をして法よりて修行せしめば諸天威をまじ善神力を得て國をまもり生を利する基なるべしと思食けるに少年乃そのかみ山林を涉覽し給しよ吉野山より南へ去事一日更に西へ向て兩日の程を経て平原の幽地あり紀伊國伊都の郡の南にあたり今の高野山是なり其地形を尋ぬるに葱嶺銀漢にさしはさむで白峰碧落につけり東西は龍の臥せるがごとくして流行の水あり南北は虎の蹠れるがごとく棲息の地あり浮査に乗されども忽に雲漢に入妙薬を嘗されども神窟を見るときをえたり妙高とさして友とし輪鐵を引て帶とせりこの地尤教旨にかかへりよろしく修禪の所なるべしと思食ければ六月十九日表を奉て此山を申請らるゝ入定の地と定給へり

大師明神の
衛護を受
させぬ図



表の文にいはいく山高しては、則雲雨物をうるほし水積ては、則魚龍産化そこのゆへに耆闍
の峻嶺に能仁の跡休せ老孤岸の奇峰に觀世の蹤相續げり其所由を尋ぬるみ地勢とのづから
しかなり又は臺嶺の五寺に禪客肩をならべ天山の一院の定侶袂と連ぬ是則國乃資民の梁
あり伏 惟 我朝歴代の 皇帝心を佛法にどめて金刹銀臺櫺の如くみ朝野に比ひ談義の
龍象寺ごとに林をなせり法の興隆こ、にして足れり但うらむらくは高山深嶺に四禪の客と
もしく幽黙窮巖に入定の賓まれなり實み是禪教未つたはら老住處相應せざるがいたとこ
ろあり今禪經の説に准るるに深山の平地尤 修禪によろし今思はく上は國家の御ため下に
諸の修行者のために荒蕪を芟蕘て 聊 修禪の一院を建立せむ法の興廢は悉く天心にか、
り若は大若は小敢て自由なら老望請らくは彼空地を賜る事を蒙て早く少願を遂む 然 則
四時に勤念して雨露の恩を答たてまつらむと云へり 天許といこほりなかりしかば同七月
八日官裁の 詔旨を下さる大師すさち泰範實惠等の大徳をさして彼山にむかはしめ荒蕪
をかりはらひて且一兩の草菴をむそび高雄の舊居を遊て南山の深嶺に移入給にけり
大師南山に居住し給 時 頻に明神の衛護あり即地主山王形をあらはして告て乃たまはく吾

性山水になれて人事にうとし亦是浮雲のたぐひかり吾はこれ此山の主也 幸に菩薩に逢た
てまつる徳のいたれるなり 則 此領地を献 奉りて吾ために威験をまし給へど是丹生津比
咩の一の御子高野大明神誓約をなし給へるなり又大師彼山にのぼりたまひし時山路のほと
りに女神丹生津姫命の社あり其めぐりみ十町許の澤ありて今天野といふこれなり大師此所
に宿し給しに明神巫祝お託して妾神道にありて威福とのぞむ事ひさしまさにいま菩薩此山
あいたれる妾が幸なり弟子昔人よりしどき食國 皇 命家地万許町を給れり南は南海をかき
り北は日本河をかぎり東は大和國をつかひ西は應神山は谷をさかへり 願は是をたてまつ
りて永世に仰信の情をわらはさむとの給ひき大師 則 明神に法施し給はむが爲に天野の社
のはどりに曼荼羅院を草創したまひき後にあらためて奥の山にうつされたりこの丹生明神
は伊佐奈岐翁の御子として十二御子と率ひ一百廿所の靈神を眷屬とし給ふ
弘仁十年に鎮守を勸請し給しに是寺の神達を崇たてまつりて此山の護法と定給き大師後生
の弟子門徒たらん人日ごとに教王眞言等を誦じて法味をたむけ 奉て塙をまもらしめたて
まつるべしこれ令法久住の 策たらん旨ししかかせたまへりこれより丹生高野の兩

大師高野
 結界及び唐土
 より投ト三鉆
 の松よりくりぬる
 と見て秘教相
 應の地なること
 知りぬる図



所明神は山上山下にいはいたてまつりて財施法施たゆる事かし神威をまし佛徳をさかりに
せむことをおしはかるべきをや

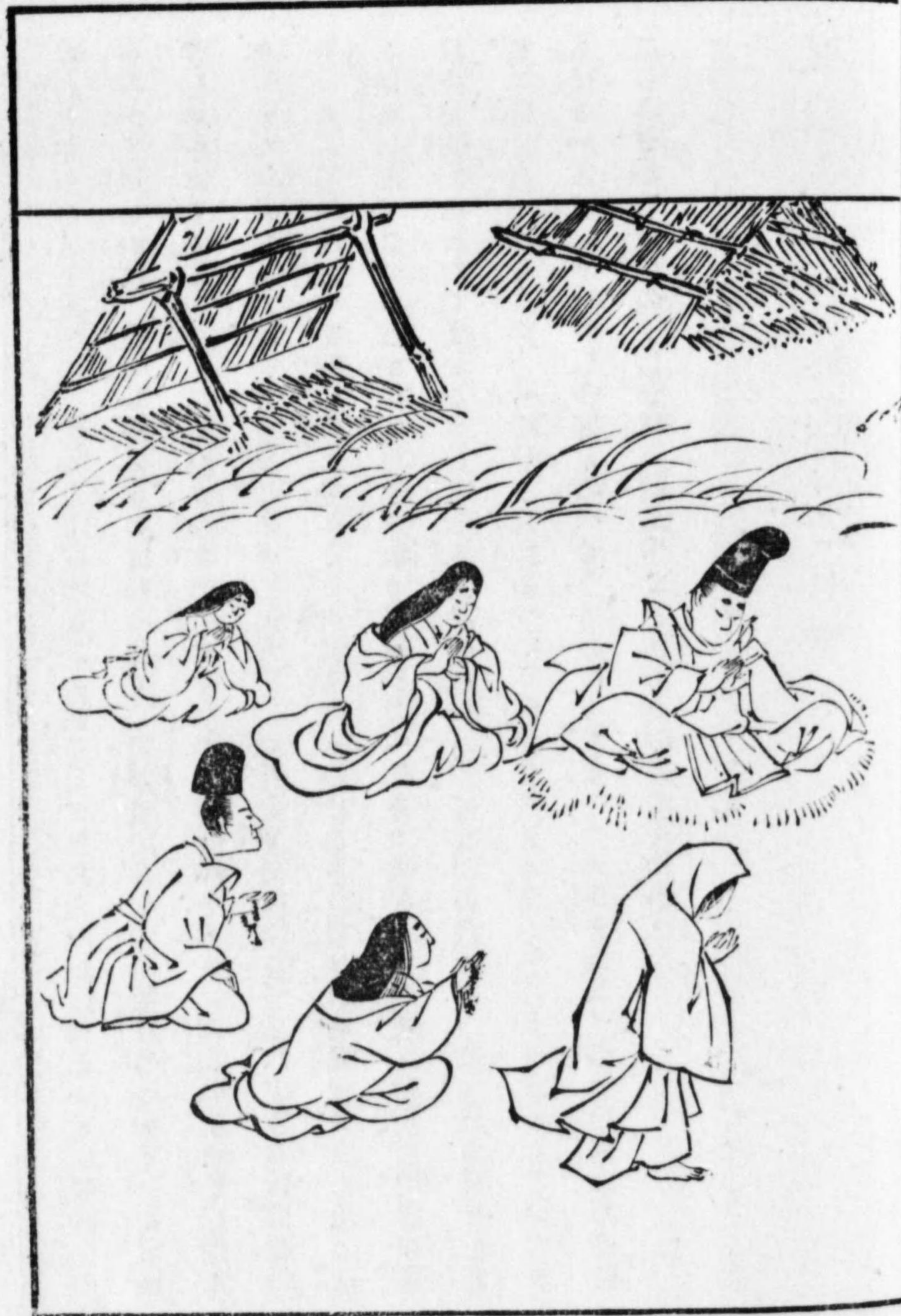
大帥官符をたまはらせ給て後伽藍を草創し給はむために七日七夜大結界の法を行給しに東
西南北四維上下七里の内にながく障をなそ悪鬼神をしり予け善心ありて佛法の中に利益あ
るべき物をといめおら給へり

又樹木を切拂はる、時唐朝より投給ひし三鉗儼然として縁松の梢にか、れり是を御覽じて
いよく秘教相應の勝地たる事を知給へり眞然僧正大師の付属をうけ中院を建立してこれ
らの道具を崇られけるとかや

又大師地をひきたいらぎ給し時長五尺 廣一寸八分の寶劔を石籠の中より掘出されたり則
古仙の遊處先佛の舊基なる事をしれり 勅によりて 獻覽又備るに即めしといめられにけ
り後にはいさ、かた、りをなそと侍るに御占をおこなはきたりければ此劔のわざにやと
みえけるによりて銅れ筒に入てもこのことくかへしれかれにけり

大師居住し給て後上下の寺院堂塔坊舎やうやく其數ありそきはち官に進じ御願の庭と申な

されて金剛峰寺と名づけ給へり先三間四面の金堂一字をつくり一丈六尺の阿闍佛八尺五寸
の四菩薩を安置せられけり其後理界智界の樞機をひらき法身智身の心印をあらはさむと思
食されて知識を十方にどなへ興善を四衆にのぞませ給ふつひに棟宇乃花構をいたし多寶の
大塔と建らる外には十六丈の刹柱うげをそばて内には八葉院の尊容坐を並べたり一層の
甍雲の中にさしはさみ九輪のかざり花の外に出たり朱軒紅欄の構へ朝日に照耀してあざや
かに玉鈴金鐸のひびき晚風に窈亮としていさぎよし内外の莊嚴秘密の表示をつくさざとい
ふ事なし大師住山しばし年をかさね堂舎おほくつくりそへむとおぼしめしけれども上
皇しきりに 勅喚ありて中務省におきて一室を奉られ宮中の御祈しげかりけれと速に志
を遂給ふ事かなはせさりながら春秋の間一年に一度はかならせかよひ御覽じ廻けり
又天長の 聖主 勅ありて大和國弘福寺をたてまつる是大師高野御かよひの間の 旅宿の
どころにあて給はむためなり此寺もと 飛鳥淨三原天皇の御願あり大師に 勅給ありて後
師資相承の所となり眞雅僧正付属を得給て後は永く東寺の長者に付ていまも管領ある所な
り



大師おん心こころ經きやう秘ひ
 鍵かぎ御ご製せい作さく嵯さ
 峨が帝てい奉ほう給たま
 ひ天下てんか疫えき癘れん
 とまらひ
 のふ図ず



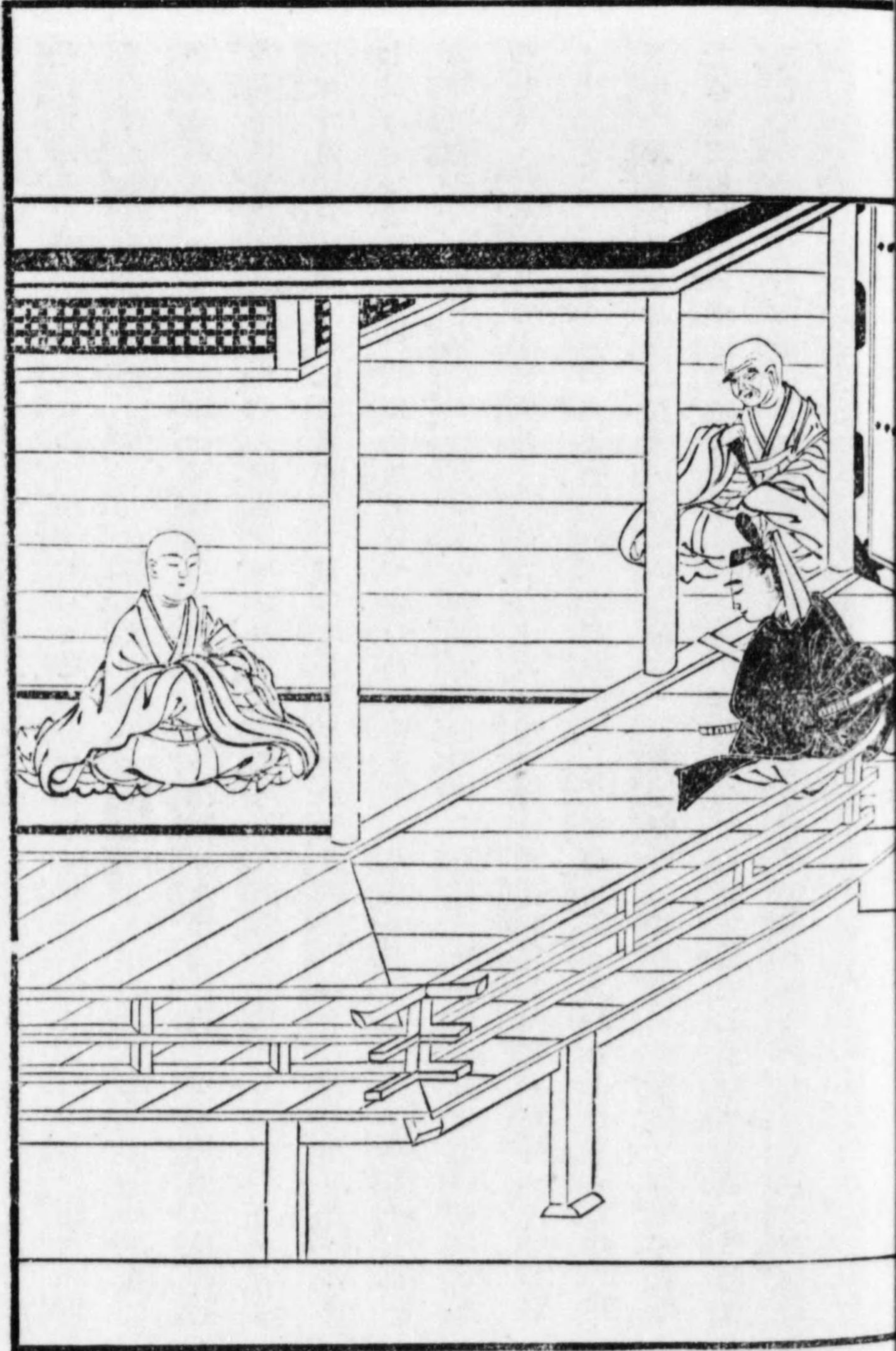
弘仁九年の春天下疾疫の災おこり國中夭死の物多して原野人のかげねをいとひ閻閻鬼のそみかど成しかば 皇帝おどろきわはれみ給て 宸襟安からせ爰を攘蕪のはかりごとおぼしめそによりて玉管をふるひて金字の般若をうつされ大師を請じて開題の唱導とし給ふ即 勅喚に應じて秘鍵一卷を製作あり心經五分の幽旨を宣給に未結願に及ざるに蘇生のやからみちにおほく夜闇忽に變じて日光赫奕たりおほよそ此書は神明殊に愛味し給ふ故お法樂したてまつればかならず納受ありと申つたへたり大師の上表の文に神舎に詣せむ輩は此秘鍵を誦じたてまつるべし昔鷲峯説法の筵に 陪てまのあたりこの深文をさけり豈其儀に達せざらんやとか、せ給けり此經おつゝて解釋をなせる家々そのかまおほしといへどもはるかに鷲峰のむかしの聽をのべてまのあたり馬臺の今の災をはらふ事この書にしくはなしみづから權化のよしを稱じ給ふ事まことにありがたくも侍かき

弘法大師行狀記卷之七終

弘法大師行狀記卷之八

東寺は 桓武天皇平安遷都のはじめ國家を鎮護せむがために羅城門の左右にあたりて東西兩寺を建られし時延暦十五年藤原大納言伊勢人をもちて造寺の長官として草創し給ところなり

嵯峨聖代弘仁三年十一月廿七日封戸を割て當寺によせられし時御起請符云代々の國主をもちて我寺の檀越とそ若伽藍興復せば天下興復し伽藍衰弊せば天下衰弊せん若無道の主邪賊の臣ありて若は違犯し若は破障しておこなはせは此人かならず三世の諸佛一切に賢聖を破辱せしむる罪を得て終に無間獄におち無數劫の中に永く出離せるとなかるべし十方の諸天卒士の神明共に大禍とおこしながく子孫を滅ぼさむ若犯違せざる者うやまふてつとめおこきはゞ世々に福をかさね子孫繁昌してともに塵域を出てかならず覺岸にのぼらんと載られたり又東寺破壊及ばゞ日本國中の大小の伽藍を壊てそべからく修理をなすべき旨 勅宣を下さる崇重の他よとあるはかりて知ぬべし



勅命ありて
大師より東
寺を給ふる
図



弘仁十四年正月十九日忠仁公 勅使としてこの寺をもちて永く大師を給ひて眞言密教の庭
とし師々相傳の所となせり是 大唐青龍寺元は大官道場なりしを惠果和尚に勅給ありし
例也これによりて大師請來一百餘部の金剛乘の法文三國相承の佛像佛舍利阿闍梨附屬の健
陀穀子の袈裟道具等 悉く大經藏におさめ宗の長者たる人相續て檢校と
同年十月十日大師比奏によりて五十口の定額僧をおかれ宗の經律論を弘通し他宗異類のま
じはりをしてまめ密教根本の場とすべきむね官符を下さる其後堂舎と建立し佛像を彫刻と
る事其數や、おほし年中の行事僧衆の威儀併大唐興善の舊儀をまかひ赤縣青龍の古風とら
つせり 淳和天皇の御宇天長元年六月十六日造東寺の別當長惠大僧都を西寺へうつされ
て大師をゑらびて寺務の人とす 于時少 此れ眞言宗長者の始なりまかありしよりこのかた
僧中の綱維に昇て最初になりいづる人ももちて一阿闍梨として寺家を執務とすべき規式をの
こさる又唐朝の不空三藏勅によりて大官道場をもちて秘密の庭とし青龍寺と號給しに
准じて東寺をもちて教王護國寺と號すべき旨 勅をうけ額と給れり大師記して云 東寺は
是密教相應の勝地馬臺鎮護の眼目なり歸して 敬は王化昭明にして華夷太平あり意てあ

がめざれば朝に妖害あり國に災乱あり天下大乱あるべくば東寺まづ荒廢とべしと見へたり
遺記におどろひて先事と考るに保元平治の比寺門零落して僧侶山林にまじはり堂舎傾危し
て佛像雨露におかされ是只本土騷乱のもど逆臣暴惡のためなるべし祖師の記とるどこ
ろ宛も 掌をさすがごとし平家追討の後高雄の文覺聖跡の陵廢をなげき東關の幕下大功の
修造とどげしよりこのかた梵閣竟をならべ尊容堂にみつまかあれば王化まさるに古も復し兵
權をばく 政をたすく朝家の安泰を思はむ人誰か鎮國の基趾を崇ざらんや
東寺鎮守八幡宮は 嵯峨の聖代平城の大乱おこりし時 天皇ひそかに帝徳のいまだしきか
どうたがはれ佛力の 速ある事をわがめさせ給しによりて大師あ 勅して靜謐のはかりこ
とをどぶらひ給けるに佛法は王法によりて弘まり王道は神道によりてあらざるべしはやく
八幡靈神の鎮坐を花落にあがめられ百王擁護の誓約を棘府より仰ましますば九禁おだやか
して四海やそかるべし 皇徳これよりてあらはれ佛法是がために立すべき旨奏し申され
しかば 聖主そなはち御立願ありて信仰の 啟念と擬しまししくしに神感むなしからせし
て天心といこほりなかりき遂に江州勢多の郷にして平城の官軍賊北せしに及て 上皇かた

じけなくも將軍田村丸がためにどらばれさせ給て士卒にかこまれ都へ入せ給ひぬ是を見た
 てまつる緇素あやしみおどろかきといふとなし 主上 勅宣ありてよろしく廢流あるべし
 といへども 天兄にていませるに優したてまつるべしとものとのごとく大和國平城の宮に
 遷されて御飭を落されけり彼第三の宮高岡の親王は東宮を廢して出家を遂られ大師の室に
 入せ給て 灌頂の法脈と繼後みは異域に渡りて遙か印度の境に趣き給ふ眞如親王是なり爰
 に 天皇御立願を果し遂ましまさむために大師に 勅ありて東寺の郭内に一字の社壇を飭
 て三所の和光と崇め眞言乃法味と獻じ瓊漿の禮奠を備給ひしかば靈神此砌に垂應して尊體
 空中に儼然たり大師 則奇特の思にたへも渴仰の誠をいたして御躰を花牋にうつまといめ
 かさねて木像にささみあらはしてながく寶殿におさめたてまつらる今の鎮守八幡宮是なり
 光仁天皇の御宇寶龜八年五月十八日託宣ありてのたまはく吾明日辰の時沙門となりて三
 歸五戒を受べし今より以後は殺生を禁斷せん但國家のために巨害の 輩出來ざる事あらん
 時は此限みあらざといへり今靈託の旨にたがはせして出家着染の尊儀影をあらはし眞言灑
 水の道場に跡を垂ましませと誠にかたじけなき神慮あり大師手自額を造らせ給て入本の跡

を貽さる今又蕭寺の寶庫にとまりてまさしく神徳の芳蹤を顯はせりまかありしよりこのか
 た勸請年舊て星霜しばくつもるといへども利生風香しくして和光月朗なり高祖製作
 の靈躰氷雪かゝりやさて古のごとし大師眞筆の額露點のこりて猶鮮ありむかし巨唐の肅宗
 靈武に幸し給し時不空三藏ひそかに八方神旗の秘法を進せられ祿山が乱を拂て収京の日を
 奏するにはたして言のごとくなることをえたり今本朝の 聖帝國位をたもち給へる高祖大師
 ひそかに八幡靈神の鎮坐を勸めしかば平城の軍破て寶圖をやそむる事矣事たがふとなし和
 漢こと異なれども法威を揚て 皇徳をさうりにそるおもむき古今是おなじきをや情おもむ
 みれば大菩薩は 欽明の聖代豊州宇佐の郡にして始て三歳の小兒とあらはれましし竹葉
 に立て託しての給はく我は是日本の第十六代 譽田天皇廣幡の八幡麻呂也我名をば護國靈
 驗威力神通大自在王菩薩と云て國々所々跡を神道に垂どの給へりまかあれば八正の幟旗
 を建て邪佞の賊を退け八色乃綵幡を織て正理乃道とかがり給ふ故に徳化華夷に溢れ神惠遐
 邇にかうふらしむ利物の方便いづれも優劣あるべきにあらされどもまのあたり 帝城に來
 りて 皇國を守りましませと貴べし仰べし

大^{だい}師^し | 稲^{いな}荷^{かり}
 明^{めい}神^{じん} | の^の為^{ため}
 に^に神^{じん}地^ぢ | を^を
 擇^{たく}み^み玉^{たま} | ふ
 図^ず



嵯峨の聖代玉體つ、がなくて寶算久しくたもたせ給のみにあらせ一朝無爲の化になづみ
て六合太平乃徳を感せせといふとなし弘仁の末よ及て脱履乃後 淳和の御門帝位につかせ
給ふ其後 深草乃天皇 嵯峨の受禪ありしよりこのかた今にいたるまで 繼體の天子ひとへ
に弘仁聖主の芳裔たる事靈神加護のまからしむる所大師持念の遠にかうふらしむるゆへな
るべし

弘仁七年孟夏の頃大師斗敷の時紀州田邊の宿にて異相の老翁あひたまへり其長八尺許骨
たかく筋ふとくして内に大權の氣を含み外に凡夫の相を現せり和尚を見てまつりて悦て
申ていよく吾神道にあり聖み威徳いまさまふ今菩薩この所あいたり給ふ弟子が幸なりと
大師のたまはく靈山に有て面拜せし時の誓約いまだわそれせ此生他生形異にして心おなじ
予に秘教紹隆の願あり神み佛法擁護の誓いまでもに迷者を利して同く覺臺に遊ばむ爰に
帝都九條の一坊に一の伽藍あり東寺と號そ國家を鎮せんが爲に密教を興そべき砌なりこの
所よて待たてまつらん必來 給べしとねんころにかたらひたまひしに化人そなはち盟約を
なせり

同十四年正月十九日大師 恩詔をうけ東寺を賜てながく具言の道場となし給へり其年四月
十三日彼紀州の化人稻を荷ひ相を持て阿嬭をともなひ二子をひきゐて東寺の南門に來りの
ぞみ給しに大師逢たてまつりて悦をかし誠を抽で、神徳をわがめ法味を酌給し時道俗是を
敬て珊瑚を備へ簠簋を獻じたてまつれり其後しばらく八條二階の柴守が宅に宿し給ふに
大師其間 帝都の巽にあたりて杣山を點じ利生の勝地をさだめて一七ヶ日夜の間法により
てそ鎮壇し給ひける今の稻荷の社はかり彼八條の二階堂は今の御旅所なり大師神輿をつく
り額をか、せ給ひてまいらせられしかば今の祭禮の時是をいだしたてまつるとなむ
天長元年仲春の頃天下大み日でありと公家 勅を下され大師をして雨をいのらしめむと
そ爰に守敏大德奏し申て云守敏眞言を學して 同御願とつとむ我すでに上臈たり先うけた
まはりておこなふべしとこれより守敏お仰ていのらしむるお七日のうちお雨くだると
いへども纒み京中をうるはしていまだ山外に及とあしかさねて大師をして神泉苑にして
請雨經の法を修せられしに七日のあひだ雨ふらせ大師怪をなして定み入て見給ふに守敏呪
力をもちて諸龍を水瓶の内にかりこめたり但北天竺の境無熱池の中に龍王あり守敏り鉤召

神人 善女 請雨 乃圖
泉苑 龍現 王出 現



にもれたりと御覽じて公家に申うけて修法二ケ日をのべられしに善女龍王眞言の奥旨をたふとび祈精の懇志と感じて神泉池の中より其形をあらはせり金色八寸の蛇ながさ九尺ばかりなる蛇の頂にのれり實惠眞濟眞雅眞紹眞曉眞然等の大徳まのあたりこれを拜し給へり自余の御弟子は敢て見たてまつるにあたはせつふさに事の心をしるして公家に奏聞し給に和氣眞綱を勅使として御幣種々の物を酌たてまつりて龍王を供養し給ふ密雲たちまちに驟驪として甘雨まさに滂沱ぬり池水湧みちて大壇の上になれり三日の間洪雨まばくふりて普天の下炎旱ながく休ぬ上一人より下四元にいたるまで首をたき掌を合せざるはあし眞言の道あがめらる、事これより彌さかりなり公家賞をおこなはれて直に少僧都に任せらる奏辭し給と再三なりといへども恩詔しきりにくだりて是をゆるしましませ大師の給いこの池の龍王元は無熱達池の龍の類なり慈悲ありて人の爲に害心なし御修法の頃人に託してこれをしめせり若此龍王他の界にうつらば池われ水滅して世薄く人どもしかるべしこの時にいたりて門徒たらむ者須く公家にまらしめせども私に祈願をくはへ法味をたてまつるべしと經の中よ深位の薩埵利生の相を説として離苦法門お自在を得る故に阿耨

達地の中に入りつねに慈雲を興して衆生を蔭覆し麟甲の中より清水を出して瞻部州の有情類を濟ふ旨これを載たりまかあるに彼香山の天池と辭してひそかお華浴の淤渾ようつりましませ尤これ慈念の誓にもよほされ勸請の誠おこたふる故なるべし誰の人か渴仰の思ひを凝さいらん
 龍樹の論云摩伽陀國に龍王あり阿波羅暹どなづく善心ありて佛化をうけ世の飢饉をのぞくがゆゑ又常お膏雨をくだして其國ゆたかなりと彼又准じて是を思ふに我朝の豊稔は專是神泉眞龍の威福によるべしをやしわかれば代々の御門此處をわがめられ年に亢旱乃災おこる時は此池を洒掃ありて祭奠を灌神にたてまつり大師の門徒をえらばれて修法の規儀をど、のへ給祖風あひつたはりて茅葉違となし青幡皂幕の室にみてる海龍宮の莊嚴をうつし寶爐玉盤の壇あつらなる雲輪殿は會場に似たり閣梨穀漿を絶て法を修し僧侶濟禁をたもちて經と轉老日夜不斷軌則國のために誠をいたし法れた先に疲を忘たり中にも延命院の僧都元果天祿三年修法の時は茅葉の龍形たちまち又門宇をうがちて雲漢にのぼり晴天と變じて洪雨を下しき

小笠僧正仁海長元年中度々の勤修には度ごとに赤蛇きたりて壇所に入紫雲聳て池上おは
 ひ四望騷々として普天霏霽せり其後成尊勝覺成寶成賢等の英匠みな紫闕の詔を合てしば
 く蒼天の感をあらはせりつふさに乃るにいとまあらせおはよそ大陽災をやめ卒土福
 をまし人天倚頼し龍神敬尊せると秘密の加持あそきたるはなし遠を召し深を釣これ人の等
 信にこたへて法の靈徳を盛あするなり今此所をのぞみ見るに池あさく水ともしおそらくは
 龍王他境にうつり給へるかとうたがひつべししかあれども大師祈念の懇念あより神龍慈悲
 の誓約くちせしていまだ國をそて給はざるにやちかき頃ひまでも修法の請にあつかり人底
 露の精誠を抽るごとに甘雨の普潤をほどこさせといふとなし此池もとは乾臨閣と名付て
 聖主遊覽の砌なり嚴泉流涼くして水三伏の夏をけし松柏陰しげくして風一聲の秋をとい
 ひ歌堂舞閣のものとひ柏梁の昔の跡をうつし朱樓紫殿のかまへ驪宮のふるきためしを習歌吹
 のこゑたゆるとなく詩酒のあそび興ともよほしき大師修法の後は龍神潜宅の處となりし故
 に代々の帝王これをわがめ家々の賢臣これをうやまふ然に後鳥羽院かりわさせ給てよ
 り此處殊にそたれ荆棘の路をとづるのみあわらせ猪鹿の蛇を害するをはなたる流鏑のこゑ

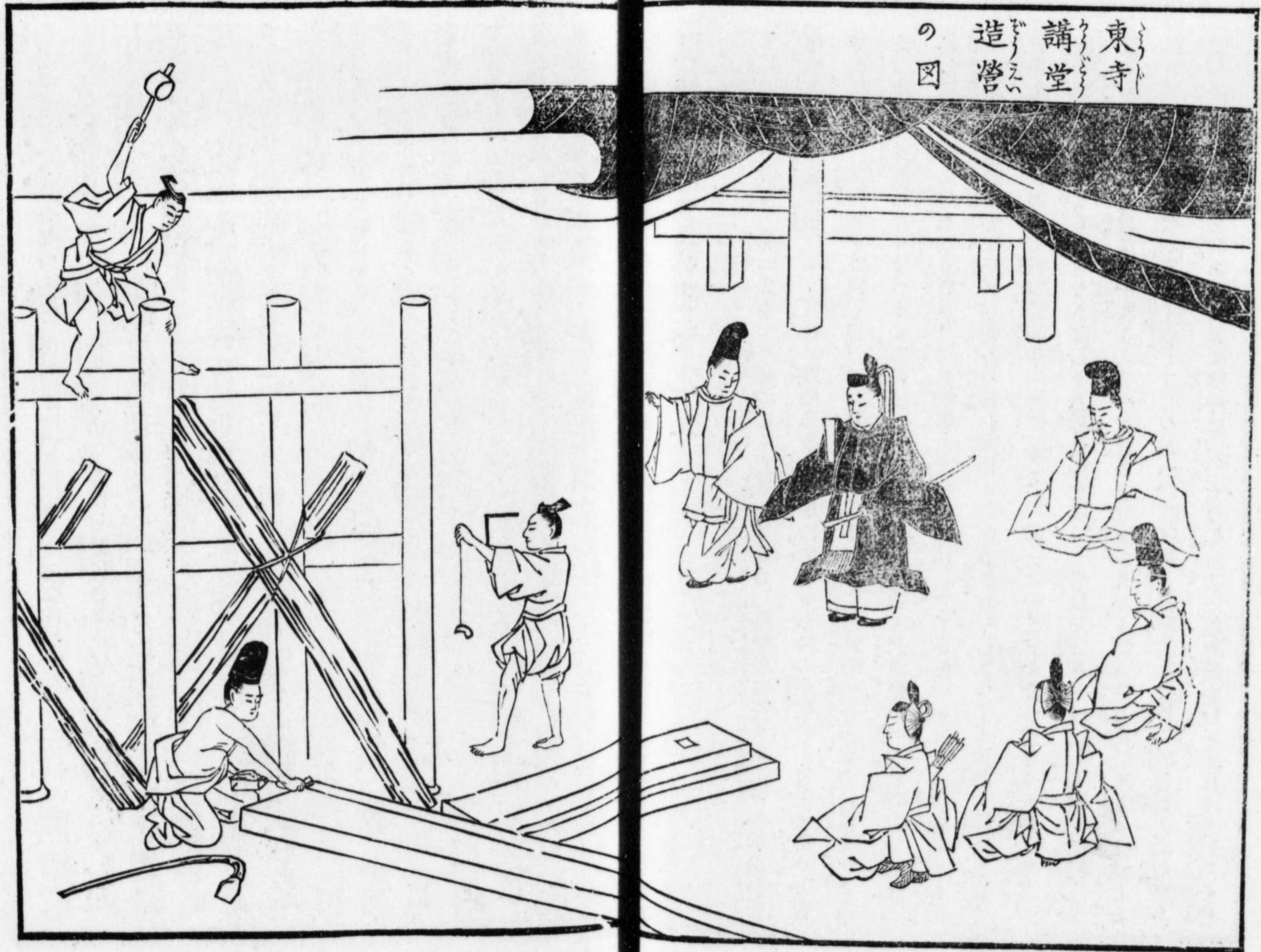
護法の聽を驚かし飛蹄のひいき冥衆の心をささはがしく是を見る緇素おそれかけかぞとい
 ふとなかりき承久大乱の後武州泰時國憲をたすけし時崇敬の誠をいたし築垣をかたくし門
 戸をかためながく雜人の往來とめしめしかども其後涼燠しばくわらたまりて門牆漸に
 傾しかば今はたい牛馬の牧にひとしく行人は通路となれりさだめてしりぬ龍神の冥慮よろ
 こび老大師の玄鑿やそからざらん歟君とし臣として治世の籌をめぐらさきはやく修理を
 加て岸重し給ふべきをや此處をおさめられれば國家又おさまるべきがゆゑお事れ意としらむ
 人行あらんも行かからんも須く祈精といふして法味をまそべし豈報國の忠にあらざらむ
 や

弘法大師行狀記卷之八終

弘法大師行狀記卷之九

天長二年四月廿日 勅によりて東寺の講堂を建立せらる 勅使參議左大辨直世王俗掄按參
議右大辨伴宿禰國道なり 玉體不豫のとき御立願比事ありしに 聖躬やそくして天心おだ
やかなり 則彼御願をはたし給ひがため大師みづから仁王經の一曼荼羅の尊像を作あら
はし此 砌安置したてまつりて本尊とわがめ給ふ彫刻功成て後公家の御爲に秘法を修せら
れしに靈驗殊に揭焉なり實惠眞濟眞雅等の大徳伴侶に 列て小壇の供師たり佛像の刻鏤道
場の嚴飭班輪が精妙と極め秘密の冲微を盡せりとある形わやしきつくり言詞も述に盡難く
翰墨も及所にあらせ教王護國寺の題額もこのゆゑにやどおほへ侍り凡此法は除災の
眼目護國の將帥なり世もうるはしく人もそをなりし昔は三才やそく五常みだれざりしか
ば四海にさかへる波なく一天よるこべる雲あり世澆季よおよび人奸邪おほくして上は仁徳
をもてめぐむことなく下は忠貞をもてつかへざれば諸天善神國を去給し時七難の妖變たち
まちに競おこらむ其時あわさりて國中の災をらし身上の厄を除かむと思はし此經法を修

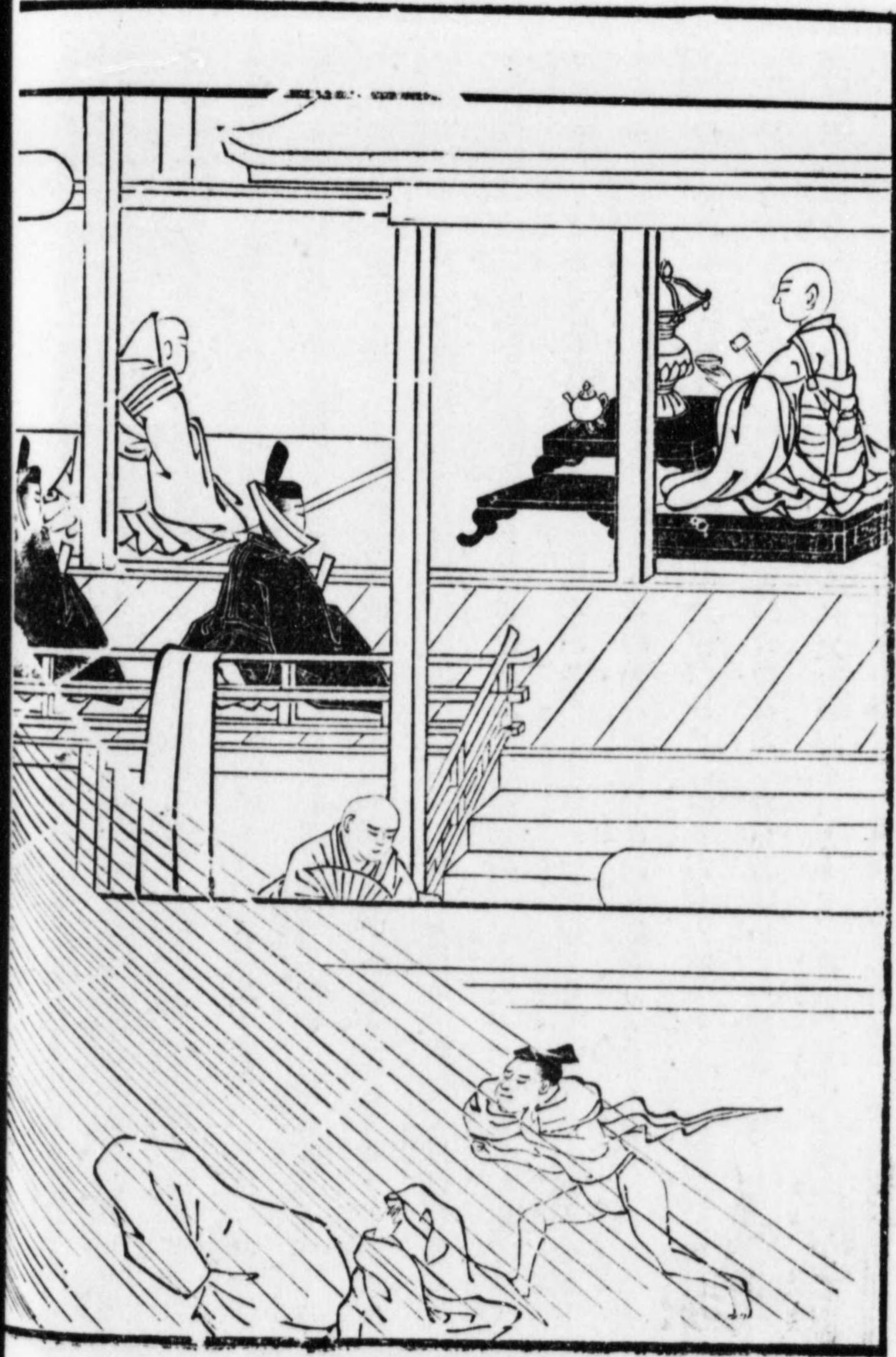
東寺講堂の造營の図



行せよと佛どき置き給へり縦ひ悪鬼境にいり災難國におこるといふとも教令の忿怒劔輪と
 ふるひて魔怨をしり予け自性の薩埵惟寶をまねひて福壽をまさむ善神甘雨をくだして草木
 しけく諸天宿直と致して國界おさまらむ事なんの疑かあらむや昔唐の天寶元年西蕃の大
 石康等の五ヶ國安西城をおそひかこみしに玄宗皇帝不空三藏に勅したまひて此難をそくは
 む事を祈しむ三藏手に香爐をとりて此經の陀羅尼二七返を誦し給ひしに五百員の神兵あり
 て甲冑を帶し戈楯を荷てまのあたり殿庭の前に現せしかば帝大に驚きて是を三藏に問給ふ
 り毘沙門天王第二の太子獨健大將兵と領じ來る安西城と衛護せむがためなりと奏し申され
 き其後城の東北卅里をさりて長丈余あして金甲を着せる神兵數萬人雲霧れ中に現せり鼓角
 大に鳴て其聲三百里にふるふと二日を経たり五國の軍士おそきをあしてむかふとわたはせ
 しかのみならせ金色の毛鼠ありて帳幕の間に入乱て弓弩のつる器械をくらひたちて用るに
 たらざりしかば西蕃のいくさ大に破ておそひ來る事なかりき亦三藏此經を翻譯したまひし
 に代宗皇帝これをわがめられ大明宮の内に譯場をひらき師聖西明兩寺の講堂をかざりて百
 口の法師をわつめ百座の講筵を展給ふその時文武宰寮歌樂を奏し香花をつらねて貝葉をか

こめ箇床をそめて大内より講席に送しに五色の綵雲空中に浮おほひて千變万化する事續
 畫も及となし三藏をなはち賀表をたてまつり獻信の應せざることを啓謝し給ふ爰に皇帝宸筆
 をくだされ名額を給ひて資聖の講堂をもちて善法堂と號せられ般若長講の砌とさだめ給え
 りそのためし遙に帝釋修羅の軍と推し切利宮觀の嘉稱をうつされたりまかあきば 本朝天
 長の 聖主講堂の花構と點じて護國の靈樞と崇めましまし是又唐家明時の佳風なるべし聖
 人化をやめ運記代くだりて後は機緣微薄にして法利壅滯をといへども古より今に至るまで
 靈驗尙朽ざるはたい此經にあり大師修法の後四百餘歳の星霜を送り 後堀河院の御宇にお
 よびて寛喜二歳の冬頃長星の變異をけさむがために高祖の芳蹤をたづね講堂の梵宇を排て
 詔使を道場よのぞましめ袞衣を密壇にわたされ長者僧正親嚴に 勅して攘災秘法を修せ
 られしに妖輝忽に隱没せりそれよりこのかゝ或は氣序れ和順を祈り或は蒙古の襲來を
 退けむために寺務の長者たる人壇を結ぶたびごとに靈驗あらたなり是 則祖師鎮壇の餘力
 あらたまらずして末資遐代の勝利空しからざるよやとおしはかられ侍る
 天長四年中夏の頃天下炎旱して衆民うれえをいやくによりて 皇帝 勅ありて畿内七道諸

大師
請雨の爲宮
中に於東寺
の佛舍利を
灌浴の図



國にして奉幣をおこなはるまた月の朔より三日のあいだ大極清涼の兩殿におゐて百僧を延囑し大般若經を講讀して雨をいのらしむるに大師をゑらびて唱導とす爰に降雨猶おまねからざるみや東寺の佛舍利を宮中お請じわさされて禮拜灌浴し給ふに油雲天におほひて膏雨地をうるほそ事數刻に及しかば陂池浩浩として草木青々たり昔惠超和尚不空玉女潭お雨を祈し時舍利瑞應を感せしかば草樹一夕は花とひらき川原信宿又流を溢と僧史の中に載たり大師精誠の蹤跡推して知ぬべし凡唐堯九年の洪水殷湯七歳の旱魃佛法いまだ世に行せざりしかば早滂年とかさぬといへどもむかしく轉禍爲福のはかりことを失なへり摩騰漢に入り僧會吳に來りしとき舍利の靈驗あらはれしによりて帝王正法をわがめ道士邪計と翻せり誠み是氣をはらひさいはひを招く摩尼凡をいで聖に入墟徑なるをや中にも東寺の御舍利は大師請來して紫宸の運を祈列祖敬戴して蒼生の利をまそ昔南天竺の三藏金剛智觀音の告みよりて遷州をそくはむた先ふ万里の鯨海を凌て大唐の聖境に來り給し時猛風俄におこりて挹をおり洪濤忽に激て山を列しに及びて三十餘隻の商舶波にまたがひて行處としらせ三藏和尚の附給へる船又漂没せむとせし時舶主おどろきかなしひて船中の資物除伽の大本

等を海にかけしむといへども佛舍利におゐては和尚おへて身をはなち給はせ一心に祈請ありて除災の法要を念じ給ふ船のめぐり一許里の風波動となくして着岸速まかりしかば東夏はじめて南天の風を仰ぎ一朝盛に三密の教を崇たり彼御舍利終お傳法の印璽として不空三藏に轉賜し給ふ三藏又青龍寺の和尚に授く和尚是を得て弘法大師に傳へあたふ大師則賞來しておかく東寺の寶庫に納めおかれしより今に一朝の靈寶として万生の福田たり仰て現當の悉地を成し歸して博卒の平安を祈る一粒といふとも他散有べからざるむね高祖まのわたり嚴誠をのこされたり定てふか死御意趣あるなるべし亦大師祈雨の賞によりて天長四年五月廿八日大僧都に轉任し給ふ同八年五月の頃兩楹夢お入て三泉忽にいたらむとす惡瘡はだへにおこりて吉相現せざりしかば綱統は官職を奏辭して表をたてまつるといへども皇帝しばく慰勞ありて是をゆるし給はせ勅答のねんごろなる事具に載にいとまわらせ

大和の國寶生山は日域無双の靈樞 帝畿第一の淨場なり大師殊に御心を留られて密教の惠命をまし衆庶の薄福をたそけむがために青龍の阿闍梨に付屬し給ふところの秘本尊を此峯

むろ
室生山
丸き
練行
子凡
図

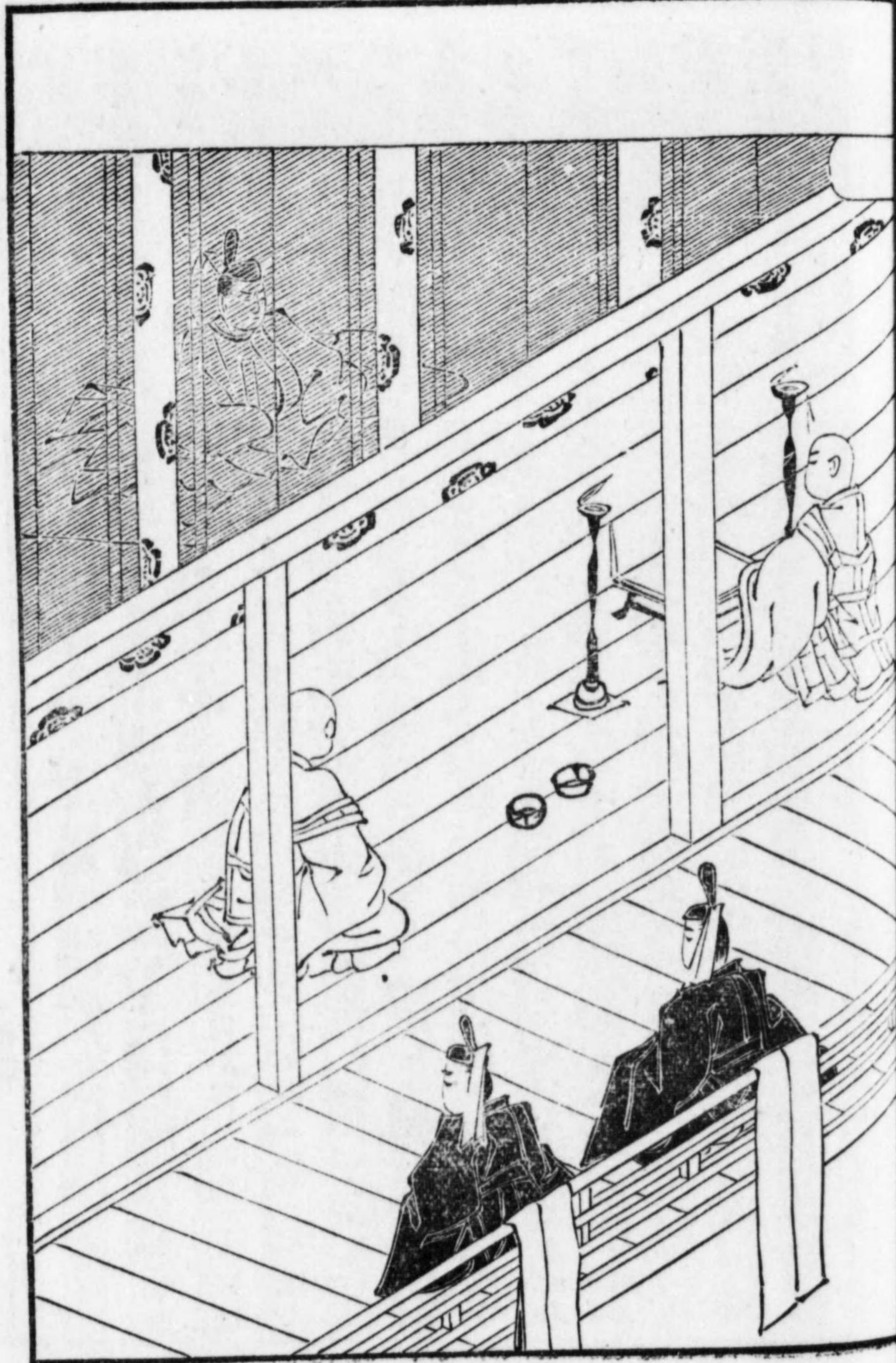


にいたはり籠奉りて渡海同行の御弟子堅惠法師を此岫に住しめて修行持念し給りけり
 道肝を崇給へるゆへにや神龍窟宅して靈感今あたらなりし天其徳をわふぎて風雲の感應
 たゆる事なく四海其益にあづかりて雨露の温潤かざるとなま水府陸地しるもしらぬも福田
 にやしなはれ動植飛沈あけてもくれても恩澤をのみ受たり凡奇巖怪石の勢の万象なる
 筆墨もうつしがたく靈樹異草の粧乃千品なる色香相兼ふり誠に選佛の場として塵俗の境あ
 わらま心あらん人たれか崇敬せざらんその山に伽藍あり菩提寺妙法寺となづく天長承和の
 頃草創わりしかども今におひては礎石かくれて知人なし大師御入定の後縣の奥繼といひし
 人堅惠法師と師檀の契をちし嘉祥二年に及て國家の御爲は佛隆寺を建立せしより僧徒住持
 して今に密教と翫とをむ

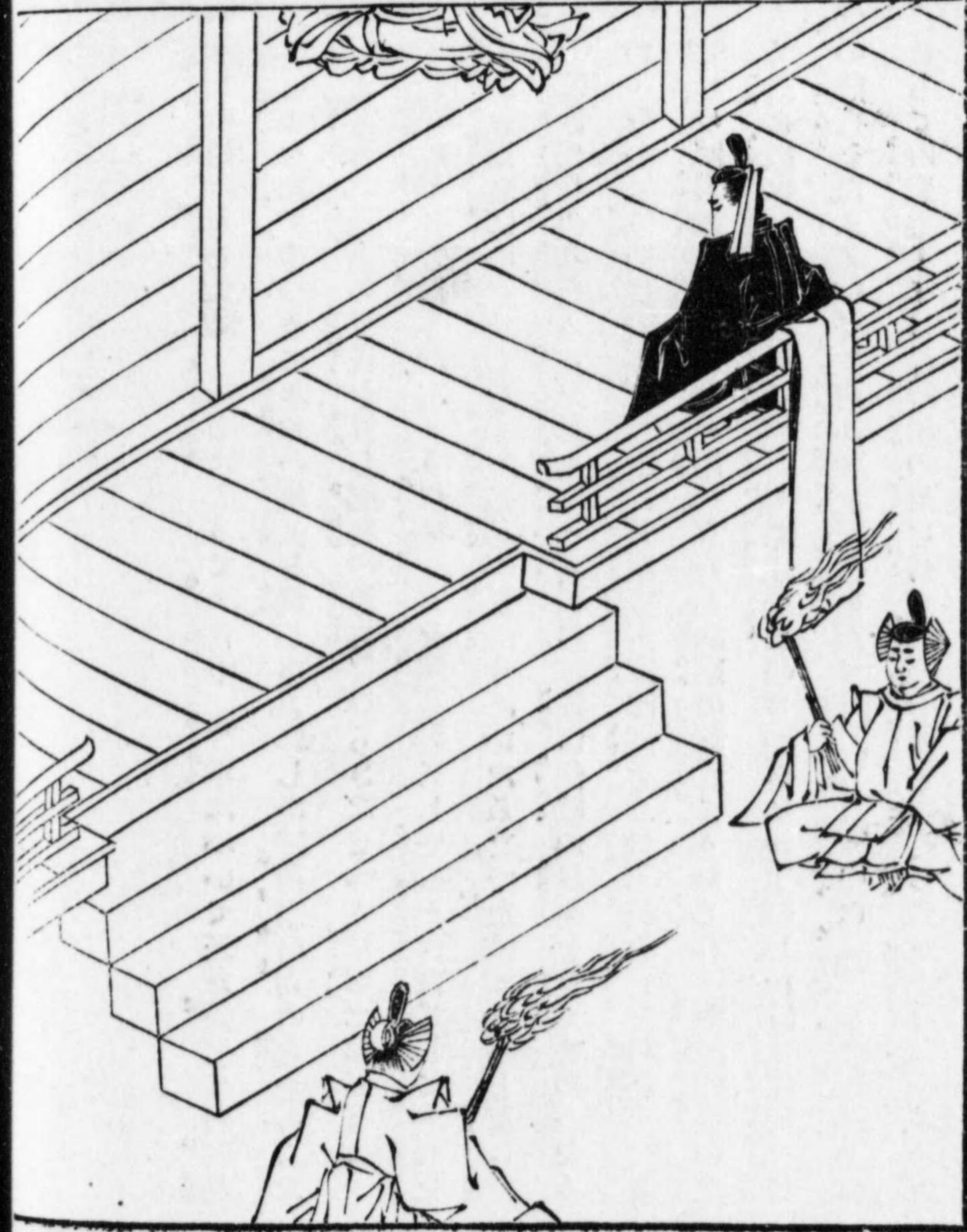
弘法大師行狀記卷之九終

弘法大師行狀記卷之十

深草の御宇承和の始に及で大師勅喚によりて大内中務省において正月後七日の秘法
 を修したまふ其後表をたてまつりて永代の規式を奏し申されしかば勘解由司の廳をあらた
 めて眞言修法院を建られ曼荼の尊像を安し秘密の壇場をひらきたまへり承和二年正月に
 師この處にして修法の軌儀を貽されしより以來長者を阿闍梨とし定額を伴僧として名籍を
 朝廷お奏し勅使を道場にのぞましむ毎年不易の嘉瑞今にいたるまでたゆるとなし誠には
 天長地久の謀理世安民の基あり情其由来を尋ねれば遙に佛國の風範を仰てまのあたり
 日域の天威とか、やかせりいはゆる三長齋月國王大臣淨戒をうけ惠施を行じ曼荼羅と建
 護摩の法を修せしめば災殃を滅し福利を増べきむね如來の誠説よりおこれり西域印度の王
 侯卿臣こぞりて是を敬ひ行へり佳風遙に傳て東土震旦のさかひにおよびしかば玄宗代宗の
 聖朝金智廣智の徳行をたふとびて禁内お神龍精舎をたて内道場の城中に灌頂の梵閣をひ
 らき長生殿をもちて内道場となされ解法の僧を召て念誦の法を行とし舞九重万乗つねに五



の 法源内正
 園 監御月
 賜修大



智の心を觀じ闕庭官寮とくぐく三密の印を持と今かの内道場に准じて此眞言院をたて勘
 解由司の廳を點じて秘法瑜伽の壇をうざる竊に傳來の由緒とおもふに誠に名時乃規摸なる
 をやおはかたこの法は大師殊に深く思召入れ數日案慮ありてははじめかれし御願なり顯密
 の義趣をあきらめ内外の支分をと、のへ法理に順じて修行せば國家安寧の基攘災招福の
 計是より最るはなしまかあるに世澆季に及で粹昔の儀又異なり精舍頽危して雨露もれ
 やそく坊宇顛倒して風霜さけがたし瑜伽の壇場香花のそなへど、のほら老曼荼の尊容丹青
 の色化せんとそいかに況や諸國の濟物名のみ残て實なし諸卿の加供廢絶して幾の年をか
 ふる君とし臣として陵夷の甚しき傷嗟ふか、るべし經の中に云新とつくらむよりはふ
 るさと修せむしうじと若祖師建壇の基跡を崇め曩代不易の道儀を興されば定て臨時鄭重
 の齋祈にも超過し新き營作の善業も踳躒せん者歟又大極殿の金光明會は稱徳天皇より
 以來 皇家歴代の御願として顯宗階業の專一かり龍象あひつまりて法義を商確せる事
 其儀尤舊たり天長年中大師請肆お選ばれ別て博學の宏材を施し給しより 後兼宗の長者
 聽衆を奉仕して論場の光綵たり承和以往は眞言院の修法いまだなかりしかば年始の齋會た

、文義を講論せといへども空しく醍醐の味を嘗るとかけたり猶し方經を披談して丸藥を服
 せざるがごとし大師此事をおほしめそふよりて上表奏達の後請經七日のあひだ吉祥の秘法
 を修せられしより以來顯秘の二趣どもに如來の本意に叶ひて現當の福聚こ、よして満てり
 兩宗の禪徒同く鳳闕に陪て 皇朝の寶祚をながく驪栗にいのりたてまつる方藥相合て花
 實兼備はるものをや子細具あは表の文にみへたり大師あまねく顯密の幽をつり權實の美を
 つくして龍尾壇に法鼓をうち眞言院お密印を揮給し後天延年中に大覺寺の定照僧都昔は跡
 をつぎて兩箇の御願にしたがへりそれより後二百餘歳の跡をふむ人なかりき永治二年に
 及て勸修寺の寛信法務二道の公役を勤て天延の芳蹤を繼たり其後承元の成實仁治の定親
 兩宗の請にしたがひしより後は其人頗希なり又正月十四日修法の結願にあたりて眞言
 の長者大師請來の法衣を着し曩祖附屬の五鈷を持して御殿お参じ 玉體に近づきて二器の
 香水を加持し一人諸臣にそ、きたてまつり慶祐を万春の旦又招き災殃を千里の外にはらふ
 是又大師のつとめ給し舊儀なり金光明會の僧侶番論義を參勤そ八宗の僧名と眞言宗の人
 是を上奏す諸宗をつかさどれるゆへなるべし又二間の夜居十八日の觀音供晦日の御念誦等

同く大師の始終給へるところあり是皆万乗の運祚をのべ八埏の煙塵をしづむる秘術あり凡
 平城 嵯峨 淳和 仁明四代の朝に仕て國家の御ために壇を建て法を修し給へる事五十一
 箇度なり情大師利生のありさまとおもふに方便善巧誠にこれ甚深なるかな東寺の仁祠に護
 國の靈像を崇て鎮に七難の災孽をはらひ乾臨の神地に无熱の龍王を請じて普く一天の慶
 雲を覆ひ 宮中の精舎あ七日の秘法をのこし室生の勝地に三密の道肝をおさめて 皇朝を
 劫石とともにし 帝徳を巨海とひとまからしむ遂に禪定の窟をしめて慈尊の會をもちたま
 ふ是又遺法を守り後生をめぐみ給ふはかりことなりされば 白河法皇大御室に 御對面あ
 りけるに法をひろめて國をまもる高僧いにしへもおほく侍れども 吾朝に殊に恩惠ふかさ
 事高野の大師にしては侍らじとこそありけれかやうれふかき旨をおぼしめし知られける
 十善の 敵慮いばかりかは大師も納受し申させ給ひけむかし
 承和元年十一月十五日諸の御弟子に告てのたまはく吾世をさらむとおもふと明年三月の中
 なり企剛峰寺草創ありといへども未功半に及ばせしかあるよ我入定せんと擬そ實惠禪師は
 國王の師として徳天下に滿り私あいとまあらざらんと眞如禪師は他境の意あり眞雅眞濟は

別人の契約をうけたり眞紹禪師は別所建立のおもひあり眞然禪師ひとり師蹤を繼ぐ念あり
 此師をもて此山を附屬そ但力あつからせ實惠禪師徳を加て建立をなさしむべし眼前み陳せ
 る如して山門をあらせべからせ又のたまはく東寺をもて實惠大徳に預く此大徳は吾滅度の
 ち諸の弟子の依師長者たるべし人の師國の寶たらむ事豈この師にしかむや仍 大經藏の
 こと一向此大徳に預く但若實惠不幸の後には眞雅法師をもて處分して封納し開合をべしと
 云へり又弘福寺をもて眞雅僧正に付し神護寺をもて眞濟僧正に預け給ふ同二年三月十五日
 かさねてもろくの御弟子たちに遺告あり天長九年十一月十二日よりふく穀味をいとひ
 て専坐禪をこのむこれみお命法久住の勝計ならびに末世後生の弟子門徒のためなりもろ
 くの弟子等あたらかにさけ汝等つゝしみて教法をまもるべし吾入滅に擬せむと來廿一日
 の寅刻なり 諸弟子等悲泣するとなかれ吾たどひ世をさるといへども兩部の諸尊を信敬せ
 ば自然に吾にかはりて眷顧し給べし吾初はかもひさ一百歳世に住して教法をまもらむとま
 かれどもあむだちをたれみて急て永く即世又擬するあり門徒數千万なりといふども併吾後
 生の弟子たらん祖師吾顔をみそといふども心あらむものかからせ吾名號をさゝて恩徳のふ

かきとをしれ是吾白屍のうへに人のいたはりをえむと思ふにはあらせ密教の壽命をまもり
つぎて麗華の三庭にいたらしむべきはかりことなり吾閉眼の後かならずまさに都卒陀天に
往生して彌勒慈尊の御前に侍るべし五十六億餘の後必慈尊の御もとに下生して吾先跡を
問べし又かつくいまだくならざらむあひたも微雲管よりみて信否を察せし此時つとめ
あるものは祐を得不信のものに不幸あらんといへり
大師御入定の期ちかくなりて御弟子眞如親王末世後生の戀慕の心をやそめむがために御影
をうつしと、めたてまつらむと思食てひそかにか、せ給けるほどお大師らにしらせ給て
開眼をば我くはふべきよし申させたまひければ親王其時御影をまいらせられけるに大師そ
なはち筆をとりて眼精をいさせ給ひけり高野山御影堂に安置せられて今にわがめたてまつ
る影像これなり 一條院の 御宇正暦五年七月十六日はからざるに雷火地を掃て雁塔煙に
昇し時軒を覆ふ翠樹みな灰とあり竟をあらふる諸堂おあじく爛に化せしかどもこの影堂あ
おひては良の隅にあたりていづこよりとも知ざるに神僧あまた出來て單衣の袖をひるがへ
し熾炎のきはへるを拂ひしによりて密室くまへかたふかせして眞影まさにあらたまるとか

し餘炎まぬかれしに及びて神僧跡と隠しかば砌あのをむ縮素怪とささ、るはあかりさ其
後 近衛院 の御時久安五年仲夏の頃うさねて天火の災おこりしに大塔金堂眞言坊等數字
の華構ふた、び一時の煙にまじはるといへども寶龍ながく相殘て影像今につ、がなし退代
不朽の靈徳定てこれ親王等信の感に答るゆへなるかとおはへ侍り
承和二年乙卯三月廿一日寅刻に宴坐して秘印をむそび恬然として禪定に入給ふ其間御弟子
たち彌勒の寶號をととなふた、御眼のとづるをもて入定の期とそひとへに生身のごとし春秋
六十二夏臘四十一なり 則 御庵室より奥院へうつしたてまつるに實惠眞雅眞如眞濟眞紹眞
然御輿をか、せ給ふ世間の法にぞらへて七日の御齋忌をおこなはる七日ごとお御弟子た
ちまいりおがみまつらせられければ顔色おどろへ髪髪ながくならせ給けり後に石壇とた
ゝみてわづかに人の出入するほどにせり其口お石の五輪の塔をたて、種々の梵本の陀羅尼
を收め又さらに寶塔を立て佛舍利をぞ安置せられける加様の事とも皆眞然僧正のいとなみ
なり同廿五日 公家 勅ありて内舍人清友 をつかはされて大師の修儀をどはしめ給ふ微音
ながく隔て繩床むなしく存じ惠炬光をかくして法雷響をやむ三密寂寥として四衆哀慟せ



御弟子の
 高僧御輿
 をかきて
 奥院に移
 奉る
 図



り中使奏聞せるに 宸悼とに深くして 朝を廢し給ふ事三日を經たり 太上天皇かたじけなく 宸筆を染て帛書を下され遺弟孤露の愁緒を慰勞し給ふ事 懇なりおほよそ法體堅固にして无來无去なりしかわれとも機縁お應じては人世に出で道品を證じては圓寂にかへるこれ聖人化度のつねの風なり爰に定力をもよほしてながく依身とといひる事大士利生乃方便誠に以て奇異なるかな寶積經に菩薩の修定お十種の勝利を擧る中に第十にて能正法を興し三寶を紹隆して斷絶せざらしむと説けり古の獻匠も法をまほり世をそくふ心のおろそかなるにあらざれどもまのあたり生死分段の腐をあらためせして遙に當來慈尊の會に相繼しひるそのためし尤まれあるをや雲居寺の瞻西上人所持の大師御筆の金剛般若經の批文に云我昔遇菩薩 堽一親 悉傳二印 明一發 无 比 誓 願 一陪 二片 地 異 域 一晝 夜 愍 二万 民 一住 三普賢悲情 一肉身證 三三 味 一待 二慈尊下生 といへり弘誓のはなはたふかく定力のまばく感ぜるところ以てしりぬべし竊におもんみれば修定多途おして顯密岐を異にせり一心の利刀を翫は顯教あり三密の金剛を揮は密藏なり昔飲光尊者の釋迦の附屬を得し定室を雞足の洞お點じ今發光大士の遮那の秘教をまゆる 禪窟と馬臺の軸にしひ令法久住の芳猷入定留身の

體儀や、相似たりといへども彼は遂に化火扇を焚てまさに三會の説時よ滅盡去是はまのわたり金剛の身を成じて妙に五智の覺位に安住をさかひ邊域にして佛生の地をさり代澆季おして正法の時隔といへども金剛定の巨益猶しこれ同日の談わらざるをや只全身を禪窟に留のみにあらせ 鎮 お影向を遺迹お加て擁護を遐邇におよほし利益と華夷にかうふらしめ給ふこと眞迹の文にのこれり 去寛治二年のとにや東寺の定額僧勝實と云し人讚州善通寺の別當に補せられてぞ下向しける彼寺にして大師の筆跡を感得せり其文云 居卜ニ於高野樹下ニ神遊ニ於兜率雲上ニ不闕ニ日々影嚮ニ檢ニ知處々遺迹ニとか、せ給けりされば高祖草創の砌棲息經行の所其地にのぞむ人は芳縁のあさからざるにやとたのもしくもはべるかな

弘法大師行狀記卷之十終

弘法大師行狀記卷之十一

東寺の灌頂院は大師在世の間いまた造畢せられされともかつく傳燈の御こゝろざしある
によりて實惠僧都にあつらへつけらる御入定の後この大徳寺務の長者として最前に土木の
成風を終給ふ一堂乃構へ兩壇のかざり大師の語おき給ところなりこれしかしながら大唐青
龍寺東塔院の道場をうつさる曼荼の尊像儼然として密嚴の舊容にむかへるかとおほへ万徳
の莊嚴赫奕として華藏のあらたにひらけたるがごとし承和十年十一月十六日僧都表とたて
まつりて國家の御ために眞言宗傳法結緣兩箇の灌頂この所にして修すべき規式を奏し申
され同年十二月十三日眞紹大法師のために傳法阿闍梨職位を授らるこれ東寺具支灌頂のは
じ先なり大師齋來の道具惠果附屬の衲衣この時これを用給へり白眉青眼の碩德羅襪をまじ
へて會場につらなる絲竹簫角の伶倫梵筵にのみみて道儀をたそく色衆四十人
十八俗の御前十八樂の御前四人勸請師一人阿闍梨の弟子十二人御後の童子四人都盧百有余
輩西院より列を整へ大馬道より灌頂院に入る梵讚空に和し音樂地をふるへり聞人感激し



実重僧都
 表と奉げて
 東寺に灌頂
 の規式を修
 一人大師
 の尊影と
 拜し
 みる
 四

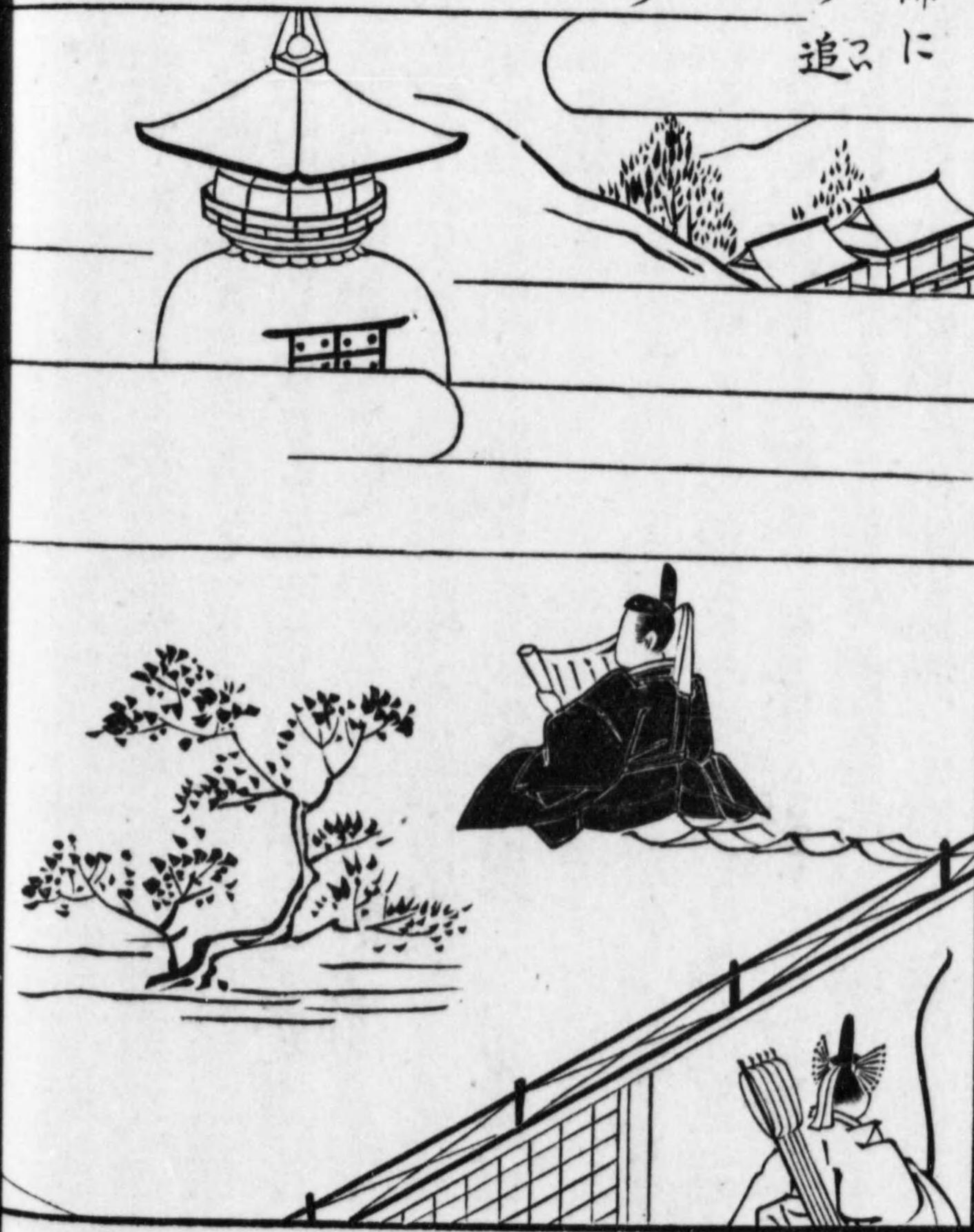


見るもの隋喜せせといふとなして、に實惠大徳戒場の砌にのぞみ高座の前にぞ、み給しと
 き高祖大師忽然として法筵に影現し給へり大徳奇特の思をなしや、しばらく眼を閉て跏趺
 せりかさねて是を見さてまつるに尊儀宛然として猶もどの如し此時おそれをなし高座の傍
 を廻かへりたまへり大師の慈顔餘人あへて見たてまつらば大徳一人是を拜したまひけると
 なむ聖者の出没は機縁の有無あまかそ權化の隱顯豈凡慮のはかる所ならむやしあかりしよ
 りこのかた高祖の宿素をかへり見先皇の牒符をまはりて宗の長官たる人この精舎をしめて
 授職の壇をかざれり中にも 繼體の天子 忝く 帝座をさりて佛家に入り祖師の先跡を尋
 て灌頂の大道をひらき給ふ事 宇多法皇はしめてその規模を殘さる所謂延喜元年十二月十
 三日園城の僧正益信を 于時一くつ 嵬して大阿闍梨とし醍醐の尊師聖寶 于時大僧 都二長者を
 とし入室の上足神日律師をもちて教授の大徳とす色衆八十餘口みなこれ法嶺の龍象惠苑の
 琳琅たり 親王公卿侍臣官寮威儀扈從雲をなし地とてらせりたゞ堯風の遠くあふぐのみに
 非ぞ又佛日の最中今まさみこのときなるをや昔无畏三藏の帝位を辭して法苑にあそび給ひ
 五智圓明の月光を中天の雲に朗にし今禪定仙院の王家を邇て道林にいり給ふ四種曼荼の藍

にはひを東寺の庭あ薫せり西域東垂土境へだ、るといへども萬乘の瑤圖をそて、三密の印
 璽を仰ぎたまふ風範や、ひとしきものをや又永延三年三月九日 圓融院に法皇廣澤の大僧
 正寛朝と師として灌頂の壇に入り給ふこれひとへに 先皇の嘉蹤をたづねて延喜の芳躅
 追へり三台九棘の賢臣劔珮を帯して綺羅をかし南京北嶺の釋衆法具を捧て威儀を整ふそれ
 よりこのかた三百餘廻の涼燠を送り徳治三年の孟春を迎て禪定 法皇遙に 宇多 圓融の
 曩行を慕ひ延喜永延の往事をうつさる法務大僧正禪助を嵬して授職の軌範とし八十餘口の
 薛衲を率して道場の色衆とそ蘭坂の瓊枝座につらなり緇林の碩材襟をまじふ大會の壯觀
 上古を摸して上古お皤磔せり
 法皇 尊儀を密壇にぞ、めましくし時地大に振動して天忽に光耀あり昔巨唐天寶年中
 開元寺の精舎にして含光李元琮がさめに不空三藏ひそかに五部灌頂を授し時その地大は振
 しかば三藏はあはだ稱嘆し給て弟子が心誠の感せる事と悦べり古をかへりみ今をおもふに
 世露澆傍にして教風陵夷すといへども豈これ渴仰の 愾信に答て天衆應を垂地祇瑞をしめ
 そにわらすや又東寺恒例の結縁灌頂は 仁明天皇鄭重の 緊詔によりて高祖大師遺告の



朝廷大師に
 大僧正の
 官并よ
 延喜帝
 大師号
 贈謚の
 図

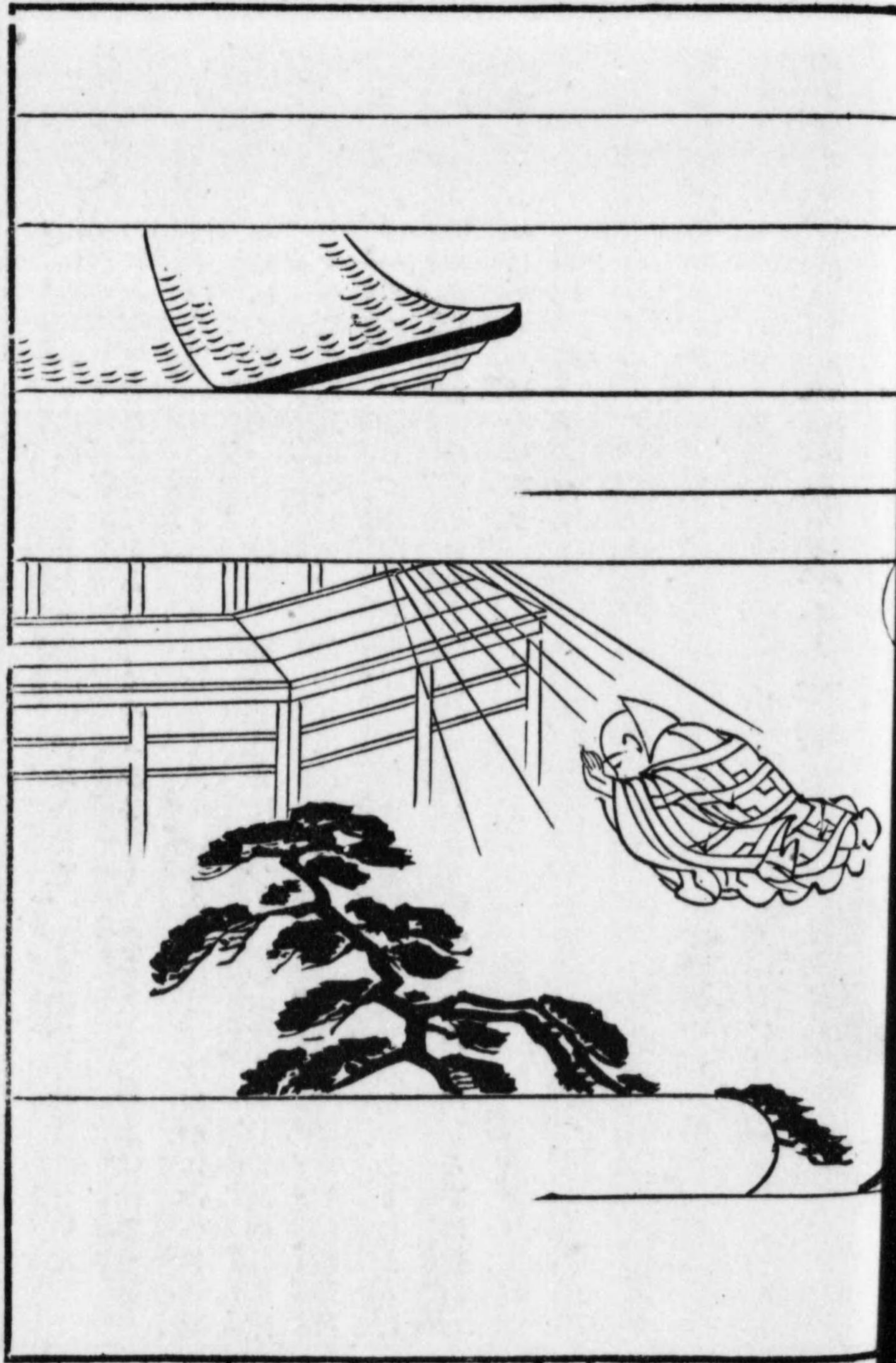


素懐をとげられんため承和十一年三月十五日實惠僧都はじめて行はる、ところあり是則
 巨唐代宗の馭曆不空三藏の表によりて大興善寺に灌頂道場を點じて三長齋月にあたりて
 四衆と輪壇に入しめし佳例なりはじめ官牒を蒙るところ青陽節をむかへ素秋時いかることに
 兩部の曼荼をかざりて五智の瓶水をそ、がしむといへども寺務事繁まて公役擁滞すべき事
 をおそれて忠仁公奏達し給ふ 承和十三年よりこのかた春節の灌頂とどめてながく修
 法の儀を轉せられ秋季の一會としを經てや、ひさしまかあるに 鳥羽院の御宇永久元年仲
 秋の頃 聖體不豫の御候によりて寛助僧正 禁中にして孔雀經の修法ありし時法驗の賞
 を蒙えに及て東寺の灌頂をして南北の齋會に因準せしめ自宗の英雄を撰て當會の小阿闍
 梨とし維摩の講匠に擬して紫衣の崇班を任せしよりこのかた上卿八座の臣雲路蘭臺の客法
 筵に列て道儀をかざりその後保延五年の夏の頃 皇子 降誕の御祈ありし時 二品法親
 王高野 修法の賞と申うけられ彼灌頂會をして承和の舊儀に復せしめ春秋二季になされ春
 節の一會をうつして仁和寺觀音院におかれしよりこのかた一宗の大業として兩寺の佳模た
 る事その儀や、舊たり情この會の儀式をおもふに晝は尸羅の梵筵とのべて緇素戒珠を慚愧

の袂あうけ夜ば曼荼の莊嚴をと、のへて貴賤覺花を渴仰の掌に捧ぐ是機非機おなじく解
 脱の臺にのぼり有性无性ひとしく惡趣の門をとづ如來加持の方便その益なははだひろし高
 祖懇懃の遺誡まにもちてゆゑあるかなこれた利益を羣機にほどこす要たるのみにあら
 ず抑又安樂を國家にいのるはかり事たり諸天影をかたふけ善神迹をたる、とこれより最
 なるはなし良縁を密壇にむそばん 輩誰か大師雨露の恩をたふとびざらんや
 文徳天皇の御宇天安元年十月十七日眞濟僧正表をたてまつりて先師の徳功大にして朝賞を
 くなきことをなげき所帯の僧正を申うけ大師におくり給べきむね奏聞ありし時 天皇こと
 に感激し給て 勅許といこほりなく同月廿七日に眞濟はもとのごとく僧正お任じ大師には
 大僧正の官をおくりたまひけり其後 貞觀六年二月十六日眞雅僧正はじめて僧綱の位階を
 奏し定められ同三月廿七日大師をして法印大和尚位に申叙し給へり
 延喜の頃 聖主御夢想の事あるによりて檜皮色の御装束一襲を高野の廟窟におくり給し
 時僧正 觀賢 勅使をうけたまはる彼僧正は尊師聖寶の付法高祖五代の嫡嗣なり顯密の幽
 致をさはめ智行傍倫にこへたり 朝家の皈依ことに盛ふして 聖主の 獻信たぐひなかり

さしかあるに入定の禪窟を開て大師の尊顔と拜せんとし給に蒙霧へだつるがごとくして眞容見へ給ふ事なしこ、に僧正悲涙をながし懺悔を凝して我五欲乃境に生るといへども三業の非違をかそ所なし何ぞ御體をみたてまつらざらむやとや、しばらく心をいたして祈念ありしかば月の霧をいでかたちの鏡にうるへるがごとくして入定の容儀まのあたり龍窟の中あわらはれ給ふ頭髮ながくおひて衣服破損し給へり僧正悲喜の涙交流して則新衣をよてまつり御髪を剃除し給けり僧正の弟子石山の淳祐その傍に伺候せられけるにおがみたてまつるやと問給ふにみへたまはぬよし申されければ手をとりて大師の御膝あふれさせ給けり其手かうばしくして沈檀の香匂あ超たり一期の間餘薫なほうせざりき僧正おもひ給はく我慚愧の衣を着ま戒行の珠をかくるもえに幸に大師の生身を拜する事をえたり若將來不信の輩ありてたどひ廟窟にのぞむといふとも業霧あひへだ、りて拜觀の望をどけせばかへりて入定の尊儀をうたがひつべしとて其後よりは緇素おがみたてまつる事とめて磨石た、みふさぎながく人の出入とやめられけり又僧正表をたてまつりて温顔蓬窟にかくれて後たゞ贈位の勅ありといへどもいまだ禮證の榮なら事を奏し申されければ延喜廿一年十月廿七日

日 御入定の後 崇飭の典を加て弘法大師となづけたてまつるべき旨 宣下せらる少納言平惟助
 北八十七年 北關の 詔使として遙に南邦の幽途あもむきけり表の文には本覺大師と申うけられけれども 詔書に三度まで弘法大師と下されけると申傳たり昔金剛三藏の震旦あ来て秘教ひろめし永泰の天子議論を東海の墳壘に送れり今高祖大師の本朝に出て眞宗を立て延喜の聖主尊崇と南岳の羅洞よくはへ給ふ故をたづね 新をしるに終をかざり遠を追ふためしこれ厚徳のしからしむるゆへなるべし
 法成寺の禪定 大相國小野の仁海僧正 千時 に御對面の次に仰られたるは大師の生身まじしく高野の靈峯におはまをといへども星霜そてにつもり時運おどろへつたなくして拜觀の望をたち更に感見の人なしかあしむへしく僧正答給とく密教の心はもとより法佛常住の説を傳へ人法々爾のむねをのぶ生身應化の利益に異にして正像末法の時變を論せせしかあれば澆季によるべからせ只信否に任せし其機もし純熟せば證理うたがひあるべからせ清信のまことをいたま給はいなごか全身と拜し給はざるべきとの給ひければ禪問 則參詣の御こゝろまをばげまざる治安三年十月十七日御出浴ありて南都七大寺御巡禮同廿三



法性寺相國
 南山へ一歩
 三拝して大
 師の生身と
 拝しよ

図



日高野の御山に着御あり山のふもとより奥院にいたるまで一步三禮身をせめ心をいたして
 定の蓬窟にのぞみ五體をなげ雙手をわはせてや、ひさまゝく懇念をこらし給まに嶺風窓をう
 ちて廟堂とぼそひらけ朝日の光を發するがごとくまて禪座のかはせはせはのかにみへさせ給
 ひき感嘆肝み銘じて悅涙袖をうるはせり渴仰まことにあつく信心尤ふかし當時の珍事未
 代の規模なるをやこの時三間の禮堂を廟壇の前にたてられ金泥の法華經一部墨字の理趣經
 三十卷三井の僧正心譽を唄して講師とし開題供養の齋筵を展しめたまふしかありしよりこ
 のかさ代々博陸の賢臣治安の佳蹟を尋て參詣の光儀をと、のへるつぶさにしるすに追わら
 せまことにいみじかりま事どもなり

弘法大師行狀記卷之十一終

弘法大師行狀記卷之十二

高野山金剛峯寺は峰入葉にそびへて華藏を心海に觀じ山兩部をかねて曼荼を石壁にあらと
 す大師法界の文に云この東西南北四維上下あらゆる一切の正法をやぶる毘那耶迦もろく
 の惡鬼神等は皆悉我法界の處七里が外に出去若正法をまもらん善鬼神等我佛法のなかみ
 利益あらむ者は意にまたがひてこの伽藍に住し擁護をなすべし相承の金剛乘乃法門流布ま
 さみそれ時あり相應 則是處なり故に鎮國安民の爲みこの幽原において除災秘密の道場を
 建立と院郭十方のさかひ本部は十天各方をしづめ結界七里の間地主山王ふかくちかひてま
 もり給はむいまわらたふ勸請したてまつる朝中の靈社一百廿所四方に 各卅社毎月日別に
 各一社を壇主とまて人法をたすけまもり伽藍を鎮將し給へど書せ給へりはかり知ぬ魔界
 なかくしりぞき善神常に住し法をまもり人をたすけ給らむ又元慶七年に眞然僧正 陽成天
 皇に奏し申さまけるは金剛峯寺は凡位の境界にあらま諸神の古跡禪聖の舊基ありわしき獸
 たけき類ありといへとも毒害をなそ事なく煩惱即菩提のとこり觀じつべし谷ふかく峰たう

けれども徑途さがしき事あり生死即寂靜のむね察しつべしと申されけり又この山に巔軸山
 摩尼峰をいふ巖所あり摩尼の峯は大師身づから如意輪の像をつくりて安置し給へり巔
 軸山又は仙宮ありて時として深山に入人これをみるとかたり傳たりしかあれば人界にして
 聖境にとなり穢土あして淨刹をうつせるはたゞの砌なり貞觀僧正の圖記の詞に周匝
 せる連峯は法佛は華臺を表し正平たる幽原は化佛の淨土に類し惡人こゝに趣けば愚谷に入
 がごとし毒獸情をあらたむる事金山の鳥に似たり繞に影をさそ物は往因を悦べし黙して止
 ものは前業を恨べしと書れたる誠み故あるもれをやおはよそ臺山一類の石を踏人は却て後
 七劫惡趣の苦報をまぬかるべきむね般泥洹の典故に出たり彼になぞらへこれとおもふも曼
 荼勸請の靈峯衆聖都會の幽窟一瞻その益尤おはかるべし若は行若は住勝利豈ひな
 しくらんや是によりて 白河院の御時近習の雲客 御前に祇候せられたりけるになとな
 く御雜談の次に 勅定ありけるは此 日本國邊鄙粟散の境なりといへども 我國主とし
 て天下に自在を得たり當時如來の在世ならむには天竺さかひ遙なりとも諸國の王の中に
 參詣してむ物をと 仰出されたりければ江帥匡房卿 御前に候けるが恐あることにては候

へどもこの 勅定いかいあるべく候らむ佛の在世にてこそ候はねども 我國の内に靈地勝
 事なきにわらず高野山にまさしく弘法大師全身をといえて入定あり是三國にたぐひなき勝
 地なり 帝都をさると繞み三箇日京師をへだつることすべて廿余里なりしかるを 我君
 まだ 臨幸なし況拾萬余の煙浪とまのきて中天の境にのぞみましますさん事更にあるべから
 せと申されたりければ 仙院深く甘心の 御氣色ありてそなはち南山の 御幸おぼしめし
 た、れけり如來の在世に諸國の王參詣あらむる御心地なりおのくへたらむにしたが
 ひて行粧をかざるべしと 仰下されければ金銀をちりばめて馬鞍をかさり錦繡をたちて服
 飾とど、のふ畫龍雲にのぼりて旌旗天に 翻り文鳳野にあふれて綺羅地をてらす 明王の
 儉約も此時はしばらくゆるさきて 御幸のありさま誠に大國にもはぢぬ程なり 即寛治二
 年二月廿二日大炊殿より 御近發あり御共乃公卿右大臣右大將顯房源大納言師忠權大納言
 雅實左衛門督家忠左兵衛督家賢皇后宮權大夫公實右宰相中將 基忠右大辨通俊三位中將經
 實殿上人内藏頭師信朝臣以下十四人藏人所武者所の 輩 十余人其内童子 平 千手丸武者所
 又候して銀の水角をかけて供奉又權僧正仁覺權大僧都隆明權少僧都寛意唐堂の法會とたす

白河法皇
商山御幸
の図



け羈旅の護持をいたさんがために 各間道を経て共に中華を辭そ是皆高野までの御共なり
 其外京出の供奉人には攝政殿 左大臣房内大臣左大將通按察使實季右衛門督俊左 中將保左
 大辨匡房侍從實隆以下卿相雲客數をつくして 尊儀をおくりたてまつり宇治まで供奉せら
 れけり當日午刻に 上皇平等院へ 入御攝政御馬并に御劔をたてまつらる 上皇又
 御馬と攝政に獻せられけり今日は南都に 御一宿東大寺別當慶信法印が住房東南院に 御
 留あり東大寺興福寺 御巡禮あり廿三日火打崎へ 着御廿四日に高野の政所へつかせ給ふ
 木御河等國司御船を儲て錦とはり茵をしく又黒木の假橋をうまゑて雑人等を渡せ 則慈尊
 院へ入らせ給御堂の北乃やを御所とぞ同廿五日乃丑乃刻に 御歩行よて 御登山あり夜の
 中たるによりて侍臣以下松明とぞる權大納言師忠仲實朝臣時々 尊儀とたそけよてまつる
 奇巖峻阻乃路をも雲影に伴て攀深谷縱横の 梯をも鳥聲を踏でわたる 仙步敢てわづら
 ひなく 御願忽に成んどおぼゆ豈た十善の宿因のみならむや多くはこれ三寶の冥助な
 り申刻に笠木坂に 着せ給ふ彼處に寺家御所をしつらふ三間一面の御所兩方に 各五間の
 板屋をかまへて公卿侍臣の座とぞ皆これ假屋なり今日御山へ 着せ給ふべき處に日既に晩

におよぶらへ 御窮窟をやすめたてまつらむがために俄に議ありてこの所に 御一宿わ
 り人々荆棘をつかねて枕とし蓐苔をはらひて越とし侍けり
 同廿六日笠木坂の御宿より山上中院へ 入御寺家の沙汰として御所みを新造と同廿七日
 に先奥の院へ 御恭御經供養あり金泥法華經一部墨字理趣經三十卷開題せらる廟壇の前
 に導師呪願の高座をたて東西南北に七僧の座をまうく七僧の座の東に三十人の座をしきて
 住山の僧題名をわぐ石壇の上に卅萬燈とぞもさる禮殿の北の庇に 上皇の 御座をしつら
 ふ御導師法印權大僧都隆明 呪願長者權少僧都定賢三禮權少僧都寛意なり頼昭澄成永壽維
 覺唄散花等の役とつとむ其時御導師の啓白お昔釋尊の悉達太子よりし時皇城を辭して道
 に歸し今太上皇の寶位を抛て靈巖に攀踏 往昔未聞將來又可難この詞いまだおはらざ
 るに隆明身づから涕泣と貴賤涙をのこはせといふ事なしこれ風月の金句にあらねども道理
 のいたり感志をもよほす故なり此間 公家より頭中將源 雅俊朝臣を 勅使として御誦
 經物をたてまつらる又 上皇 權大納言師忠もて勳賞を 仰らる三口の阿闍梨を置て傳
 法灌頂をつがしめ大塔を造立して齋儀に復すべきよしなり御經供養の後禮殿にして卅口

の住侶ともて理趣三昧をおこなはる禮殿の南の方に三間の假屋を立て 御聽聞所とて其後
長者定賢僧都大師御筆二卷をたてまつる權大納言雅實卿これと傳へ進を事終て 上皇中
院へ 還御ありける

同廿八日に御影堂へ 御参あり執行良禪たりといへども凡鄙の身 御前へ進がらゆへ
に寛意僧都仰によりて堂の戸をひらく大師の御影を禮拜し在所什物を 敵覽あり御共の侍
臣庭上に徘徊して三鈴の松の由来をどひ聴て結縁の爲に 各其枝を折て 懐よそ此間長
者并に三綱等の祿物を給てのち藥師堂へ 御参をちち中院へ 入御あり廿九日に 還御
すべて始中終の儀式くはしく注するにおよばせ大師入定後二百余廻におよぶといへども
いまだ 上皇の 臨幸をさかせ承和の 聖代より以御一十九代をへしかども尙この山の
御ゆきなかりき寛治いま希代の例をのこさるこれ一旦の 敵信のみあらず定て多生御宿
因たらむかし遙に 都城の霞を出て紀州の靈地に 幸し遠く深山の露をわけて坐禪の廟嵐
に詣給へるふうき 御志 大師いかばかりか御納受ありけんそれよりこのかた明時住例
として代々の 上皇 仙躰を促すいみじかりし事どもなり誠よこの山は諸佛常住の峯冥

衆守護の洞なれば一度あゆみをここふ人はながく三途のどぼそをどち一念信心ととる者は
必二世の望とどぐ心ある人は欽仰の志をつくしまとあらん類は衆詣の願をどぐべきに
や

弘法大師行狀記卷之十二 大尾

弘法大師行狀記跋

惠乘於終焉之際遺告生徒曰余寓居于當寺有年於茲遂陳平生之力描繪我弘法大師行狀記蓋欲使人知大師之所以爲大師也庶幾永藏完璧長久院而宜續吾志矣然後住持不能其事而轉住于他寺已二世矣嘉永巳酉年小僧尋清來住于當寺歎盛舉之廢置於是乎盡衣鉢之資就事於茲聊報高祖無窮之德者則所以續惠乘之業也

庚戌之秋八月

江都長久院住持 尋清謹誌焉

是以考之欽其德者因是以識之則其大師之所以爲
大師益以顯然矣是則前世撰者之意而吾儕所報於
師德之微衷也已矣冀世之向斯道者潛思而觀焉

天保四年歲次癸巳冬十有一月於東武之客舍

東寺十輪院住持 慧乘謹誌

玄々憲謹錄

明治廿七年二月廿三日印刷
明治廿七年三月三日發行

金貳拾錢

編輯者 故人 東寺沙門一音

發行者 河村泰太郎

京都市上京區木屋町通二條下ル
東生洲町廿番戸ノ内一號

印刷者 瀬戸清次郎

京都市上京區木屋町通二條下ル
四十八番屋敷

發行所 一切經印房

京都市寺町通二條下ル

賣捌所 河合卯之助

京都市飯倉町五丁目

賣捌所 森江佐七



一切經印房發賣略目

●一切經

卷數六千九百三十卷
冊數二千九十四冊
帙數二百七十五帙

帙入全部正價金四百五拾圓

外ニ金六圓假箱代金四圓荷造代

但一切經中何れにても端抜賣可致候

●續藏經

新版出來之分より順次發賣仕候

●大般若經六百卷帙入全部

極上等紙金泥外題正價金百五圓
並上等白紙外題正價金九拾圓
外ニ假箱荷造代金貳圓廿錢

但壹卷ニ付極上等金貳拾錢並上等金拾七錢五厘○無帙各金三圓引○全全部裏打金貳拾五圓増○全特別上等仕立天地金中金襴表紙裂帙入金五拾圓増

●卷摺大般若經六百卷全部 近出版

右字體寸法卷摺本等都て比叡山版と同一にして只相違の点は夜間具續に目の草臥ざる様無
野に致え有之候のみ紙質は極厚口字和島仙華の上等を用ひ印刷と鮮明而して代價は廣告の
爲に數年間非常の大勉強を以て原價にて發賣の順備中ニ付出版の上と澤山御申込被下度候

權田雷斧僧正法話

●說教能作因第壹

上等洋紙印刷鮮明西洋假綴頗る美本
全一冊正價金拾五錢 郵稅四錢

斬新の言奇抜の語を以て毀佛家の腦髓に一針と加ふるものは能作因なり懇々の説切々の論
を以て信佛家の精神に満足と興ふるものは能作因なり而して著者は雄辨家として説教に巧
なる權田雷斧僧正か邪教の妄を挫ひて正教の眞を顯はし以て密宗安心の至要を述べられし
頁書なり實に説教者の好材料信佛家の良階梯なれば速かよ一本を購ふて以て座右の友とな
し玉へ

權田雷斧僧正編輯
橙樹齋藏園崖書

●興教大師眞實傳

上等洋紙印刷鮮明西洋假綴頗る美本
全一冊正價金拾五錢 郵稅金四錢

高橋實五郎先生編輯

●心學道話叢書

洋裝頗る美本全部十三卷合本全一冊
正價金拾五錢 郵稅金六錢

本書は道話中の泰斗たる道二翁の童蒙訓賣ト先生の糠俵寂照軒の家内用心集無極庵の我身
の爲村井由清の百物語の五書を合本せしものにて修身齊家の心掛ある人は勿論世の教育家
諸君の子弟薰陶僧侶諸君の説教參考に欠くべからざる書なり原本大部あして高價なるを以
て今般上等洋紙にて印刷鮮明なる縮刷とし廉價に販賣と速に御需を乞ふ

松亭金水釋
玉蘭齋貞秀畫

●善惡因果經和談圖會

全部六卷
合本全一冊
正價金廿五錢
郵稅金六錢

厚譽春鶯和上舊述
辻本基定圖會撰次

●西國十三所觀音靈場記圖會

全部五卷
合本全一冊
正價金廿五錢
郵稅金六錢

山田意齋叟參考
前北齋正老人繡像

●釋尊御一代記圖會

全部六卷
合本全一冊
正價金貳拾錢
郵稅金六錢

枸杞菴一禪居士編輯
松川半山畫

●三國七高僧傳圖會

全部六卷
合本全一冊
正價金廿五錢
郵稅金六錢

●弘法大師行狀記

全部十二卷
合本全一冊
正價金貳拾錢
郵稅金六錢

●親鸞上人御一代記圖繪

全部五卷
合本全一冊
正價金貳拾錢
郵稅金六錢

前五書共原本都て大部にして高價あるを以て今般上等洋紙にて印刷鮮明頗る美麗なる洋装の縮刷とし廉價に發賣と速に御需と乞ふ

●霧海ノ南針

上等洋紙印刷鮮明洋装頗る美本
全一冊 正價金廿五錢郵稅六錢

本書「霧海の南針」は七朝の帝師たる夢窓國師の有名なる夢中問答と堅忍勇健の徳を以て大藏經を刻せられざる鎮眼禪師の假字法語(一名五蘊の解)を縮刷合冊せしも乃にて佛學の要領禪海の波瀾を初學者の爲めに深切に説明せしものなれば世の禪學に志す人は是非一本を購求して坐右に備ふべき初學必要の寶書あり

無住法師著

●聖財集附妻鏡

上等洋紙印刷鮮明洋装頗る美本
全一冊 正價金廿錢郵稅四錢

此書は聖一國師の法師無住一圓長老前きに沙石集を著はし後に此集を著述せらる師は顯密禪律兼通乃宗師として此の集には廣く七聖財の義を示し後に四句に依て詳かに諸宗の奧儀を該羅し顯密性相禪教聖淨の深理を詳説し學佛者の龜鑑とせられたるものなれば僧俗に抱はらず坐右一部を備へて具ふ聖財中の聖財たる珍書なり且同師著妻鏡も具俗共に坐右に備へて暫くも相離れざること妻妾の如くそれは世出世の大利益を得るなれば本集に附する事とせり

妙心貞山老師 井雪禪師序文
永源臨應老師 各題字
瑞龍禪外老師 丹後安藤瓊巖師著述

●安心直話說教自由辨 半紙本和綴全一冊
正價金拾五錢郵稅四錢

今や宗旨を擴張するは說教を最と想ふに各說教の頁書巨多なりと雖も多くは譬喩因縁の說を布衍するにあり方今文化隆盛日新の世に當りて說教を蔑視するの徒なき非と故も師は宗意安心立命の旨趣を以て簡易に傳説し信愛の基礎を培養せん爲め説教自由辨と題し向上の一看子と横說豎說して離僧の楷梯に充てんと乞ふ說教演說に志しあらん人は必そ一讀し應病與藥の良益に供せられんことを

●無住國師妻鏡 西洋假綴全一冊
正價金三錢郵稅二錢

●鏡眼禪師假字法語 西洋假綴全一冊
正價金五錢郵稅金二錢

一名五蘊の解
本書は婦女幼童も一讀會得し得る様な文字にて深切み説示されたる者なれば檀信徒への進物及施本にと無比の適書あり

河村與一郎編輯

●慷慨家詩集 上等洋紙印刷鮮明洋裝頗美本
全一冊減價金廿錢郵稅金四錢

此書之維新前後國事に奔走し王家お勤勞せし雄君英士志人の時に觸る物に感し平生胸間に包蓄せる慷慨悲憤の至情より出て、詞藻となりしものを採集したれば一讀其人の風采と追想せしむる耳ならそ看て以て慨く可く忿る可く切齒扼腕坐に我國固有の元氣を勃興せしむ乞ふ青年諸士壹部を坐右に置き日本男子たるの名に背かざらんことを

丹城逸人著 附劍舞詩集假洋裝全一冊
減價金拾錢郵稅金二錢

●雄壯活潑劍舞之法 該書は著者か若辛經營を以て劍舞の方法數十を詳記せし者にて一字毎に手足の動作着眼の方等を細折明記し其文之勉めて平易を主としあれは何人と雖とも一目氷然たる空前絶後の珍書なり而して晩近世を行はる、劍舞の書數多あれども方法は僅々二三を示すのみ是等の書と同一視すべきものにあらそ江湖の青年諸君須く一本を坐右に供し此の惰眠攪破の劍舞を演して勇壯活潑の元氣を鼓舞し寔に日本國民忠良の士氣心を勃興せられんとを發見書肆偏に希ふ

●普通作文新書 上等洋紙印刷鮮明百五十余頁
全一冊 正價金七錢郵稅四錢

●女子作文新書 上等洋紙印刷鮮明百五十余頁
全一冊 正價金七錢郵稅四錢

前二書共至極美麗にて格外の廉價なるを以て御進物に妙なり澤山御注文を希望と